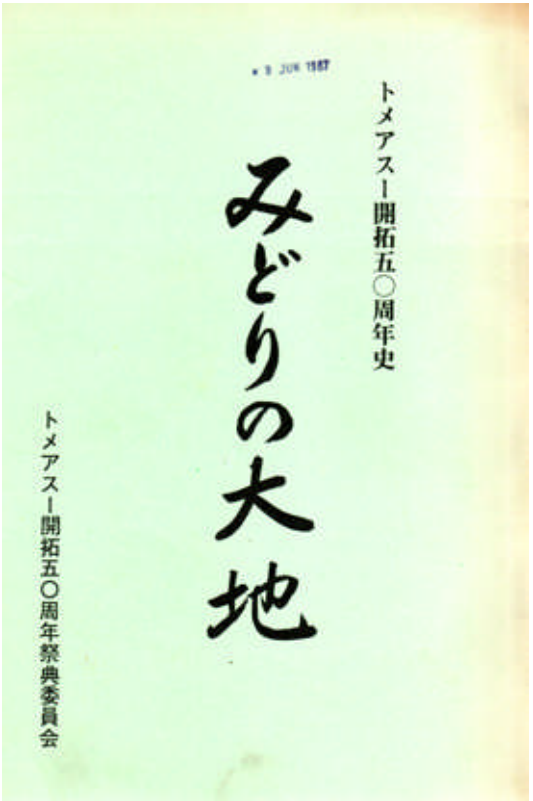


みどりの大地トメアスー

トメアスー開拓５０周年史

１９２９～１９７９

トメアスー開拓５０周年祭典委員会

バラー栗の　花散りやまず　ふく風も　湿りふくみて　雨期にいりゆく　―古岡敏子―

バラー栗　柳切地区善塚のカスタニヤル樹（樹令五〇年）

皇太子ご夫妻アマゾンへ

一九七八年六月一八日、サンパウロで盛大に挙行された日本移民七〇年祭記念式典にご出席された皇太子ご夫妻は、二三日ベレン空軍基地に到着された。

ベレンでの歓迎式典はテアトロ・ダ・パス（平和劇場）で行なわれ、皇太子さまは「一一年前、ブラジリアの近くで、ベレンの方へ流れる川のほとりにたたずみ、その水のそそぐアマゾン河に思いをはせましたが、このたびアマゾン河口、ベレンの地を訪れることができ、感慨深いものを覚えます」とあいさつされた。（写真上）

日系農業者によってトメアスーやベレン近郊で生産される農産物をご覧になるご夫妻。（写真中）

会場内に持ち込まれたピメンタ・ド・レイノには特に興味を持たれ、熱心にご質問になった。（写真下）

一人一人の前に立ち止まられて、親しく声をかけられるご夫妻。平和劇場での歓迎会では、七百人の日本人による「皇太子ご夫妻万歳！」の声が、劇場いっぱいに響いた。

皇太子さまはアマゾン初期の開拓の苦闘におくわしく、当事者たちを慰められ、先駆者たちの話に、開拓当時のことをしのばれて、現在の成功を喜ばれた。

アマゾニア日伯援護協会経営のアマゾン病院をご訪問されたご夫妻は、病院内部を視察された後、経営や運営にたずさわっている人たちを激励され、福祉の状態に強い関心を示された。

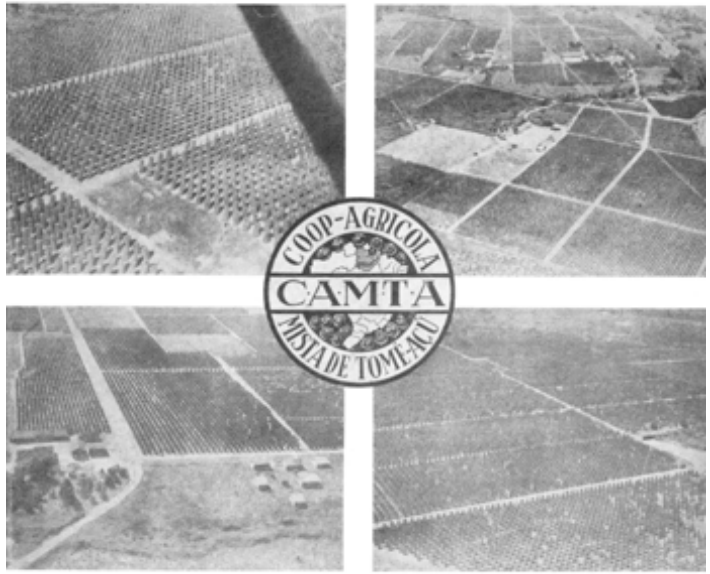
皇太子ご夫妻アマゾンへ

一九七八年六月一八日、サンパウロで盛大に挙行された日本移民七〇年祭記念式典にご出席された皇太子ご夫妻は、二三日ベレン空軍基地に到着された。

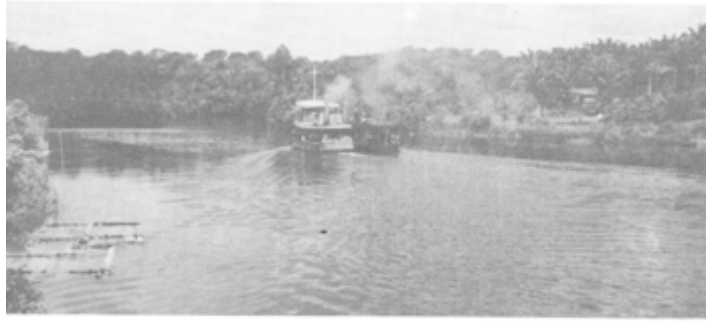
ベレンでの歓迎式典はテアトロ・ダ・パス（平和劇場）で行なわれ、皇太子さまは「一一年前、ブラジリアの近くで、ベレンの方へ流れる川のほとりにたたずみ、その水のそそぐアマゾン河に思いをはせましたが、このたびアマゾン河口、ベレンの地を訪れることができ、感慨深いものを覚えます」とあいさつされた。（写真上）

日系農業者によってトメアスーやベレン近郊で生産される農産物をご覧になるご夫妻。（写真中）会場内に持ち込まれたピメンタ・ド・レイノには特に興味を持たれ、熱心にご質問になった。（写真下）

写真でみる50年



大地いま胡椒の花を咲かせけり ―横倉牧民―



行水す裏戸アマゾン河明り ―吉丸丘南―

トメアスーの明日をになう子供たちが、アマゾンの輝りつける太陽の下で、すくすくと育っている。(バックの建物は学生寮)

秋天下クシュウ大橋渡り初め　横倉牧民

植民地開設当時、トメアスーの波止場で入植者を迎える人たち（上）。
第一回移民が上陸した時のベレン移民宿泊所用の桟橋（中）。ベレン～トメアスー間を就航していたトメアスー組合の所有船アントニーナ号（下）。

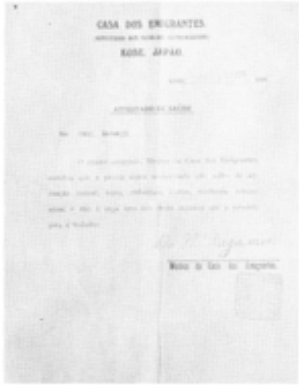
アカラ郡の所有船"サン・ジョゼ・ド・アカラ"。

去る移民着く移民あり花胡椒

阿部冬月

ベレンまで十五時間の川若葉

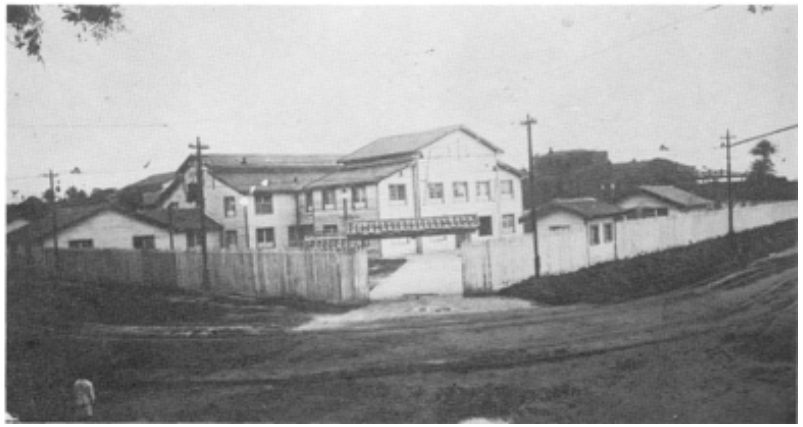
吉丸丘南



神戸移民収容所での健康証明書。

外務省派遣アマゾン調査団々長・福原八郎氏（前列左）とコンデ・コマで知られた前田光世氏（右）。

移民史に残る日々あり浅茶漬 ―阿部冬月―



ベレンの移民収容所建物。

開拓初期の入植者たち

胡椒若葉女の声のよく透る

—江畑杜志—

トメアスー中央病院（一九三三年）

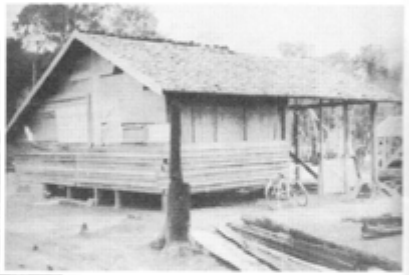
四男四女アマゾン生れの移民祭

—藤橋耕春—

若者たちのいこいの場だったベレン市の動植物園（1938）

開拓初期のスナップ
犬も子供の子守役（1936）

橋爪会館



入植当時の住居

1960年代に入って到来したピメンタ・ブームは入植地の経済を潤し次々に立派な邸宅が建てられた。

稲妻は隙間ばかりの移民小屋 —江畑杜志—

JAMIGO（後）にトメアスー事業所

トメアスー桃園に到着した新移住者

トメアスー植民地五〇年祭典スナップ

"ピメンタの里"トメアスー五〇年式典は、一九七九年一一月八日、盛りたくさんな行事で盛大に行なわれた。

文協会館での式典で挨拶するアラシジ・ヌーネス州知事。

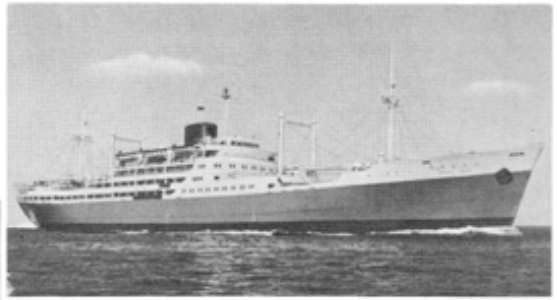
村守る心の豊かさよい未来

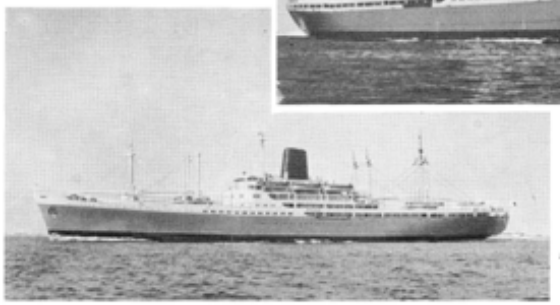
—峰下妙子—

展示会場での州知事一行。

日本庭園に建立された千葉三郎先生の胸像（上）と、千葉三郎通りの開通式（下）

戦後南米への移住者を最も多く運んだ"ぶらじる丸"。





"あるぜんちな丸"。

1962年、神奈川県にあるエリザベス・サンダース・ホーム園長沢田美喜女史は、トメアスー植民地を視察、同園出身の子供たちが将来伸びる場所として、その農場を第2トメアスーに決定した。

1967年、皇太子ご夫妻の来伯を記念して、トメアスー村の開拓功労者が表彰された。

祭典当日、中心部の大通りにはヌーネス知事(中央)によって"千葉三郎通り"と命名された。

アマゾニア熱帯農業総合試験場の展示会場。

農産品展示会場入口の巨大なマンジオかいも一株。

婦人たちの踊り。

ミス・トメアスーの選出。

パチさばきもあざやか……。

盆踊りはやぐらを組んで本格的に……。

記念大運動会。

相撲大会(準青年の部)。

発刊のことば

トメアスー５０周年祭典委員長
トメアスー文化協会会長
大沼春雄

このたび、トメアスー５０年の歩み『みどりの大地』が在住者の手で発行されるころになり心からその慶びを表するところであります。

本年はトメアスー植民地開拓五〇年目に当ります。一九二九年（昭和四年）九月、南米拓殖会社よりの移住者、単独青年を含む一八九名がこの大地に最初の一歩を踏み入れ、開拓の一斧を振って以来五〇年、その間には、到底筆舌には尽せぬ幾多の苦難を乗り越えて今日の繁栄に至りました。

多くの先駆者の犠牲的精神、フロンティア精神の賜と賞する次第であります。惜しくも開拓途上において、マラリアの蔓延や黒水病などで若くして逝った先没者に対し、深甚なる冥福を祈り黙祷を捧げます。

現在非常に厳しい国際情勢の中で、アマゾン移民発祥の地を守り、トメアスー植民地再建のために不屈の開拓魂を燃やしている三百数十家族の日系人が、今もなお農業に徹して頑張っております。

千古の森に斧を振って五〇年、人跡未踏の原始林は今や文化躍動の地となり、伯国政府が二一世紀の国造りと、アマゾン開発にかける日

本人への期待も大きく、その農魂は二世、三世へと受け継がれ、日本人の血脈はえんえんと流れております。

今日この記念誌発刊に当り、トメアスー在住者のひとりとして、未来永劫にわたる植民地発展の健闘を祈り、発刊のことばといたします。

目次

みどりの大地
トメアスー入植５０年史

グラビア（写真でみる五〇年）

発刊のことば　大沼春雄

五〇年史発刊を祝して……石川賢次

五〇年史発刊を祝う……仁科雅夫

五〇周年へのメッセージ……ジョン・フィゲイレド

目伯友好協力のきずな……アラシジ・ヌーネス

ブラジルの良き市民として……園田直

高く評価された日本移民の貢献……大口信夫

五〇年史発刊に寄せて……山田元
五〇周年を祝う……田付景一
日本人移住者の努力が結実……石川賢次
五〇周年へのメッセージ……ベニグ・ゴエス・フィーリヨ
式典開会の挨拶……大沼春雄

第一部　トメアスー植民地沿革史　２２

南米拓殖株式会社の設立
先発隊の出発　２６
第一回移民入植
アカラ野菜組合の誕生
多難だった開拓初期時代
事業縮小と福原八郎の帰国　３１
産業組合の創立
第二次世界大戦中のアカラ植民地
アカラ農民同志会成る　３６
ウニベルサル号進水す
ピメンタ・ド・レイノ時代来る
戦後移住　４２
第二トメアスー移住地　４４

第二部　産業組合の設立とトメアスーの産業　６３
トメアスー郡の創設
トメアスー総合農業協同組合　６８
マオカ農場　７５
エリザベス・サンダース・ホームのアマゾン進出
ピメンタ抽出事業の着手
組合に功労のあった人々
第三部　トメアスーの文化活動　８２
トメアスー文化協会
トメアスーの教育
トメアスーの保健衛生
トメアスー連合婦人会　８９
トメアスー日伯青年会
トメアスー新聞
トメアスー俳壇　９６
芸能クラブ
囲碁クラブ
アマゾン国際農友会
トメアスー新聞より／コロニア融和への橋渡し
第三トメアスー土地問題

第四部　思い出で綴る五〇年　101
トメアスー移住五〇年祭に寄せて・中村浩二
五〇年祭祝典に寄せて・松崎徳次
父をしのんで・田中紀久子
再びトメアスーへ・植木等
アマゾンの思い出・勝本志郎
アマゾン野生動物について　須藤忠
開拓五〇年祭を迎えて　平賀清子
南拓社員先発第一船で赴任した思い出・服部連太郎
アマゾン移住五〇年祭に思う・臼井牧之助
トメアスー雑感・八重尾直忠　116
トメアスー第二移住地について・生島重一
看護団の方をお迎えして・池上あけみ
入植当時の思い出・押切愛子
五〇年史の中での戦後第一回移民の歩み・松永年四雄
トメアスー開拓五〇年祭典をおえて・上森六国
皇太子ご夫妻に拝謁して・平賀練吉
トメアスー野球五〇年の歩み・戸田子郎　143
前田光世について・甲斐信一郎
機会があれば再び訪ねたい・吉田浪子
ピメンタの由来・長尾武雄
トメアスー郡長時代の思い出・沢田脩

戦後移住・横倉信由
郷愁・横倉牧民
（追悼記）平賀練吉

第五部　年表・参考資料　１６６
アマゾン地方に於ける農業と経済……阿部昇
大カラジャス総合開発計画について……栄田剛
マンジョカ・アルコール計画について……白井凡生
アマゾン熱帯農業総合試験場……
ピメンタ・ド・レイノ由来記……星野修
コショウ・フザリウム病の総合考察……浜田正博
オイルパームの収量に関する試験……浜田正博
胡椒根腐病及び胴枯病……

第六部　受章者・入植者名簿　２１０
章を受けた人たち
トメアスー植民地入植者名簿　２４８
出身県別在住者名簿
植民者氏名表
先没者名簿
五〇年祭慶祝団名簿
編集後記

（文庫編集部注・祝辞は省略させていただきました）

五〇年史刊行を祝う

トメアスー五〇年史発刊を祝して

在ベレン日本国総領事館

総領事　石川賢治

不肖私は在ベレン総領事として三年間、誠心誠意日系コロニアの発展のため、最大限の努力を傾注してまいりました。この間、トメアスー植民地の方々には、終始一貫ご支持とご協力をいただき心から感謝しております。（以下略）

トメアスー開拓五〇年史発刊に寄せて

トメアスー総合農業協同組合

理事長　山田元

（以下略）

五〇年史刊行を祝う

国際協力事業団ベレン支部長

仁科雅夫

（中略）

トメアスー在住の皆々様のご健勝、ご発展をお祈り申しあげます。

５０　ＡＮＩＶＥＲＳＡＲＩＯ　ＤＡ　ＣＯＬＯＮＩＺＡＣＡＯ
ＪＡＰＯＮＥＳＡ　ＮＡ　ＡＭＡＺＯＮＩＡ

Ｊｏａｏ　Ｆｉｇｕｅｉｒｅｄｏ

Ｐｒｅｓｉｄｅｎｔｅ　ｄａ　Ｒｅｐｕｂｌｉｃａ　Ｆｅｄｅｒａｔｉｖａ　ｄｏ　Ｂｒａｓｉｌ

日本移民アマゾン入植５０周年を祝して

ブラジル国大統領ジョアン・フイゲイレード

二月四日でアマゾン地方に入植して以来、五〇年を経た日系移民を祝して日伯アマゾン協会によって催される記念行事に、心から満足とお祝いの意を表するものであります。

今から五〇年前、アマゾン地方を開拓するブラジル人に協力するた

め、最初の日本人が入植しました。そして厳しい環境の中で、国内の他地方に入植した日本移民と、その子孫たちが示している通りの特長、また勇敢さで働いてきました。

この輝かしい努力の結果は、トメアスーで慶祝行事の一環として開催される農工業展に明確にあらわれることでしょう。

アマゾン地方の日系コロニアは、われわれの最高の尊敬に値するもので、ここに私の心からのお祝いのメッセージをお送りいたします。

アマゾン移住五〇周年への祝辞

日伯友好協力のきずな

パラー州知事　アラシジ・ダ・シルバ・ヌーネス

我々がアマゾンの日本人移住五〇年祭を祝っておりますこのプログラムは、本日、その最も意義深い日を迎えました。ベレンおよびカスタニャールにおきまして、種々の行事がとり行なわれましたが、これらはすべてこの五〇年間、日本人とブラジル人との間の兄弟関係を顕著なものとしてきた友好と協力の絆を強化することを目指したものでした。（以下略）

ブラジルの良き市民として

日本国外務大臣　園田直

本日ここに、アマゾン日本人移住五〇周年祭が盛大に挙行されるに当り、お祝いのことばを申しあげる機会を得ましたことは、私の心から欣びとするところであります。（以下略）

高く評価された日本移民の貢献

在ブラジル日本国大使館

特命全権大使　大口信夫

日本移民アマゾン移住五〇周年にあたり、コロニアの皆様に一言ご挨拶を申し述べる機会を得ましたことは、私の大変欣びといたすところであります。

今般ベレン、トメアスーおよびマナウス各地に於て催されました「日本人アマゾン移住五〇年祭」に際し、私も名誉総裁としてお招きにあずかり、妻同伴のうえ祝典参加の光栄に浴しました。

コロニアの皆様方の一致団結した熱意と努力、州当局の絶大な協力、わが領事館の協力が一体となって、準備万端に当った結果として行事はすべて順調に進み、日本およびブラジル各地からの慶祝団多数を迎え、祝典は非常に盛大でありました。

特にパラー州の協力は大変なもので、ヌーネス州知事ご夫妻（以下

略）

五〇周年を祝う

アマゾン日本人移住五〇年祭慶視団団長　千葉三郎代理

田付景一

本日ここにアマゾン日本人移住五〇年記念式典を挙行されるに当り、アマゾン地域在留邦人各位に対し、祝辞を申し述べると同時にヌーネス知事を始め、ブラジル官民のご好意に感謝の辞を述べる機会を得ましたことは、私の最も欣快とするところであります。

顧りみますに、アマゾン地域への本格的な日本人の移住は、一九二九年、南米拓殖会社創立以来で、本年をもって五〇年になりますことは誠に慶賀にたえません。

当時アマゾンには猛獣、毒蛇が跳梁し、人間の住む所ではないと日本国内で宣伝され、また当地のコロニア〝アカラ〟でも、マラリア等の熱帯病がはびこり、せっかく入植した人々も、主作物の選定が当を得なかったため不安を覚え、退耕者が続出して実に惨胆たる状態でありました。然るにピメンタの導入以来、経済的にまた社会的にも信用が高まり、加うるにヌーネス知事を始め歴代の州知事および州議会、ならびに関係官庁の強いご協力によって、いよいよ日伯両国民の親善の実を挙げるようになりました。

特に昨年は日本より皇太子殿下ご夫妻が当地をご訪問され、皆さんから心からの歓待を受けましたことは、感激のいたりでございます。この機会に、アマゾン開拓の先駆者として、不幸にも雄途半ばにして

倒れ、ブラジルの土となられた物故者のご冥福を祈る次第であります。

終りに当り、偉大なる友邦ブラジル国の発展と隆昌を祈念すると共に、同胞各位の一層のご発展、ご自愛を念願いたしまして、挨拶にかえます。

（遺稿）

日本人移住者の努力が結実

在ベレン日本国総領事館

総領事　石川賢治

本日ここにトメアスー在住の同胞の皆様がこの良き地と金婚式を挙行されるに当りお祝いを申し述べることができますことは、私の至上の光栄とするところであります。

トメアスーにおける式典開会の挨拶

トメアスー入植五〇年祭典委員会

委員長　大沼春雄

（略）

万堂の皆様、開会にあたり謹んでご挨拶申しあげます。本日のトメアスー入植五〇年式典には、パラー州知事アラシジ・ヌーネス閣下ご夫妻、陸軍長官ルイス・ピーレス・イルハリ・ネット閣下、海軍長官ジョゼー・カルペンチ・アランダ閣下、空軍長官フルスペロ・プナロ・バラタ・ネット閣下、在伯日本国全権大使・大口信夫閣下ご夫妻、日本国慶祝使節団団長・千葉三郎先生ご夫妻、在ベレン日本国総領事・石川賢治殿ご夫妻を始め、ブラジル、日本朝野の紳士・淑女かくも大勢のご列席を賜りまして、盛大にかつ厳粛に挙行の運びとなりましたことは、誠に有難き仕合わせで、欣快これに過ぐるものはありません。

この祭典の準備につきましては、パラー州知事、トメアスー郡長のご援助はもとより、日本国朝野の尽大なるご援助を賜りました。またベレン市近郊、さらにサンパウロ市に在住する個人や商社の方々にも多大なるご支援をいただきました。（以下略）

第一部

トメアスー植民地沿革史

一、南米拓殖株式会社の設立
二、先発隊の出発
三、第一回移民入植
四、アカラ野菜組合の誕生
五、多難だった開拓初期時代
六、事業縮小と福原八郎氏の帰国
七、産業組合の創立
八、第二次世界大戦中のアカラ植民地
九、アカラ農民同志会成る
十、ウニベルサール号進水す
十一、ピメンタ・ド・レイノ時代来る
十二、戦後移住
十三、第二トメアスー移住地
一四、第三トメアスー移住地建設構想

一、南米拓殖株式会社の設立

アマゾン流域における日本人の発展史は、パラー州に創立された南米拓殖株式会社の開発事業に始まっている。

一九二五年、農学士芦沢安平氏（外務省嘱託）が、農業視察を目的として渡伯した。ブラジル東北部地方の棉花栽培状況を鐘淵紡績株式会社のブラジル派遣留学生・仲野英夫氏と同伴一巡のあと、田付大使（田付七太氏、田付景一元駐伯大使の厳父）から、パラー州統領ディオニジオ・ベンテス氏宛の紹介状を貰ってパラー州に入った。

州統領は、聖州方面の農界を開拓した勤勉な日本人先駆者の業績を識る親日家で、日本人の労資による州内開発を熱望しており、田付大使の紹介状に対する返事を兼ねた五月二八日付の書面をもって、日本人の移住集団地を設置するため、五〇万町歩の土地を選定する権利を、向う一年留保する旨を通達した。

着任早々、ミナス州選出のフィデリス・レイス氏の移民法案（黄色人種の入国制限案）の連邦下院提出（一九二三年）、ミゲール・コウト博士一派（ブラジル医学士院）の同案賛成決議案発表等で苦汁をなめていた田付大使は、聖州のみに限らず広く他州に対しても日本移民誘入の必要性を痛感していたので、『大アマゾニア』の著者野田良治書記官と図り、パラー州統領の申し出を幣原外務大臣に通牒した。母国政府当局も干天に慈雨の思いで、移住の適否、開拓条件検討のため調査団派遣を計画したが、費用捻出の予算がないので、これを鐘淵紡績株式会社に諮った。

武藤山治社長は、株主総会の承認を得て八万円を支出し、第一回調査団（団長は同社重役福原八郎氏）を派遣、一九二六年五月三〇日、一行はパラー州ベレン港についた。

これより先、田付大使は大使館付海軍武官関根郡平中佐夫妻、江越信胤、粟津金六の諸氏を同伴してアマゾナス州首都マナウスを訪問。ベレン市で調査団一行と会し、パラー州統領、州政府の要人達に一行を紹介、北伯開拓の実行案を練った。

調査団は、モジュウ河、アカラ河の流域を二隊に分れて実地調査の結果、七月四日、ベレン市で州統領と再会、アカラ地方五〇万町歩と州内の他の三地方選択の快諾を得た。

福原団長は、帰国後、調査報告書を外務省に提出した。（『伯国アマゾン河流域の植民計画に関する調査報告書』として、一九二七年九月、外務省通商局から刊行された。）衆議院の解散などのために遅延し、漸く一九二八年に至り、首相兼外務大臣田中義一氏が、代表的な実業家六〇余名を招待、渋沢栄一子爵によって一二名の実行委員が推選され、二回の委員会を経て、会社創立の発起人（武藤山治、有馬頼寧、村井保固、野村徳七、平賀敏、橋爪捨三郎、福原八郎、室田義文等の諸氏）を決め、実質的には、鐘淵紡績株式会社を背景とした南米拓殖株式会社が創立された。

会社の定款第一条に「当社は、海外に於て開拓事業を営むを以て目的とし、是に関連して、必要なる附帯商工業を営み、特に、日本内地よりの委任により、土地の売買、管理、経営をなすものとす」とあったように、その主なる目的は、パラー州政府の提供による土地を、日

本の資本、技術及び労力によって開拓するにあった。（資本金一千万円）

一九二八年八月一一日の創立総会のあと、社長に選任された福原八郎氏は、本社総支配人に平井国三郎氏を推し、自らは五反田貴己、新井高次、友田金蔵の三氏と共に同月二三日横浜を出帆、一〇月七日ベレンに到着した。

一九二九年一月、資本金四千コントスの株式会社コンパニーア・ニポーニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジル（Ｃｏｍｐａｎｈｉａ Ｎｉｐｏｎｉｃａ ｄｅ Ｐｌａｎｔａｃａｏ ｄｏ Ｂｒａｓｉｌ Ｓ．Ａ．）を設立、州政府、福原間の契約をこの代行会社に移した。

この契約条項は、「パラー州モンテ・アレグレ、アカラ、アマパー、コンセイソン・デ・アラグァイアの四郡、及びブラガンサ鉄道沿線の官有地を三年間の選択権を以て、日本人福原八郎氏に下附す」というもので、最初、州統領から提供された百万町歩をひと口にして、アカラ河流域のみを選定する代りに、アカラに六〇万町歩、モンテ・アレグレに四〇万町歩を獲得することとし、州内他地方三ヶ所に、一万町歩の州有土地を無償で下附をうけることにした。

契約を締結した　福原社長は、渡伯に際して同行した新井高次、現地にあった仲野英夫、医学博士松岡冬樹の諸氏と実地調査の結果、最初の事業地をアカラ河流域の下附地と決定。アカラ郡役所所在地アカラ町から、アカラ・ペケーノ川を遡る約一五〇粁のトメアスーを植民地の港兼本部とし、一九二九年四月一二日、ここに先発隊が開拓の第一斧を入れたのである。

二、先発隊の出発

先発隊記念撮影

（一九二八年、於東京帝国ホテル）

前列右から福良武、芦沢安平、植木寿、新井高次、武藤山治、福原八郎、千葉三郎、関武子夫人、秋山泰亮。後列右から星野修、内藤克俊、阿部留次郎、大和田利雄、関弘、小川高一、奥正助（隊長）。

前項、福原社長の一行が、一九二八年八月二三日横浜出帆に際し、武藤鐘淵紡績株式会社社長は、東京帝国ホテルに一行を招待して壮行会を催した。

席上、意気軒昂たる福原八郎氏は「五年以内に、必ずこの事業を成功させてみせます」と挨拶したが、武藤社長は、「これは、普通の商事会社の事業と違って、天下の大事業である。五年や一〇年でこの事

業が成功するものとは思えない。少なくとも、自分は二〇年先を期待している。そんなあまい考えで、この事業をやって貰っては困る……」と、意外に激越な注意があった。

「その席に列席していた私の感想としては、武藤さんの云われることは余りにも悠長で福原さんの五年説に同意の気持でしたが、愈々開拓に従事し、現在その業績を省りみるとき、武藤さんの先見の明に対して、本当に頭が下がる思いがします」とは、先発隊の奥正助団長の述懐談である。（事実、トメアスー植民地が経済的に安定したのは二〇数年後で、武藤社長の先見の明は、今でも植民者の語り草になっている。）

三、第一回移民入植

アマゾン一番乗りの移民四三家族は、一九二九年七月二四日神戸出帆の大阪商船もんてびでお丸に乗り、九月七日リオデジャネイロ港に着いた。

九月七日は伯国の独立記念日で、リオ港碇泊の各船は、満艦飾うるわしく、アマゾン行きの最初の日本移民を迎えるのに誠にふさわしい状景を呈していた。

前田光世、新井高次両氏のほか、農務局関係者たちの出迎えを受けた一行は、花の島移民収容所（Ｉｌｈａ　ｄａｓ　Ｆｌｏｒｅｓ）に一泊。翌日、まにら丸に乗換えてリオ港出帆。九月一六日、パラー州ベレン港に着いた。

荷揚げ、検査を了え南拓の宿舎に入り、二一日社船で出帆。アカラ河を遡って、翌二二日午前八時半、トメアスー波止場に着いた。アサヒザールの四棟の共同宿舎に入った大アマゾン開拓第一回の移住者たちは、希望に溢れた胸を抱きつつ植民地での第一夜を明かしたのである。

当時の南米拓殖株式会社の現地代行機関コンパニーア・ニポーニカ株式会社の役員は、社長福原八郎、総支配人植木寿、トメアスー事務所支配人奥正助、植民耕地係主任春日亨、衛生部主任医学博士松岡冬樹、副主任は第一回移民船で着いた軍医少佐加藤順二、農業部主任新井高次、アサヒザール農事試験所長内藤克俊、教育部主任は「もんてびでお丸」監督の丸弘毅の諸氏であった。

四、アカラ野菜組合の誕生

アカラ植民地（トメアスー植民地の旧称）の主作は、多年生植物のカカオで、苗床で育てて移植すると二年目から結実するというが、それまでの生活、即ちまず食うことを植民者は考えねばならなかった。

第二回移民三五家族一八六名は、一九二九年一〇月二七日さんとす丸で神戸を出帆、第三回移民（ぶえのすあいれす丸）も一九三〇年に入植した。

米、野菜の自給もできぬ当時、バナナやマモン等の果物も熟せぬ頃とて、一切の食料品はベレンからの購入品を、会社直営の物品供給所

で買求めていた。一俵九〇ミルの白米を食べながら作った籾が一俵（六〇キロ入り）売価八ミルから九ミル、豆一俵一二ミルという安値で、買うものは高く、売るものは安い。こうした経済的な苦境の打開策として、蔬菜販売によって植民地の経済の自立を目的とする、野菜組合が設立されたのは一九三一年であった。

組合長高田幸之助、会計菅江俊雄（二年後鈴木一郎）組合加入金一ミル、次年度から二ミルに上った。現在の産業組合の事業内容に比べると、当時の植民地の貧困は、まことに隔世の感があるが、トメアスー産業組合結成の揺藍として、アカラ野菜組合の誕生は注目されるべきであろう。

ベレン市の南拓事務所下に店をあけ、組合員から送ってくる野菜類の販売をはじめたが、店売りだけでなく、ブラジル人の売子にも卸して（多い時は二〇人）町中に売らせた。組合の販売手数料は一五％、初年度は六コントスの赤字を出したが、次年度から黒字になった。一〇トンの大根、六トンのレポーリョという風に、品物が一緒にまとまって着くと、ベレン市に七つの冷蔵庫を借りて貯え、ボツボツ売ることも考えたが、それでも腐れができて、ずいぶんアマゾン河に流したという。

野菜の中でも大根が主だったので、日本人がベレン市に出るとジャボネース（日本人）と呼ぶがわりに、ナーボ（大根）と呼ばれることが珍らしくなかったそうだ。

当時のベレン市は人口三〇万、北伯一の大都会ではあったが、市民の蔬菜に対する嗜好程度は南伯の小都市にも劣っており、野菜を食

わせることにまず骨を折ったという。

そのうち野菜だけでなく米の販売も取扱うようになるが、出荷した船はその帰りに日用品を買って植民者に配給、組合員の利便をはかった。野菜組合の成長には、村上辰之助氏はじめ第一植民地の理事長、初代八巻七郎、二代斉藤円治、第二植民地の理事長、初代渡辺慎吾、二代木下又一の諸氏が活躍、出荷は社船のアントニーナ丸が利用された。

角田房子女史の〝アマゾンの歌〟の現地ロケが仲代達也主演で行なわれた。

五、多難だった開拓初期時代

営利事業として出発した会社側と、裸一貫で渡伯し原始林を伐り開く入植者は、現実はイスカの嘴の食い違いで、第四回入植者たちは、植民地の現状を見、永住の地にあらずと全員退耕という痛恨事もあった。経済的な苦しみに加えて、熱帯地方の風土病も入植者の増加と共

に猛威をふるい始め、犠牲者の墓標は日々に増えた。

一九三一年四月、黄色に稔った稲畑を前にし、入植当時の契約である小作料納入の問題で、会社との交渉が深刻化し、植民者側の提案を受け入れなければ、収穫を前に稲の刈入れを放棄すると、代表者をベレン市に送って社長、総支配人と交渉させ、植民者の家長はトメアスー波止場の合宿所を争議本部として泊り込み、ベレン市の同志と連絡をとった。

一方留守宅は女子供だけとなり、各自相当数の伯人労働者を使用している関係上、不安があったが、会社に勤務する独身青年社員が植民者側支持を表明、保安警備の任を引受けて感謝された。

交渉は会社側の譲歩によって円満解決を見、トメアスー合宿所の広間で手打式が行なわれた。後日、争議の主謀者とみなされた数家族が退耕を命ぜられたが、この事件を通じて、会社も植民者も、開拓事業の至難なこと、そして、人の和の重要性を知るなど得難い体験を得、再出発の良い経験となった。

六、事業縮小と福原八郎氏の帰国

植民地の開発当初から、会社の方針はカカオを永年作物として主力を傾注し、この他胡椒の試験的栽培、繊維植物の研究、マンジョカの製粉事業、砂糖組合の設立などに苦心を続けたが、植民者は生活の安定、即ち生きることに先ず追われるという日常であった。

トメアスー事務所支配人奥正助氏が、仲野英夫氏に代わり、仲野氏がベレン支店に転任後、南洋農業の権威高木三郎氏が支配人になった。行詰り状態の直営農場の対策と、植民者の更生を図るべく、植民者と膝を交えて語り、春日亨氏を女房役として起死回生の策を講じたが、既に時利あらずであった。

日本の南拓本社も、第一回払込株金二四五万円は建設費に注ぎ込み、第二回払込金一二五万円を調達、運営資金に投じたが、回生の見込薄く、重役間に現地の調査・改革整理案が台頭し、その重任を負って井口茂寿郎、神崎昌太の両氏が来植した。現地の経営内容を検討し、殖民代表との交渉を重ねた井口氏は、整理断行を決意、放たれた第一矢は、面積一千町歩を越える直営農場の閉鎖、コロノ制度の解消、農事試験場の廃止となって現われた。一九三五年四月三日のことである。

会社の事業縮小は何を意味するか。南拓を生かすために、我々植民者を棄民とするのか、我々を募集入植させた責任は会社にあり、責任回避は正義人道にもとると、残存二〇二家族の生命の保障と、将来の在り方の対策を練るべく、四月七日橋爪会館で植民者大会が開かれた。橋爪拾三郎氏の寄付金で、和衷協同を目的として建設された記念館が、生存の危機を図る植民者大会会場となったのである。

「責任者福原社長は、私財を拗って難局を打開すべし……」との声も叫ばれ、会場は興奮の相場と化した。井口茂寿郎氏が仲介者となり、福原社長も出席し、会社の経営不振、現在の窮状を招致したのは自分の責任であると陳謝。金一封の慰謝金を提出して、福原氏の帰国

となった。アマゾンに日本人植民地建設という壮図遂に成らず、万斛の涙をのんで帰国するに至った福原氏の胸中は、察するに余りある。

大風一過、井口氏の新政策は植民地の自治、経費の節減、産業組合強化を三原則とし、会社としては、従前通り船舶・病院・学校・運輸などを管掌し、コンパニーア・ニポーニカ自体としては、貿易業に主力を注ぎ、利潤の上らぬ植民地経営から手を引く形になった。

弱り目に祟り目と、悪性マラリアが猛威を振い、この前後の三、四年間は、毎年、米の収穫期から年末にかけて年中行事のように退耕者があり（一家族三コントあれば南伯に引越せた。）当時この時季を「退耕シーズン」と呼ぶに至った位である。転住を計画した人は、三度の食事を減らしてまでも炎天下で終日働いた。主として植民地の奥の原始林を伐採して米を播き、籾を売って旅費をつくりベレン近郊や南伯方面に移って再起を図ったのである。

当時の年別退耕家族数は左記の通りである。

○一九三五年　一七　（八三名）
○一九三六年　二〇　（七八名）
○一九三七年　二五　（一一九名）
○一九三八年　一九　（一一九名）
○一九三九年　七〇　（四六五名）
○一九四〇年　六九　（四一五名）
○一九四一年　一八　（九七名）
○一九四二年　三八　（二二七名）

合計二七六家族（一、六〇三名）となる。入植者の総数は三五二家族（二、一〇四名）だったので、残存したのは九八家族（四八三名）という慄然たる数字を示している。結局、経済的に退耕・転住の不可能な人々、家族構成の悪い人々（女・子供が多い人とか、労働能率のよくない人々）が残留し、アマゾン開拓の捨石となって、アカラ植民地に骨を埋めようと腹をきめたわけである。

七、産業組合の創立

野菜組合もようやく軌道に乗って、植民地の膨張につれ野菜のほか雑穀類の販売、生活必要品の購買部も設置するなど、野菜組合を産業組合に改組する機運が熟するに至った。ベレン販売係の村上辰之助氏が辞任し、後任として鈴木一郎氏が代ったが、この間会社主脳部と野菜組合の有力者との協調により、一九三五年一一月一九日、正式の改組が成り、アカラ産業組合の幹部として左の諸氏が選任された。高田幸之助（専務理事）、土屋一丸弘毅、斉藤円治、菅江俊雄、沢田弥太郎、槍分登良1、佐藤健吾、山田義一。

八、第二次世界大戦中のアカラ植民地

一九四二年一月二八日、対日国交断絶が宣せられるや、北伯地方在住の日本人は敵国人としての重圧を受けるに至り、アカラ植民地には

州警兵が派遣され、各戸の家宅捜査をし、日本文字の書類は殆んど没収された。三人以上の集合は禁止、違反者は容赦なく投獄された。

偶々、伯国商船がベレン沖で、ドイツ潜水艦に撃沈されたので、俄然ベレン市民は枢軸国人に対して悪感情を持つに至り、同年八月一八日、ベレン市在住日本人全部が伯人暴徒に襲撃された。コンパニーア・ニポーニカ株式会社、アカラ産業組合ベレン事務所もその被害を蒙り、同市在住日本人は着のみ着のまま官憲保護のもとに移民収容所に移された。

アカラ植民地は、北伯在住枢軸国人の軟禁地となり、アマゾン上流地方の日本人やドイツ人たちが送られて来た。コンパニーア・ニポーニカ株式会社は連邦政府に接収され、パラー州政府の管理下に置かれたので、従来の会社の経営事業はそのまま州の経営に移った。

アカラ産業組合の活動も停止状態とをり、ＣＡＴＡ（Ｃｏｌｏｎｉａ Ｅｓｔａｄｕａｌ ｄｅ Ｔｏｍｅ－Ａｃｕ）の管理下に置かれ、産業組合の仕事としては、組合員の生産物と生活必需品の受渡及びその精算事務取扱の程度となり、藤橋鋼三氏が実務を担当、のち鈴木一郎販売主任が、ベレン市を引揚げて藤橋氏に代った。理事長斉藤円治、専務理事鈴木一郎両氏のコンビで、戦時中のアカラ産業組合は運営された。

コンパーニア・ニポーニカ在勤独身社員は、ボア・ビスタ共同農場「和気の寮」に入り、戸田子郎氏を中心に、戦時中は百姓生活に専念した。

アマゾン上流地方から来た人々は橋爪会館に入り、道路直し等を

やった。

治安はトメアスー駐在の官憲によって維持され、植民者は農業に従事しつつ祖国の必勝を祈念したのであった。第一期暗黒時代を、コンパニーア・ニポーニカに対抗する経済問題を主とした邦人間の争議であるとすれば、戦時中の第二期暗黒時代ともいうべきこの時期は、敵性国人としての受難期であった。植民者一同は一致団結、忍従と沈黙の裡に荊棘の道を歩んだ。

一般には当時を「捕虜時代」とも言っている。

九、アカラ農民同志会成る

終戦は桎梏からの解放となり、母国再建の使命の一端を遠くアマゾンで果たすべく、植民者一同は、その事業経営に新しい勇気を奮い起した。

コンパニーア・ニポーニカの機能は引続き停止されており、植民地の生産物の販売権はＣＥＴＡに掌握されたままで、この中間的存在は植民者にとって非常に不利であった。

ピメンタ・ド・レイノも、ベレンの相場よりキロ当り一〇ミル、二〇ミルの差は当り前で、植民地の復興にはこのＣＥＴＡの存在が大きな障害で、一日も早く是正することが急務であった。その対外交渉も、戦前のように新会社に依存出来ぬ状態で、戦時中から終戦後にかけて、アカラ産業組合運営上の役員諸氏の苦労は、実に想像以上のも

のがあったのである。

一九四六年三月、アカラ農民同志会がアカラ植民地の青壮年層によって結成された。会長関勝四郎、委員長戸田子郎、委員は佐藤忠雄、高橋勝正、沢田毅、沢田哲、沢田脩、永野敬士、池田亨、沢田照夫、永野吉春、柴田昭夫、柴田英夫、阿部昇、日高寅男、村上弘、藤橋鋼三の一七名であった。

同年四月七日、アカラ農民同志会は、産業組合の改革の希望案を提出。相互扶助の精神を基として、積極的に内外の難問の処理、人心を一新することを進言した。

四月一二日の産業程合役員会の席上、農民同志会の戸田委員長から、組合新加入許可、ＣＥＴＡとの交渉促進の件、生産部・購買部の分離による組合財政の改善、金融方法の積極化、組合専用の運航機関設置の件等の農民同志会の希望提案が説明された。

十、ウニベルサール号進水す

ベレン市に搬出するアカラ植民地の主要生産物はＣＥＴＡが取扱っていたが、渋滞・遅延・円滑を欠くことが多く、これでは植民地の動脈を止めるに等しく、アカラ植民地更生の焦眉の急は、ベレン通いの専属船の保有であるという結論が出た。

アカラ農民同志会の最初の仕事は、この船造りであった。素人の寄り集りで無謀ともいわれた計画で、永野敬士氏を棟梁とし、高橋勝正

氏を造船製図係として、同志一七名が結束して船造りを始めた。

三カ月の予定が七カ月かかり、三〇コントスの予算が三倍かかって、漸く一八トンの木造船を建造、ウニベルサール号と命名、一九四六年一一月一八日、処女航海の途につくに至った。途中の故障実に一七回、修理しつつアカラ河を降って、漸くベレン港に着いた。かくて、ベレン〜アカラ植民地間の動脈は完全に結ばれたのである。造船の起工と同時に商取引の直接行使権を、ＣＥＴＡから産業組合に返還させる運動にも着手した。

農民同志会で建造されたウニベルサール第一号船。

日伯両語に精通した高橋勝正、沢田哲両氏がこの難交渉にあたり、州当局に嘆願、迂余曲折を経てこの交渉も遂に成立。農民同志会の第二の目的たる販売・購買権を我等の手に……　という難問題も解決された。この間、産業組合幹部や一般組合員も、同志会の活動に対して

全幅の助力を与えて激励したのである。

植民地内の運輸と、ベレン港に至る海運は農民同志会でやり、生産物の統一販売と生活用品の購買・配給は産組でやった。一九四九年九月、農民同志会はその船舶、貨物自動車、即ち水陸の運輸権を産組に移管したので、アカラ植民地の一元化、即ち産業組合中心主義が確立し、機構の統一と人心の和を以て躍進への明るい段階に入ることになったので、アカラ産業組合を公認産業組合として登録、トメアスー混合農業産業組合（Ｃｏｏｐｅｒａｔｉｖａ　Ａｇｒｉｃｏｌａ　Ｍｉｓｔａ　ｄｅ　Ｔｍｅ－Ａｃｕ）通称「トメアスー産業組合」と改称、アカラ植民地もトメアスー植民地と改称されるに至った。

一九四七年七月一〇日の臨時総会で、アカラ産組に多年功労のあった加藤友治、斎藤円治両氏を満場一致で顧問に推薦、

見事に造成されたピメンタ園

また平賀練吉氏を理事長に選任した。同年九月一五日の第一六期定期総会で、母国戦災救援金として五コントス也を、組合事業資金を割いて贈った。

十一、ピメンタ・ド・レイノ時代来る

一九四七年一二月二八日の第一七期定期総会で、同年九月から一一月末に至る三カ月間の事業報告がなされたが、その中で生産物売上高の中にピメンタ・ド・レイノ（胡椒）が新しく脚光を浴びて登場した。翌一八期のピメンタ・ド・レイノの売上高は三五九コントスと飛躍し、胡椒村トメアスー植民地の胡椒が伯国産業界に彗星的存在を示すに至った。

一九五〇年五月の役員会でサンパウロ出張販売所設置が起案され、九月一八日の役員女における戸田理事の聖市市場視察報告のあと、サンパラロ出張所が実現された。第一回出荷の黒胡椒は、キロ当り一〇〇クルゼイロスで印度品に対して、品質、価格の点でも十分競争できるという見込がつき、明るい希望がもたらされた。

一九五二年の下半期からピメンタ・ド・レイノが高騰、植民地は躍進の波に乗りはじめた。同年二月には、わずか四〇コントスの金すらベレン市では産業組合に貸してくれるものもなく、一俵一〇五ミルの割で胡椒を担保に一商人から借金をした位で、当時の組合役員の金融上の苦労は筆舌につくし難いものがあったのである。

一九五三年から五四年にかけて、胡椒の市場相場は最高潮に達し、

いわゆる黒ダイアの黄金時代を現出した。組合員の手取り高は黒胡椒キロ当り一三〇$となり、往年の貧乏植民地は、一躍経済的に最も恵まれた楽園と化すに至った。

次に胡椒の年度別売上高を記す。（単位クルゼイロス）

一九四七年度	三五八、八八〇
一九五二年度	二〇、三五〇、〇七八
一九五三年度	四三、八一七、二一〇
一九五五年度	一〇七、六七二、五七五

一九五四年度の組合員の胡椒植付本数は四四万本、年産八〇〇トンに達した。胡椒の輸入禁止運動とあいまって、ブラジル全国に配置されたトメアスー産業組合の販売網は、完全に国内市場を制するに至った。

増産に伴う個人の事業施設の改善、拡張に正比例して、トメアスー産組も対外工作の面では販路の拡張、相場の変動対策、製品の包装、栽培、採集、乾燥等の研究、出荷品の検査・統一に万全を期すべく組合本部、ベレン販売所、サンパウロ出張所が鼎立して相協調した。

組合員家族の保健・衛生上ベレン市の戸田五郎医学士を組合の嘱託医とし、子弟教育のために植民地内に小学校を増設、校舎を改造、新築して良師を呼んだ。青年層の社交、体育の向上に資すべく野球部への援助、聖市見学視察団の派遣などを行なうなど、物心両面に対する産業組合の努力は高く評価された。

十二、戦後移住

アマゾン地域の戦後移住は一九五二年八月、日本政府とブラジル政府との間に「移住及び植民に関する協定」が結ばれた後に再開された。

一九五二年一二月二八日、戦後の第一次移民の一七家族五四名がアマゾニア産業研究所を受け入れ機関としてアマゾン河流域に入植した。トメアスー地域には一九五三年八月二日、あめりか丸（六月二五日神戸出帆）にて第一次二五家族一二九名が到着した。そして戦後移住者は各農場に三カ年の雇用契約農業者として就労した。当所の農業者計画移民制度には、一五歳以上の稼動力が三名以上含まれることが規定されていたので、移住応募者の中には一五歳以上の単身移住希望者を探し、構成家族として移住したものも少なくなかった。

一九五五年（昭和三〇年）には、呼寄せ移民制度が採用され、ピメンタ・ド・レイノを基幹作物として成功した人達は、トメアスー発展を計ると共に日本政府の移住政策に呼応し、縁故者を呼寄せ又は計画移民の導入に協力した。一九五五年末にはアマゾン河流域よりの転入者を含めて戦後移住者数は二〇〇家族を越えるに至った。

一九五九年（昭和三四年）四月には、トメアスー戦後移住者連絡協議会が結成された。役員は会長山本峰雄、副会長堤春雄、委員下前原光次の各氏であった。この移住者連絡協議会が中心となった活動には

次のようなものが挙げられる。

（一）トメアスー戦後移住者のため、日本政府ベレン総領事館、海協連ベレン支部等に交渉、新移住者営農のための無担保、無利子の肥料資金の長期融資を実現し、独立営農を容易にした。

（二）新移住者の子弟教育のため、ブレウ小学校を建設した。

（三）戦後移住者の脱耕転出が多く、その歯止め策の一つとしてトメアスー産業組合に働きかけ、戦後移住者に対し速かなる耕地配分と組合加入取扱いを進言、実現した。

一九五三年八月あめりか丸での第一次移住以来、トメアスーに戦後移住者が順次渡伯してきた。当初、旧移民と新移民との関係は良好であったが、新移民の中には特に成功を急ぐ者多く、そのため旧移民との間に感情的衝突をきたし退耕する者が続出した。それにもかかわらず、トメアスー移住地在住の日本人移住者は四五〇家族、二五〇〇人余に達している。

〔資料〕『移住及び植民に関する協定』抜粋

第九条

ブラジル合衆国への日本人の計画移住は家族を同伴するとしないとを問わず、次の種類の者の移住とする。

（a）農業者、農業労務者、家畜飼育者、一般農村人、農畜産技術者、並びに農村産業及びこれに関連する分野の専門的技術者で直ちに

土地所有者となるとならないとを問わず、定住する意図をもって移住する者。

（b）農業者、農業労務者又は農畜産技術者の協会又は協同組合で、土地所有者になるとならないとを問わず、ブラジル合衆国に既に存在しているか又は新たに設立される農場、農畜産企業又は計画移民地で就労する意図をもって集団的に移住するもの。

（c）技術者、工芸者、専門的技能者及び諸職業の専門家でブラジル合衆国の労働市場の必要性及び関係法令に合致するもの。

（d）ブラジル合衆国の経済開発に有益なる工業的又は技術的性質の事業単位又は企業で同国の権限のある機関があらかじめ承認するもの。（以下略す）

このような基本協定に基づいて日本国政府は日本海外協会連合会をして移住者の導入と営農指導にあたらせ、日本海外移住振興株式会社をして土地の購入造成分譲にあたらしめた。

十三、第二トメアスー移住地

「トメアスー第二移住地建設案」は、伸び行くトメアスー植民地の数年前からの懸案であった。一九五九年の開拓三〇年にあたり、これを記念事業として実現する具体案が本格化し、日本政府にも呼びかけ、その活動が開始された。

その目的とするところは、言うまでもなく自分達の第二の村づくりと、日本の移住政策に呼応して、側面から協力するという二つの線に

あった。

新移住地の造成地はトメアスー郡庁所在地を起点として、東西一〇キロ、南北二五・八キロの二万五八〇〇ヘクタールの土地を選定して、トメアスー在住者一五名の名儀で地権獲得したものをトメアスー産業組合の斡旋で購入したのであるが、トメアスー側はこの問題を促進するため、一九五九年四月一七日、「トメアスー第二移住地建設準備委員会」を結成、佐藤忠雄氏を委員長に推し、積極的な行動を起しパンフレットを作成して植民地内は勿論、日本の朝野に呼びかけた。

日本政府側は、移住振興会社を表面に立てトメアスー側の熱意と実績をもとにして本腰を入れはじめた。そして、最初の要求は第二移住地の地権獲得であった。この土地に関する観念は、現地側と日本側に於て多分に見解の相違もあって特に論議されたが、結局、日本側の、地権のない土地に如何なる処置もとり兼ねる……　という見解を基にして、トメアスー産業組合の沢田渉外理事の苦斗が始った。

パラー州政府との交渉を重ね、あらゆる困難を克服して、一九六〇年一一月一五日、トメアスー開拓三一年祭典の当日、ネイ・ブラジル郡長から地権証書が手交されるという劇的な解決を見るに至った。

これよる先、一九五九年一〇月、外務省移住局長高木広一氏は南米視察の途次トメアスー植民地を訪問。第二トメアスー移住地建設に対して大きな関心を示し、その促進方を指令、是に基づいて、ベレン総領事福岡章氏は、即時に、第二移住地の関係者、海協連アマゾン支部、移住振興会社ベレン支店、トメアスー産業組合の各代表者を召集し移住地建設の基本方針を協議した。

この四者会談で決定された基本方針は、振興会社は土地の購入・造成・分譲、海協連は移住者の導入と営農指導、トメアスー側はこれに対して全面的な協力をすること、総領事館は日本政府との連絡・指導という万全を期したものであった。

一九六〇年一一月、南米公館長会議に出席の帰途、再度ベレン市を訪れた高木局長は、トメアスー第二移住地建設に対して最終の打合せをした後、大きな決心を披瀝して関係者を激励、日本側の協力を誓って帰朝した。

ここに於て、トメアスー産業組合は、従来の建設準備委員会を組合直轄の拓殖部とし部長に佐藤忠雄、女房役に大沼春雄、現場主任に関弘、製図係主任に鈴木信次郎と各部門にベテランを配し、早くも原始林の測量・現地調査に着手した。

（一）第二移住地建設へ着手

五カ年に八〇〇家族導入を目標としたこの移住計画は、行詰り状態にあった移住事業に活を入れるものとして、ブラジル及び日本の朝野で注目の的となった。現地側の目覚しい実績と熱意ある引受体勢は、移住振興会社の良心的な造成・分譲、海協連の慎重なる導入と営農指導と相俟って、ベレン福岡総領事の采配のもとに、開拓の意欲に燃えて前進しはじめた。

一九六二年一月一五日、「旧移住振興会社ＪＡＭＩＣ第二トメアスー移住地建設仮事務所」を十字路のトメアスー産業組合本館三階に

設けた。同年六月五日、道路造成用重機械類の到着を待って、現在のブレウ地区内ベレン〜マラバへの道路と第二トメアスーへの連絡道路との分岐点に於て、トメアスー産組代表阿部専務、建設準備委員会代表大沼委貞長、産組拓殖部代表関部長、鈴木測量技師、ＪＡＭＩＣベレン支店一本杉支店長ほか職員、海協連上森トメアスー駐在員などの列席のもとに、工事の安全祈願をして鍬入れ式を行い、ブルドーザーの試運転をかね。約一〇〇メートルの道路伐採をして移住地造成工事が開始された。

以後、ＪＡＭＩＣ第二トメアスー事業所に仁科雅夫初代所長（現国際協力事業団ベレン支部長）の指揮のもとに、大石圭二主任技師ら主要スタッフ七人により、道路造成、橋梁架設、区割測量等工事は急ピッチで進められた。

（二）入植開始

一九六二年九月一四日、現地入植第一陣二五戸のロッテが決定して入植が開始された。

九月三〇日には第二トメアスー開拓同志会の手で、約七五ヘクタールの山伐りが完了した。一一月一一日、第一回現地入植者によって、第二トメアスー農業協同組合（任意）が設立された。（初代理事長・関弘氏）一一月一八日には第二トメアスー最初の山焼きが行なわれた。

雨季近し　黒煙高く移住者の
　祈りをこめてマットは燃える

マラリアの薬をさがす昼下がり

ＪＡＭＩＣ主任技師　大石圭二氏作句

そして一九六三年一〇月三日、日本からの第一陣六戸三〇名（栃木県出身四戸、青森県出身二戸）の新移住者を迎えたのであった。

（三）自然条件

（ａ）位置　南緯二度三一分、西経四八度二二分に位置し、州都ベレン市のほぼ真南に当り、その直線距離は一二五キロメートルである。ベレン市から入植地入口までの陸路は約二五〇キロである。また、トメアスー郡十字路からは州道を経て、南に約二五キロメートルの距離である。

（ｂ）気候　当地は赤道直下に近い熱帯気候帯にあるため、年中高温多湿であるが、降雨の分布によって雨季（一二月～五月）、と乾季（六月～一二月）に区分される。即ち、雨季にはほとんど毎日、強い降雨があり、乾季には極端に雨量が減り、暑い晴天が続く。そのため日中は著しく乾燥する。しかし気温の日較差（一日のうちで最高・最低の温度差）が大きいのと常時赤道東風が吹いているので熱帯とはい

え、しのぎ易いところである。

移住地内の、アマゾニア熱帯農業総合試験場（ＩＮＡＴＡＭ）での観測結果は次表の通りである。（図表１）

（図表１）　第二トメアスー移住地の気象（1968～1978年）

アマゾニア熱帯農業総合試験場（INATAM）調べ

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均
平均気温	26,8	26,8	26,7	27,0	27,0	27,0	26,6	26,9	27,1	27,5	27,6	27,4	27,0℃
最高 〃	31,7	31,7	31,2	31,4	31,6	31,9	31,9	32,5	32,7	33,2	33,1	32,7	32,1
最低 〃	22,2	22,4	22,5	22,8	22,7	22,2	21,5	21,5	21,7	22,0	22,4	22,3	22,2
平均降水量	316,6	342,3	465,4	422,4	344,9	131,4	130,2	67,6	81,7	60,7	93,9	177,9	2.635,5mm
1973年 〃	362,0	286,0	576,0	419,5	326,0	190,0	276,0	74,0	109,0	78,2	68,8	341,4	3.106,9
1976年 〃	192,0	422,5	353,0	273,5	244,0	169,8	22,2	49,7	7,1	48,1	42,1	178,2	2.002,9

○絶対最高気温37℃（1970. 11. 11）　○絶対最底気温18,5℃（1974. 10. 16）

○相対温度平均86,6%　○年間降雨日数 184日（1日1mm以上の降水があった日）

○最高連続降水日数　1974. 4. 28 ～ 5.27（30日）ビメンタ湿害発生時

○最高連続無降水日数　1965. 10. 30 ～ 12. 03（35日間）

○3日間の最大降水量　1974. 4. 7 ～ 4. 09（171,8mm）

○乾期、雨期の変化日　平均乾期突入日　5月31日　雨期突入日　12月11日（1964～1979年までのデータによる）

（図表２）「土壌分析成績例」　第二トメアスー、アマゾニア熱帯農業総合試験場内の原始林

土壌型（ポドゾリコ、ベルメーリョ、アマレイロ・メデイア）

層位	断面 cm	PH. H_2O	PH. Kcl	粒径組織(%) 粗砂	細砂	ミルト	粘土	炭素 %	有機物 %	窒素 %	C/N	燐酸 mg/100g	ミルト/粘土
A_1	0 ～ 6	4,1	3,5	20	41	21	18	1,67	2,87	0,12	14	0,62	1,17
A_2	6 ～ 15	4,2	3,7	21	37	19	23	1,16	1,99	0,09	13	0,30	0,83
B_1	15 ～ 58	4,7	4,1	13	33	18	36	0,48	0,83	0,06	8	<0,11	0,50
B_2	58 ＋	5,1	4,1	14	32	15	39	0,31	0,53	0,04	8	<0,11	0,39

層位	H_2SO_4 分解 d＝1,47 SiO_2 %	Al_2O_3 %	Fe_2O_3 %	Ki	Kr	置換性塩基 me/100g Ca^{++}	Mg^{++}	Na^{+}	K^{+}	計S me/100g	me/100g H^{+}	Al^{+++}	置換イオン全量 me/100g	塩基飽和度 %
A_1	10,31	8,16	2,38	2,15	1,81	0,27	0,34	0,04	0,07	0,72	6,12	1,80	8,64	8,3
A_2	12,73	8,93	2,78	2,42	2,02	0,05	0,10	0,02	0,05	0,22	3,97	1,80	5,99	3,7
B_1	16,83	13,77	2,98	2,08	1,83	0,22	0,04	0,03	0,04	0,33	1,73	1,40	3,41	9,5
B_2	15,87	13,52	2,98	2,00	1,75	0,22	0,04	0,01	0,03	0,33	0,45	1,20	1,98	15,5

（ｃ）地勢

ア、地形　標高は低く、海抜一一メートルから三〇メートルの間であり、概ね平坦である。移住地内には大小数多くの河川が、蛇行して流れている。

主な河川としてはアカラミリン河とその支流であるクシュウ、イピランガの両河川が地区内を横断している。

イ、地質及び土譲　アマゾンの大地形からはテーラ・フィルメに属

し、地質は第三紀の堆積物からなり、アマゾン本流のＢＡＳＩＮに属する。そのため、土壌は種々の土性と土色を有し、カリオン系粘土鉱物や石英砂からなっている。当入植地の土壌は　旧トメアスー植民地と同じく、ラトソル・アマレイロ（黄色ラトソル）を主体としており、他にラトソル・コンクレミオナリオ、ラテリータ・ヒドルモルフィカ、ポドゾリコ・ベルメーリョ・アマレイロ、石英質砂土等が一部に分布する。

ウ、植生および林相

入植地は常緑熱帯降雨林に被われ、多種多様な樹木が幾重にも重なり合って繁茂し、その樹冠は高さ三〇～五〇メートルに達する。また、その樹間に多くの寄生植物や蔓性植物を混えて、森林は構成されている。

有用材としては、胡椒の支柱用に用いるアカプー、マサランドゥバ、ジャラナなど、又家具及び一般建築用材にはパウ・ダルコ、フレジョー、ローロ、パウ・アマレイロ、スクピーラ・クピウーバ、マルパー、クワルーバなどがある。その他、銘木としてパウ・サント（聖木）などもある。

（四）社会条件

（図表３）　小学校児童数並びに内訳　　（1979年度）

学校別		イピランガ小学校						エスペランサ小学校						
学年別		幼稚部	1	2	3	4	計	幼稚部	1	2	3	4	計	合計
区分	日系	9	11	10	6	1	37	15	15	5	4	6	45	82
	現地	6	8	9	3	5	31	1	32	7	3	2	45	76
計		15	19	19	9	6	68	16	47	12	7	8	90	158

（図表４）　入植状況（内地直来の入植者のみ）　　―年度は４月１日より３月末日迄―

入植戸数と人数											
	年度	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971
	戸数		8	2	4	17	11				1
	人数		37	16	23	72	42				2
	年度	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	合計	
	戸数	5	2		5	3		2		60	
	人数	17	8		17	12		8		254	

（図表５）　入植者（現地・内地直来）の出身都府県別

都府県名	青森	宮崎	東京	広島	熊本	秋田	群馬	栃木	新潟	山梨
戸数	25	13	6	6	5	5	5	5	4	4
都府県名	山形	富山	宮城	福島	大阪	兵庫	その他	計		
戸数	4	3	3	3	3	3	34	131		

（図表６）　ロッテの分譲状況

造成済		分譲済		残	
583区画	17.613,2 ha	462区画	13.413,7 ha	121区割	4.199,5 ha

当地区内にはＪＡＭＩＣ交付金で建設された小学校が二校ある。

（ａ）交通　一九七三年一二月、トメアスー～パラゴミナス間の道路が開通し、州道（ＰＡ１０２）に改められた。この幹線道路が当入植地のほぼ中央を縦貫しており、州都ベレン～パラゴミナス間を、一日一往復の定期バスが運行されている。

（ｂ）医療　ＪＡＭＩＣ直営の診療所があり、医師（日系）一名、看護婦三名が常駐している。また救急車一台が配置されている。

（ｃ）教育　当地区内にはＪＡＭＩＣ交付金で建設された小学校（四年制）が二校あり、女性教員八名が配属されている。第一センター地区の小学校は一九六三年、“Ｅｓｃｏｌａ　Ｉｓｏｌａｄａ　Ｄｒ．Ａｕｒｅｌｉｏ　ｄｏ　Ｃａｒｍｏ”として州より認可された。その後一九六七年五月、“Ｅｓｃｏｌａ　Ｒｅｕｎｉｄａ　Ｉｐｉｒａｎｇａ”と改称された。第二センターの小学校は“Ｅｓｃｏｌａ　Ｉｓｏｌａｄａ　Ｅｓｐｅｒａｎｃａ”と呼ばれている。両小学校の児童数及び内容は図表３の通りである。尚、通学は徒歩又は自転車である。中学校は遠く、四、五〇キロも離れたトメアスーの町にあるため、ＪＡＭＩＣ貸与のスクールバスで通学している。又、ベレン市内の各学校に寄宿通学しているものもあり、就学状況は一般に良好である。高校に進学するものも近年増加している。現在、当地区からの大学に在学中の者四名、卒業者七名がいる。

（ｄ）治安　当地区内に三ヶ所、各センターの公共用地内に治安事務所が設けられており、現在、代理警官が常駐し、ＪＡＭＩＣより治安用オートバイが各一台貸与されている。治安状況はほぼ良好であるが、胡椒の収穫期など季節労働者の出入が増加するときは各地区民で

自警団を組織し、交替で夜警、巡回等を行って防犯に務めている。

（五）入植状況

（a）入植者数一九六二年一一月、第一陣現地二六家族の入植を皮切りに、一九六三年一〇月三日、日本から直接の入植者第一陣として六家族三〇名が入植し、以後、現在までに六〇家族二五四名が入植した。しかし、開拓途中で志ならずして倒れるもの、日本へ帰国するもの、ベレン市近郊或いは遠く他州に転住するもの、又反面、分家独立するもの、北伯雇用農で独立するものなど、絶えず増減はあるが、現在第二トメアスーの日系人入植者数は、居住一三一家族、第一トメアスーよりの通作者六七戸、合計一九八戸、六二七名である。（図表４、５参照）

（b）ロッテ分譲状況　ロッテ分譲状況に関しては図表６を参照のこと。

（c）地権発給状況　分譲地四六二ロッテのうち、二七五ロッテに地権発給済みである。

（d）道路の状況　入植地内の造成済道路延長は初期計画延長一四〇キロに対し、区域外連絡道路も含めて、幹線三七キロ、支線（巾員六メートル、敷地一五メートル）八五キロ、合計一二二キロである。そのうち、幹線は一九七三年一二月、フェルナンド・ギリョン州知事時代にＰＡ１０２としてパラゴミナスまで開通し、州道となった。幹線・支線に架設した木橋七ヶ所、暗梁及び管梁は一一九ヶ所である。

特に、州で架設したクシュウ橋の上流三〇メートルの所に今も残る木橋は旧クシュウ橋で、大石圭二主任技師設計、太田幸一氏を棟梁として第一回現地入植者が一丸となって、一九六三年七月三〇日から一二月一八日までを費やして、架設したものである。巾員五・五メートル、橋長七〇メートルの立派なもので、今なお使用に耐えている。

（e）ロッテの分譲価格　一ロッテの標準面積は二五ヘクタールである。価格は一括払いで、当初邦貨二三万円であったが、一九七七年四月改訂されて二五万円となった。分割払いの場合は、原則として頭金一〇％以上を払い込み、残額は四年間据置後五ヶ年均等年賦払い、利息は残額に対して年利一二％となっている。

（六）営農の状況

（a）主作物　胡椒、カカオ、マモン、マラクジャ。

（b）農家経営の状況　かつては活況を呈した胡椒も、病害の激発による減収、作物資産としての減少と価値下落、又経営多角化に伴う先行投資のための借入金増大、加えてインフレによる諸物価と労働賃金の高騰、生産物価格の停滞など思わしくない諸条件が重なり、資金及び経営の収支が最近極めて悪化しているのが一般的状況である。しかし胡椒は国際商品として、その需要度の安定していること、安価ながらもまとまった収入の得られること等の利点から、依然基幹作物となっている。今後も、胡椒、カカオ、その他の永年作物を主体とした

多角経営と生産物を有利に販売するマーケティング戦略上からも、新たな主産地形成を基本方向として進むべきであろう。

（c）農機具等の普及状況

トラクター　八台
トラック　五台
乗用車　三台
薬剤用散布機　三台
チェンソー　八台
エンジン　一一台
（一九七七年度調べ、農家一戸当り平均）

（d）農家所得　二五〇万八〇〇〇円（一二万五六八〇クルゼイロ）
（一九七七年度調べ、農家一戸当り平均）。

（七）入植地内の主な機関と組織活動

（a）区会　一九六四年三月、第二トメアスー自治機関として「区会」が結成され、初代区長に関弘氏（故人）が選ばれた。翌一九六五年二月、「第二トメアスー農業協同組合」と「区会」との第一回連絡会議が開かれ、次の委員会を設置して、各部門に積極的に取り組むことを決議した。

〔委員会〕

衛生委員会　委員長矢島繁（故人）

教育委員会　委員長武藤徳（改人）

公園墓地管理委員会　委員長関弘（故人）

貸与物件管理委員会　委員長高橋新作（故人）

治安委員会　委員長永田恭平

道路委員会　委員長関弘（故人）

なお、連絡会議は二カ月毎に開催することを決めた。

（b）自治会　区会結成から一〇年後の一九七四年一月一六日、第二トメアスー地区会総会で地区会編成替えを議決し、イピランガ地区会（第一センター）、クシュウ地区会（第二センター）の二地区分に分属した。同月一九日には、右の二地区会の統合組織として「第二トメアスー自治会」を発足、左の初代役員を選出した。

自治会長　大貫光三

副会長　椿日吉

会計　石井和雄

書記　伊藤民雄

この際、会長は一年毎に両地区より交替で選考することなどを決めた。

後に第三センター地区が加わり、現在は三地区会を統合する自治会となっている。なお、一九七九年度の役員は、会長佐藤正一郎、副会

長阿部隆次郎、渡辺勝利の各氏である。

〔自治会行事〕

自治会の年中行事として左記のものがある。

○親善野球大会―各センターの少年、青年、壮年、婦人とＪＡＭＩＣとの　対抗試合で一月と六月、年二回行なわれる。

○成人式―一月中旬に行なわれる。

○忘年演芸会―一二月三一日に行なわれる。

（ｃ）青年会　一九六六年八月一四日の夜、太田幸一氏宅に青年有志が集まり、武藤義博会長を選んで発会した。当初は会員もわずかであったが漸次増加し、一九六八年一月一三日、会主催で第一回成人式（成人者九名）を武藤会長宅で行なうに至った。同年、イピランガ小学校用地内にあった旧第二トメアスー農業共同組合共同販売所の払下げを受け、解体清掃費として受けた三〇〇クルゼイロと、会員が毎日曜コロニア農家の稲刈り、ピメンタ収穫の手伝いなどで得た資金と合わせ、第一センターグラウンドに青年会館を建設した。主なる活動は狂犬病ワクチン接種、成人式、年忘れ紅白歌合戦、ダンスパーティ、公民館周囲の植樹等で、婦人会と協力しながらコロニアの文化、娯楽の面を担当、活動している。一九七九年度会長高橋成雄、副会長大貫光春、会計松尾照美。会員数は五〇名である。

（ｄ）婦人会　一九六七年五月二五日、イピランガ小学校（第一セ

ンター）に於て、発会式を行なった。（初代会長武藤あき）同年六月七日に、第一回料理講習会（講師平賀清子）を第二センター移住者宿泊所に於て開催した。

以来、コロニアの諸行事には積極的に参加協力して、その陰の力は大きい。各種講習会や見学会等を逐次開催して、婦人の知識向上に務めている。現在は、各センター毎に組織されて活動しているが、子供の日及び敬老会の行事は婦人会の主催で行なわれている。

（e）第二トメアスー農業協同組合　一九六二年一一月一一日、第一回現地入植者によって設立された「第二トメアスー農業協同組合」（任意）も、地区内にトメアスー産業組合支所が一九六七年一二月に設置されたので、組合員（五一名のうち、トメアスー産組加入者三六名）の総意にもとづき、同月二七日発展的解消をとげた。現在（一九七九年）、トメアスー産組加入者は居住者六六名、通作二三名、合計八九名である。

（f）第二トメアスー農業振興協会（ＡＳＰＲＯ）　一九七六年九月一六日発足し、会長一名、理事六名の役員構成でその運営を行なっている。ＪＡＭＩＣ貸与のＤ７ブルドーザー、Ｄ６ブルドーザー、ホイル・ローダー、バック・ホウ、トレーラー、トラック等の重機械類と農機具類の運用により、農地の造成と熟畑化及び農業の振興に活躍している。現在、会員数は一一〇名である。

（g）自治会共有林造成委員会　一九七八年、将来の自治会の財源確保を目的として発足した。委員長一名、委員三名（各センター一名）で構成され、各役員の任期は三年である。現在までに二〇ヘクタール

を伐採し、カスタニャール・ド・パラーの苗五〇〇本を植付け、その生育は順調である。将来、二〇〇ヘクタールの土地に、パラー栗を造林する計画で鋭意努力中である。

（h）アマゾニア熱帯農業総合試験場（ＩＮＡＴＡＭ）　かってのＪＡＭＩＣ試験農場を拡大して、一九七四年四月に設立された。その後、施設の拡張と試験研究に必要な機器類の拡充がなされ、一九七七年一一月五日にパウリネリ農林大臣をはじめ、州知事、在ベレン日本国総領事、農務長官及び各種関係機関の長等多数参列のもとに盛大な落成式が挙行された。当試験場はブラジル熱帯地域の農業技術の発展と開発、並びに熱帯地域に在住する日伯農業者の営農の安定と向上に寄与することを目的として、主に次にあげる試験研究と指導業務を行なっている。

ア、胡椒病虫害に関する試験研究

イ、熱帯作物の導入開発に関する試験研究

ウ、畜産に関する試験研究

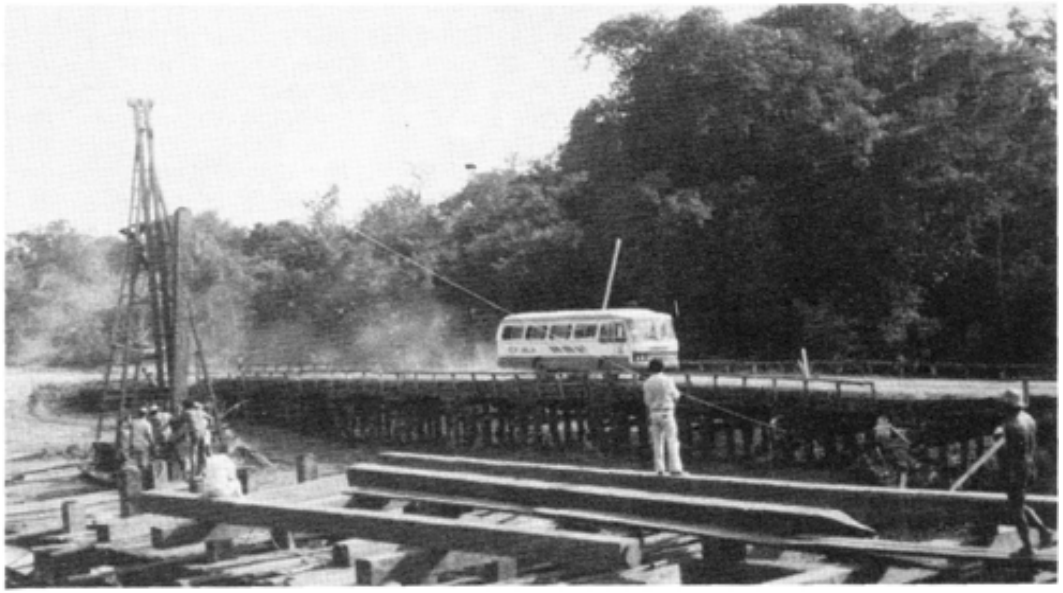
エ、熱帯農業経営に関する調査研究及び農家の経営、経済に関する調査研究。　オ、技術研修。

現在、吉田貞吉場長のもとに職員七名、雇員五名、日本からの派遣専門家（一戸稔博士、工藤和一専門家）二名を以て構成され、目的遂行に当っている。

四、第三トメアスー移住地建設構想

（一）アマゾン地域開発と第三トメアスー移住地建設

アマゾン地域開発は国家的事業である。現在、農林牧畜業及び鉱工業の開発が国際間の資本技術を導入することで進行中である。これらの開発事業の中で、とくにパラー州政府が期待をよせているものはツクルイ発電所の電力を利用したアルミ精錬と、それに関連して起こる



トメアスー農村振興会によるクシュウ橋の架けかえ作業。

地域開発である。

パラー州政府はツクルイ発電所の建設に先立ち、ベレン～マラバ間の道路建設に着手し、その産業開発の中間地域に一一万二〇〇〇ヘクタールの土地を確保し、これを日系人に無償で提供し、開発の拠点とする計画をもっている。また、当該地区は日系人入植地のある第一及び第二トメアスー移住地から僅かに七〇キロメートルのところにあって、胡椒の病害に苦しむ日系人入植者の営農対策として格好の場所であり、しかも既存入植地の衛星的性格をも有する移住地となるものである。

（二）第三トメアスー移住地建設の概要

本移住地は一一二、〇〇〇ヘクタールの面積を持つが、入植者のうち約半数が日系人入植者であると予想されているので、当面六〇、〇〇〇ヘクタールの造成を行なう予定である。

この六〇、〇〇〇ヘクタールの内、約半分を開拓し、生産基盤の整備を行ない胡椒、カカオ、熱帯果樹の栽培や牧畜、植林等をとり入れた食糧生産と多角経営による安定した営農活動と熱帯総合農業を確立することを目的としている。

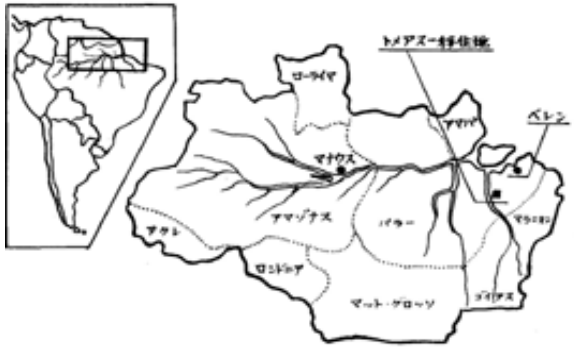
土地の造成及び分譲は一戸当り二〇〇ヘクタールとし、三〇〇戸程度を導入する計画で現在、州産業道路を中心とした支線道路網を設備する工事を進めている。

当該地区開発に要する費用は総額四五億三〇〇〇万円となるが、そ

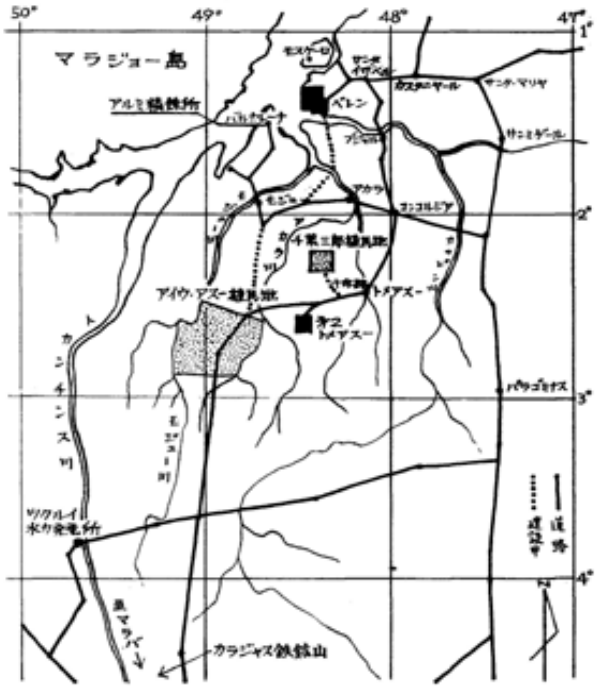
の内訳はブラジル政府が投資する土地代、幹線道路造成費等約九億五〇〇〇万円、入植者が耕地化に要する開拓経費約三〇億円（但し営農資金を除く）、土地造成に要する測量、区画割り、支線道路造成費約五億円である。

これらの造成が完成するには五ケ年間を要するが、初年度に測量、区画割をなし配耕を完了し、その他支線道路の造成に着手する計画である。しかし、測量費等はその一部を納入しているものの、支線道路の如き生産基盤の整備に対する投資まで、入植者に負担できる能力がないので、支線道路敷設計画は頓座しているのが現状である。（支線道路造成費一五〇キロメートル、一億一二五〇万円、建設機械購入費一億八二〇〇万円）、なお、耕地化の開拓経費は現地金融機関の援助をえて、入植者自身で解決すべきであろう。

トメアスー移住地所在地略図



第三トメアスー建設構想地所在地



第二部

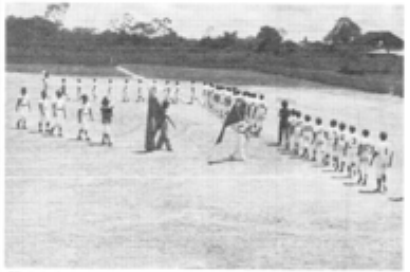
産業組合の設立とトメアスーの産業

二世会で造成したプール。

50年祭式典当日、学生寮の落成式も行なわれた。

元気な子供たち。

林間学校での体操。指導・八重尾直忠


野球大会の入場式。

野球連盟主催の野球大会。

囲碁クラブの面々。

囲碁も盛んに行なわれている。

一、トメアスー郡の創設
二、トメアスー総合農業協同組合
三、マオカ農場
四、エリザベス・サンダース・ホームのアマゾン進出
五、ピメンタ油抽出事業の着手（高砂香料、鐘紡の進出とその後）
六、組合に功労のあった人々

一、トメアスー郡の創設

一九五九年八月一七日、州令一七二五号により、トメアスーに同年九月一日より郡制が施行された。トメアスー郡はアカラ郡から分離して形成されたもので、アカラミリン川左岸の旧トメアスー部落がその都庁所在地となった。トメアスー郡の面積は五万五千八〇〇ヘクタールでアカラ、カッピン、ブジヤルの三郡に接している。

郡制施行記念祭は、パラー州知事ルイス・ジオニス・デ・モウラ・カルバーリョ大佐をはじめ多くの連邦・州高官が出席し盛大に催された。トメアスー郡の初代郡長にはネイ・カルネイロ・ブラジル氏が任命された。

トメアスー郡は独自の判事と地方司法官を置く独立行政区であると共にパラー州第六教育区を構成し、都庁所在地にはアカラ、モジュウ、ブジャル郡を管轄とする連邦税務局、郵便局、電話局、連邦道路局出張所、パラー州農務局支所等の行政関係機関やアマゾナス銀行、

ブラジル銀行、南米銀行、ブラデスコ銀行等の金融機関が設置されている。

教育施設としては現在、州立中学校一校、州立小学校七校、都立文盲教育校三〇校、宗教法人農村分校五〇校が存在し、衛生施設としては州立病院二、日系アマゾニア病院一、診療所一、伯人個人病院一、マラリア防除衛生局がある。

現在、人口は約五万で都制施行当時の約八倍に達している。尚、トメアスー郡の歴代郡長の氏名と在職期間は次の通りである。

初代ネイ・カルネイロ・ブラジル（一九五九年一二月二一日から六三年一月三一日まで）。

二代ベネジット・デ・パイパー・クリスト（一九六三年二月一日から六三年二月一〇日まで市長代理）。

三代ベニギノ・ダ・コスタ・ゴエス・フィーリョ（一九六三年二月一一日から六三年一二月二〇日まで）。

四代ジルベルト・フカシ・サワダ（一九六三年一二月二一日から六九年一月三一日まで）。

五代ベニギノ・ダ・コスタ・ゴエス・フィーリョ（一九六九年二月一日から七三年一月三一日まで）。

六代ジョゼ・マリア・デ・パイパー（一九七四年二月一日から七七年一月三一日まで）。

七代ベニギノ・ダ・コスタ・ゴエス・フィーリョ（一九七八年から八一年まで）。

八代モアセ・ゴーメス・ベーラ（一九八二年一月三一日から八五年一月三一日まで）。

■交通

（a）陸路　一九七三年、ベレンよりトメアスー、アカラ移住地を結ぶ州道が開通した。また一九七七年にはトメアスー移住地よりＢＲ三六〇号国道を通じてブラジリアに達する州道が開通され、南部諸州への交通は三〇〇キロ以上短縮されることになった。しかし今だに完全舗装ではない。トメアスー～ベレン間の所要時間は自動車で現在五時間の行程であるが、途中バルサ（フェリー）で川を渡らなければならない。こうした道路開通に伴って、郡内地価は旧騰した。また、南伯大資本が続々と投資され、近代的農牧開発が盛んになると共に、ツクルイ水力発電所設置と日伯合同アルミ会社の進出、カラジャス鉄鉱石開発プロジェクトに対応して将来の食糧供給基地としての発展が期待されるようになった。

（b）水路　トメアスー～ベレン間は水路で一五時間の行程である。午後一時にトメアスー波止場をランシャ（小型船舶）で出航し、船中にて夕食、ハンモックでの就寝をとり、多くの小港に寄港したのち、ベレンに到着するのは翌朝の四時頃である。トメアスー～ベレン間の州道開通以降、利用者は減少している。

（c）空路　一九五四年六月一五日、ムニス航空大佐がトメアスー飛行場予定地調査設計に来村し、十字路近くに飛行場建設が決定され

た。同年六月二八日より、鈴木信次郎氏監督のもとに貨物自動車と延べ千人以上の労働力を使用して、開拓記念日開港に合わせて工事が開始された。その結果、幅一〇〇メートル長さ一〇〇〇メートルの滑走路が建設され、一一月一五日にはパラー州知事アレシャンドレ・ザカリアス・デ・アスンソン将軍臨席のもとに飛行場開設式が盛大に挙行された。現在、滑走路は一五〇メートル×二〇〇〇メートルに拡張され、双発機が発着している。ベレン～トメアスー間はテコテコと呼ばれるセスナ機で所要時間は約四〇分である。三〇年前には夢物語であったことが、今現実化したのである。

二、トメアスー総合農業協同組合

（1）野菜組合から産業組合へ

トメアスーにおける組合の発足は一九三一年（昭和六年）の野菜組合であった。組合結成の目的は経済的苦境の打開策として、会社から離れて自主的な販売を行なうことであった。組合への加入金は一ミルで、次年度からは組合費二ミル、販売手数料一五％を徴収する事で野菜の一括販売を行なった。販売量の大きいものは大根（一〇トン）・甘藍（六トン）で、初年度こそ六コントの赤字を計上したものの、次年度からは黒字に転換した。

野菜は主にベレン市内を市場としていたので高田幸之助、遠藤滝

三、八巻七郎、菅野次郎の四氏が福原八郎氏に図り、鳥橋氏をベレン販売人に任命した。後になってベレン販売人は鳥橋氏より村上辰之助氏に交代した。

ベレンへの出荷は南拓の社船アントニーナ号が利用された。

村上辰之助、八巻七郎、斉藤円治、渡辺慎吾、木下又一の諸氏らの活躍により、野菜組合も軌道に乗るようになると、植民地自体の膨張とも関連して、野菜の外雑貨類販売、生活必需品の購買部が設置されるようになり野菜組合を解散し、新たに産業組合を設立しようという気運が高まった。会社首脳部と野菜組合の有力者との話合いの結果、一九三五年一一月一九日、野菜組合を発展的に解散し正式にアカラ産業組合が設立されたのである。

（2）トメアスー産業組合の設立

第二次世界大戦により、会社の機能は停止を余儀なくされると共に、生産物の販売購買権は植民地管理局（ＣＥＴＡ）に掌握された。そしてその権利が回復されないまま、戦後を迎えることになった。

戦後になって、組合幹部の現状に対する日和見主義に対し、青年層は新たに「アカラ農民同志会」を結成し組合改革に着手していった。同志会の改革の主要点は、まず第一にベレン～トメアスー間を往来する船舶を所有することであり、第二は商取引の直接行使権を組合に返還せしめることであった。彼らは苦難の中で新造船ウニベルサール号（一八トン）を進水させ、州政府との交渉においても販売購買権を組

合の手に奪回することに成功を収めたのであった。これ以後、同志会は野菜の運送、航行を担当し、一方組合は生産物の統一販売と生活用品の購買を担当するというような役割分担方式を採用しながら、苦難の時期を乗り越えていったのである。しかしながら、後になって植民地の一元化が唱えられるようになると、同志会は発展的な解消を遂げ、一九四六年（昭和二四年）、従来のアカラ産業組合が公認組合として「トメアスー産業組合」と改称登録されたのである。これに伴い、アカラ植民地もトメアスー移住地と改称された。

（3）トメアスー産業組合と植民地の構造

トメアスー移住地における組合の発展と確立の条件としては、密林の孤島とも言うべき自然条件の過酷さや南拓による移住地経営の失敗等が挙げうるが、とりわけ重要な条件は永年適性作物胡椒の需要の増大と価格の急騰であったといえよう。

（a）組合の経済的基盤

トメアスー産業組合の経済的基盤を確立せしめた最大の条件は、大戦末期から戦後にかけて、胡椒の国内消費に対する供給が不足したことであり、しかもそれに伴なって価格が急騰したことにある。胡椒価格は一九五〇年（昭和二五年）を一つの飛躍として、一九五六年（昭

和三一年）まで上昇の一途を辿っていたのである。

組合が取扱う主要な生産物は胡椒である。一九五四年（昭和二九年）度の胡椒の売上額は一四万五八〇〇コント以上であり、一コントを邦貨換算で五〇〇〇円とすると七億二九〇〇万円にも及んでいる。

（b）世界の胡椒生産とトメアスー

世界の胡椒生産におけるトメアスーの位置をみることにしよう。世界の主要な胡椒生産地はインド、スマトラ、ボルネオ、ジャワ、セレベス、英領マレーなどであり、中国、仏印、タイ、マダガスカル及びブラジルで近年胡椒の栽培熟が高まっている。

第二次世界大戦までは、世界胡椒生産量九万五〇〇〇トンのうち、三八〇〇〇トンはインドネシアにおいて生産されており、インドネシアは世界最大の生産地であり輸出地であった。第二次大戦中日本に占領され、インドネンアの胡椒生産は壊滅状態となり、代わってインドが胡椒の世界市場に登場した。即ち戦前の最盛期に、インドネシアは胡椒の世界消費の九四％を供給し、インドは僅かに二％であったものが、一九五〇年にはインドが八二％に急上昇し、インドネシアは一六％に低下している。

ブラジルは一九五五年の生産予想高五〇〇トン（トメアスー組合予想一二〇〇トン）であって、現地の予想にも大きな開きがあるが、単に信が置けないと言うこと以上に、ブラジル、特にトメアスーにおける胡椒生産がここ二～三年間に急増しているという事実が予想高を大

きく狂わせているのである。

ブラジルにおける胡椒生産の七五%は、トメアスーにおいて生産されている。戦前、ブラジルでは約八〇〇トンの胡椒が輸入されていた。一方、一九五五年当時のブラジルの全胡椒消費推定量は八〇〇～一二〇〇トンであり、この時期において国内消費と供給とが平衡したのである。

（図表１）トメアスー産業組合の組合員数、ピメンタの作付本数、生産量の年度別推移

年度	組合員数	ピメンタの作付本数	生産量 kg
1952	65	253.555	465.000
1953	78	332.655	650.000
1954	78	443.893	800.000
1955	103	564.453	890.000
1956	103	670.443	1.200.000
1957	103	767.230	1.800.000
1958	176	820.665	2.300.000
1959	186	916.500	2.300.000
1960	219	1.193.800	2.368.000
1961	229	1.586.700	3.200.000
1962	244	1.797.449	2.700.000
1963	244	2.005.098	3.791.330
1964	244	1.952.570	4.137.960
1965	271	2.072.134	3.770.240
1966	304	2.538.992	4.856.720
1967	316	2.724.960	5.300.600
1968	325	2.558.170	5.745.900
1969	321	2.356.063	5.674.250
1970	314	2.381.031	4.493.300
1971	289	2.623.932	3.947.650
1972	279	2.956.924	4.495.400
1973	274	2.744.790	4.870.900
1974	297	3.031.601	3.098.800
1975	325	3.948.046	4.037.630
1976	342	2.729.453	3.318.922
1977	343	3.402.838	3.626.577
1978	350	3.228.817	4.327.610
1979	337	3.356.727	3.087.241
1980	318	3.596.324	3.691.434
1981	318	2.526.413	2.703.239
1982	301	2.269.010	2.719.274
1983	259	1.515.398	1.117.452
1984	213	1.339.599	1.078.828

トメアスー産業組合は少なくとも今後数年間は、累年の増産を予想された。そこで組合では移住地の胡椒をインド、インドネシア産胡椒と競わせ国際市場への進出が試みられたのであった。

戦前の最盛期に比較すると、世界の胡椒生産の現状は約二分の一程度である。こうした状況下にあってトメアスー産胡椒が良質であるということは大きな武器となり得るが、ブラジル政府の国内生産物に対

する保護政策に基づいて、国内市場価格は国際市場価格よりもはるかに高く設定され、（一九五五年ニューヨーク相場はキロ当り一ドルであったのに対し、ブラジル国内相場は二ドル相当）今後の供給の増大に伴って国内、国際市場価格が共に更に低下することも考えられていた。しかしトメアスーにおける胡椒生産費は、最高でキロ当り半ドル相当であり、市場価格との間に開きがあるが、国際市場への進出は悲観的でないにせよ、楽観することはできなかった。

ピメンタの成木園（上）とジュースの原料として搬送されるマラクジャ（下）。

（c）組合への加入

組合に加入しているのは日系農家で、例外として現地ブラジル人（非日系）を加えている。戦前に移住した者は全て組合員になってい

る。組合加入には加入金の制限もあって簡単には加入が許されていない。組合員であっても必ずしも生活の本拠をトメアスーにおいているとは限らず、組合員が自己所有の胡椒園を持ち、その生産物を組合に出荷するといった場合もある。実質的な経営を依託してベレン、サンパウロ市等へ転出している例もみられる。

（d）組合の組織と機能

地域社会の居住者との関係は、組合員は生産物の出荷、日用品の購買において、直接的な参与を行なっているが、非組合員は組合員を通じての出荷購買であって間接的な参与である。しかし、組合は単なる販売購買の機関としてのみ植民地にあるのではなく、植民地においては組合との関係なくして日常生活を送ることは不可能である程、その存在は重要なものであった。だが、一九七〇年代後半に入ると陸路開通、ブラジル経済の状況、ピメンタ病害発生等の要因から、様相は一変したのである。

組合の役員は理事長以下、専務・常務・秘書理事を含めた二名の理事と三名の監事、顧問相談役、教育委員、評議員から構成される。

組合は集荷販売とそれに付随する業務を行なっているばかりではなく、植民地社会の行政を代行する部門、即ち耕地配分、道路、教育、医療等の業務を分担している。（但し、制度上、これらの部門はそれぞれ州・郡・文化協会等に移譲された形になっている）

（1）土地配分―植民地の土地は州有地であるが、実質的な耕地配

分は組合のたてた原則（一家族＝一ロッテ二五町歩前後）に従って行なわれた。ただし家族内に一八才以上の青年がいる場合及び未成年者五名以上いる場合には、更に一ロッテが追加配分された。組合によって配分された未開地は州政府に申請しさえすれば、仮地権が発行され、二年後には土地改良を実施したことを認められる個人名儀の本地権が交付された。

（2）道路補修―道路補修工事について、一人の組合員は移住地を貫通する本道を二三〇メートル、区道（各区と本道を結ぶ）を一〇〇メートル、私道を二〇〇メートルずつ分担して工事を担当していた。

（3）医療―組合は直営病院を持ち、利用者は薬代の二％を手数料として納入すれば、医療を受けることが可能である。

（4）学校は植民地内に四校あって、各校には三名の教員がいる。その教員はベレン市においては一五〇〇クルゼイロ前後で雇傭し得る師範出身の教員を三〇〇〇クルゼイロを組合が支払い植民地に招聘しているのである。

また各学校の授業料は免除で、実質的には組合の運営によっている。

このように組合は植民地行政の一部を担当しているのである。勿論、組合は行政機関の末端機関としてあるのではない。植民地には行政機関の組織として、州立トメアスー植民地管理局があり、警察署・税務所なども存在している。だが、植民地における最高の権威は組合である。なぜなら一九五九年にトメアスー郡が設立された背景には、

組合の経済力があったからである。このことを如実に示すのは組合の理事長が植民地管理局の支配人を代行しているという点であろう。また、トメアスー郡が設立され、郡会議員に組合理事が日系人として当選すると、協定によって如何なる政党が多数党となっても、議長にはその日系人が就任することに決定された。

組合自体は選挙運動の母体ではなかったが、このことも組合の権威を裏づけるものといえる。組合は植民地の「権威」であり、組合の意志は植民地の「意志」であるといえよう。

（e）地縁組織

植民地内部は地域的に六つに分けられている。各地区は評議員の選出単位であると共に、組合の意志伝達単位でもある。開拓当初は各区の独立性が強く、各区は孤立した地域社会を構成していたが、現在は組合員各戸に一台以上の自動車があり、その自動車を使用することで行動範囲は拡がり、各区の独立性は希薄化している。

評議員は「下意上達」と言うより「上意下達」の役割を有し、組合の植民地に対する意志を伝達することに重点が置かれている。従って各区の政治的影響力は弱められている。現在、各区の組織はトメアスー文化協会の下部組織として文化協会に統合されている。

三、マオカ農場

栃木県真岡農業学校のブラジル理想農園として、一九六〇年校長加藤七蔵、藤沢広吉教諭の提案に始まり、一九六〇年八月ぶらじる丸で団長長島治（帰国）以下、早瀬義夫（独立）、水沼滋夫（独立）、大根田恒晴（独立）、野沢太（死亡）、高野健寿（独立）の独身学生六名が渡伯し、プレウ四区に伯人既成耕地と胡椒二〇〇本を二〇〇クルゼイロで購入した。その後、六人は独立して退耕した。

第二回は一九六一年七月、ぶらじる丸で稲川真澄、黒崎勝夫、佐々木敏雄の三名が渡伯した。この時一緒に渡伯した長島いく子は夫治と共に帰国した。二回生三名は自炊生活をしながら五〇〇〇本のピメンタを植え付け、勤倹力行した。

一九六三年一〇月には発案者のひとり、藤沢広吉教諭が視察のため渡伯した。二回生のうち、稲川真澄、佐々木敏雄が独立、黒崎勝夫も独立、弟黒崎千雄を呼び寄せたが弟は帰国した。独立した青年達は現在、トメアスーの中堅指導者となり活躍している。

カカオ栽培圃場。ートメアスー組合ー

四、エリザベス・サンダース・ホームのアマゾン進出

神奈川県大磯町、エリザベス・サンダース・ホーム園長沢田美喜女史は一九六二年一月、第二トメアスー移住地造成計画が実行に移されるや、四月一〇日に現地を訪れ、二五〇ヘクタールの土地の分譲を要請した。この地を多年精根を尽くして育てた園児達の安住の地とするためであった。

それに呼応した松浦功氏を団長とする青年六名、南部尚、黒田真琴、鎌田勝行、竹田雄二、鈴木次郎が一九六三年九月指導先発隊として「あるぜんちな丸」で渡伯した。一九六四年七月には「ぶらじる丸」で第二次派遣。清水二六之氏と共に沢田園長は再度現地を訪れ、住宅の建築及び原始林伐採を指示し、木造住宅六〇㎡三棟を建設した。また、沢田園長は分譲地の追加申請を行ない、総面積三二五ヘクタールを取得売た。一九六四年度末までに、原始林四八ヘクタールを伐採し、ピメンタ植付け準備も進めた。

一九六五年八月、園児七名が「さんとす丸」で到着した。七名のうち五名が農場へ入植し、二名は先輩農場で実習を開始した。沢田園長は三度目の渡伯に際し、ブルドーザー及びジープ、トラクター各一台を携行し五カ年計画を実施に移した。その五カ年計画の概要を示したのが左記である。

〔五カ年計画の概要〕

一、原始林の伐採　六五年度四八ヘクタール
　　六八年度一六ヘクタール
二、ピメンタ植付　六五年度四三〇〇本
　　六六年度六三〇〇本
　　六九年度三〇〇〇〇本

三、牧場計画

●現在伐採済みの土地のうち、一四ヘクタールを牧場予定地とし、二～三年のうちに二五ヘクタールに拡張する。

四、入植計画

●六五年現在数一四名の園児入植者数を将来二五～三〇名に増員する。

五、施設の充実・拡張

●木造住宅六〇㎡三棟、レンガ住宅四五・五㎡及び六六㎡各一棟、レンガ造り集会場一八〇㎡の建設（一九六五年）　●レンガ造り住宅四九・五㎡三棟、電気・水道設備、レンガ造り車庫二四〇㎡、倉庫二〇〇㎡、レンガ造り労働者住宅一〇〇㎡一棟（一九六七年）

しかしながら、一九六六年以降、園児の渡伯が不調となり、一九七三年末には当農場に一家族のみを残すだけとなり、多くの期待を寄せられた農場は閉鎖を余儀なくされ、一九七五年当農場は日伯農牧畜有限会社に移譲された。園児達の将来の幸福を願って、あらゆる困難に耐え、目的の達成に奮闘した沢田園長に敬服の念を感じトメアスーの人々は全般の協力をしてきただけに誠に残念な結果であった。ただ、トメアスーにあって特異なこの事業を記念して、ここに記録を残した。

五、ピメンタ油抽出事業の着手

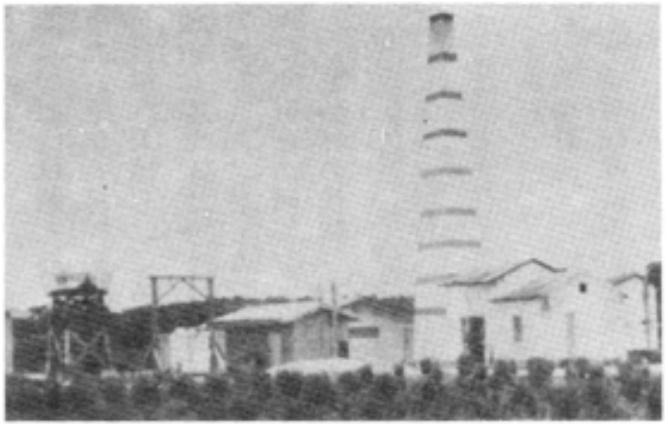
―高砂香料、鐘紡の進出とその後―

胡椒油抽出事業計画は、トメアスーで生産される胡椒に加工の途を開き、将来の増産を安定の方向に導くために、是非遂行せねばならない事業のひとつであった。

一九六二年九月、トメアスー産業組合阿部昇専務理事が事業の打合せで訪日し、当事業の基本方針の決定を見るに至った。日本側の提携先は鐘紡と高砂香料で、鐘紡は南米柘植株式会社当初よりトメアスー植民地と歴史的な繋りを持っていたので、再度アマゾン地域への事業進出であり、一方、高砂香料はアマゾン地域の香料資源の開発という

目的で意見の一致をみたのであった。こうしてピメンタ油抽出事業計画の実現化となったのである。

一九六二年一二月、日本政府はアマゾン地域の移住事業促進の見地からピメンタ産業調査団を派遣票し実地調査を行った。事業計画は当初、試験プラントとして月産オレオレジン二五〇キロ、オイル二五キロを目標とした。このような試験プラントを設置した理由は日本政府調査団が行なった基礎試験の結果、品質及び経済性の問題については充分成立の可能性はみられたものの、企業化の実績がなかったため量産の場合の製造技術及び品質研究、製品販路と市場調査等が必要となって、とりあえず試験プラント期間をもうけ、その期間内にある程度の見透しをたてた上で本格的事業化に入ることにしたためであった。本格化された場合には、月産オレオレジン二五〇キロ、オイル二五〇キロとなる。



鐘紡と高砂香料と提携してピメンタ油抽出事業に着手。

一九六三年二月、鐘紡より塩谷亨氏が着任し、カネボー化学工業株式会社の名称で、会社設立に関する一切の手続きを完了した。

一九六四年度胡椒五〇〇〇本栽培計画で準備が進められ、またあらゆる香料資源の研究につとめ、アマゾン地域で望ましい農業形態の実現の可能性が追求された。トメアスー移住地にとっても、胡椒単一農業から一歩前進した農業が展開される可能性として注目されるものであった。

第二トメアスー香料研究農場にはピメンタ一万本が植えられ、七〇～八〇トンの収穫を上げていたが、それらの胡椒樹は病害で枯死してしまった。

そこで病気に強いサフロール及びカネーラ（ニッケイ）が植えられたが、サフロールは雨量の関係で育成は振わなかった。一九六九年にはパチュリを栽培したものの、やはり好結果を得られず、研究農場は主力を香料作物の適地バイーア州に移転し、トメアスー内にはカネーラ樹を残すだけとなった。

第三部

トメアスーの文化活動

一九五三年以来、戦後移住者の導入はトメアスーの社会的環境を一変せしめ、ピメンタの生産増大と共に経済的基盤の確立、移住地・自治体の行政組織の実現と共に、一般社会的要素も漸次加わり、今日、一人前の社会としての構成を見るに至った。

一般農家の経済的基盤の確立は、移住者に定着と生活の安定を与えて、その生活の向上は即ち、物質的あるいは精神的にも余裕のある生活態度となり、この時代において趣味を主体とした、各分野の娯楽クラブ組織が勃興したのも当然の成行きと云える。

省みれば、トメアスー移住地も五〇年の星霜を経るに至り、アマゾン地域における最古の移住地としての地位はあらゆる面での代表的、指導的立場に置かれているといっても過言ではない。

一、トメアスー文化協会

戦前より戦後にかけて、交通、教育、諸手続事務、マラリア防禦等大きな問題がトメアスー移住地には存在していた。当時、僅かに七〇

戸程度の戸数ではこれら諸問題の解決は不可能であった。

当時の村の中心機関はトメアスー産業組合であり、組合は本来の業務の他に教育・衛生・道路・諸手続等の業務も処理していた。第二トメアスー移住地建設等による人口増加や組合本来の業務自体の繁忙さもあり、一九六一年地区連合会を設立し、教育・衛生といった問題を処理することになった。その後、一九六六年に地区連合会はトメアスー文化協会と改称、七〇年にはブラジルの公認団体としての認可を受けた。トメアスー文化協会の役割は日伯文化交流、日系人間の相互扶助、各種クラブ活動、スポーツ活動、日語学校運営等である。

日語学校での給食

■文化会館の建設

トメアスー入植三五周年記念事業として、トメアスー文化会館が建設された。二階には事務室、放送及び映写室があり、一階は講堂、催場として利用されている。その後、文化会館別館を増築し、調理室、図書室、目伯援護協会巡回診察室に充てている。一九七四年には第二トメアスー移住地に分館を建設したが、その内第二トメアスー診療所施設は国際協力事業団現地機関の撤退にともない、ベレン市にある日伯援護協会日伯病院に移譲された。

二、トメアスーの教育

移住地内には、トメアスー、中央、ブレウ、イピチンガ、第一、第二の州立小学校が六校ある。これらは植民者が創設して州に寄附し、現在は州の経営となっている。生徒は約一三〇名。現在日系二世が教師として伯人教師と共に教鞭をとっている。また、小学校の他に中学校と高校夜間部が移住地内に開校されている。

ピメンタの好況によって移住者に、経済的余裕が出てきたため、上級学校への進学を希望する子弟が多くなり、ベレン市や遠くサンパウロ市の高校・大学に進学する子弟もいる。こうした状況はトメアスーの次世代を担う指導者育成という点から重要であり、このような傾向は維持されねばならない。州立の小・中・高校の他に移住地内には、都立小学校、文盲撲滅教育校、宗教団体経営の学校がある。

■トメアスー日語学校

トメアスー植民地における日本語教育は、一九二九年九月の第一回移住と共に始まり、戦前、戦後を一貫して行なわれてきた。

一九二九年に日語学校父兄会を結成し、農家の倉庫を借用して教室にあて、一九三五年まで丸弘毅氏が教師として、西尾あい氏、諏訪夫人が助手で日本語を教えて来たが、南米拓殖会社の整理に伴い、丸氏が休職となって一時中断した。その後再開され、一九三五年～一九三六年にかけ全植民地より寄附を募り小さな校舎を建築、机二〇脚を設備して平坂氏夫妻を招聘し、同時に第二学校を開設した。一九三六年より紺野宗一氏が第一、第二の両校を担当し、千葉太刀夫氏が臨時に手伝って、一九四一年戦争勃発まで継続された。

戦時中は敵性国語として弾圧され、教科書や日本語の書籍は殆ど焼却し、紺野氏は密かに個人家庭を巡回教授していた。

当時の日語学校の父兄会々長は丸弘毅氏、幹事山田義一氏である。

ピメンタ産業が軌道にのり経済が安定するに伴って日語教育も旺盛になり、一九四七年サンパウロより菅野道夫氏を教師として招聘し、トメアスー産業組合に職籍を置き、植民地内四カ所に教室を設け、巡回掛け持ちで日語教育に努めた。

戦後移住が再開され、一九五三年より移住者が多数入植して植民地の日本語は急速に進歩し、二世層も日本語を話すようになった。

戦後移住者の中で教師の経験のある伊藤希彦氏が戦後移住者子弟のために私塾を設け、橋爪会館で日本語と珠算を指導していた。

トメアスー文化協会では日伯両国の緊密化に鑑み、日本語教育の必要性を痛感、積極的に推進させるため、一九六一年より伊藤氏の日語私塾を継承した。

ベレン総領事館、国際協力事業団より種々の助成を受けるようになってからは、一段と充実したものになった。

現在の日本語教育の形態は、一九七二年トメアスー文化協会が招聘した新井亀吉氏夫妻により培われたものであり、五年間の努力の賜である。

一九七七年同氏夫妻帰国後、諸石輝雄氏、角田修司氏、高松しず氏、三宅昭子氏等が教鞭をとり、一九七八年より一九七九年まで諸石輝雄氏、大西保子氏、高松しず氏が教壇に立ち、一九八〇年より松崎紀太郎氏、榎末子氏、伊藤栄子氏、菊川雅幸氏に変り、一九八一年大西保子氏復職して教師陣は現在に至っている。国際協力事業団による現地日本語教師本邦研修に各教師が参加し、玉川大学にて実技を研磨して来た。

一九八二年本校より一二キロの地に農家の倉庫を借り受け、低学年の通学の便を考慮し、ブレウ分校を設置した。新井慶子氏が教鞭をとっている。

一九八三年第二トメアスー移住地イピランガ地区にイピランガ分校を設置した。久保美恵子、谷沢喜巳雄氏が受け持っている。

第二トメアスー移住地クシュウ地区には、宗教法人後援の私塾山根学級が一九八〇年一月六日開校し、一九八一年二月住民の協力で第二センター区公民館に教室を移す。四月国際協力事業団第二トメアスー

移住地第二センター移住者収容所の建物を借用し、教室に当てる。名称を第二トメアスー日語教室とし、事業団助成対象校として公認を受ける。校長（経営者）山根緑、教師に池上良子氏を迎え、氏の帰国後、八月より渡辺多喜子氏が教鞭をとっている。生徒数四〇名。

（文責　松崎紀太郎）

トメアスー日語学校の歌

作詩・作曲　新井亀吉

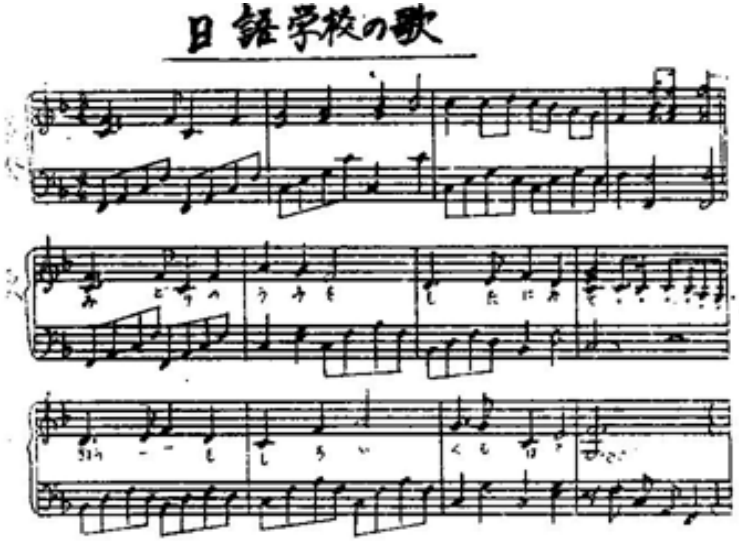
一、緑の海を　下に見て
今日も白い　雲は飛ぶ
うねり流れる　アマゾンは
幾億年の　昔から
今も変らぬ　母の河

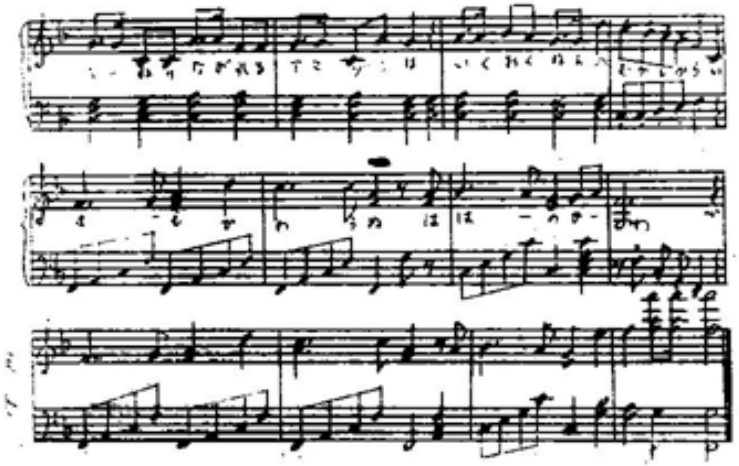
二、神のお恵み　限りない
このアマゾンの一点に
斧を振るって　五十年
日本人の　血と汗で
築いた楽土　トメアスー

三、優れた父母の　血を継いで
生れ育った　わたしらは
日本とブラジル　つなぐ橋
知識を磨き　技を錬り
あすのブラジルを　つくるのだ

四、共に希望を　湧し合い
日語をまなぶ　ぼくたちは
よく見よく聞き　よく思い
大アマゾンを　おし拓き
世界の平和を　つくるのだ

作詩・作曲　新井亀吉





三、トメアスーの保健衛生

一九三〇年南米拓殖会社が移住地内に病院を開設し、医師一名を駐在させ日系人の保健衛生面を担当していた。しかし、その後南拓農場閉鎖により、トメアスー産業組合がその施設を受け継ぎ経営に当っていたが、一九七五年に閉鎖され、翌七六年、隣接地に新たに州立建設された。

一九六〇年から、マラリアが移住地内で猛威をふるい多数の日本人が罹病したので、六四年にはマラニア撲滅委員会が結成され、防除に努めた。

その結果、マラリアは下火となったため、その医療設備は州衛生局に移管され、委員貞会は解散した。

一九六九年第二トメアスー移住地開設に伴い、医師一名が駐在するようになった。現在、トメアスー移住地の保健衛生はアマゾン日伯援護協会経営の日伯病院が受け持っている。

トメアスーは赤道直下の熱帯ジャングルに囲まれた土地だけに、保健・衛生面の問題はより一層の充実が望まれる。

四、トメアスー連合婦人会

一九七〇年代に入りピメンタで栄えたトメアスー日系社会は、ピメンタの病害により危機に瀕していた。

その中にあって、家庭における主婦の重要性は益々その度を増して来た。

今まで組織的なつながりのなかった主婦問の交流を図り、教養を高める事によりその力が更に増大し、トメアスー村の更生に資することを願って、トメアスー内一五区域から役員を選出し、一九七三年七月二十九日、トメアスー連合婦人会が発足した。

名誉会長　平賀清子
相談役　押切愛子
同　大沼美津
会長　武田コノ
副会長　海谷コト
同　長浜キク
書記　渡辺悦子
会計　池田綾子
同　小野昌子

初代役員を選出して主婦の底力を遺憾なく発揮、仕事の合い間をぬって精力的に活動が続けられ、トメアスー社会にとってなくてはならない組織となって今日に至っている。

【主な行事】

母子会、卓球大会、一五歳誕生祝、手芸講習会、料理講習会、講演会、お盆用花造り、組合総会手伝い、歓送迎会手伝い、慈善バザー、ファッションショー、研修旅行。

（文責　海谷コト）

五、トメアスー日伯青年会

一九五〇年代のトメアスーはピメンタ景気で希望に溢れていた。農家の子弟達の多くが勉学のため州都ベレン市やサンパウロに行ったが、中途でトメアスーに帰って来た青年も少なくなかった。灼熱の太陽の下での労働は厳しかった。若者がただ働くだけの生活に味気なさを感ずるのは当然である。

一九五九年五月二日、加藤三郎ご夫妻の努力で二世青年男女二三名が集まり、「日伯青年会（通称二世会）が発足した。

初代会長　沼沢陽一
副会長　関伯一
第一書記　千葉カズ子
第二書記　エリオ・フェーロ
第一会計　加藤馨
第二会計　マリア・コンセイソン・フエーロ
社会担当　斉藤岩夫

文化担当　永井昭
体育担当　柳橋武夫
監事　西尾俊治
同　柳橋武
同　山田充

これらの役員を選出し生活学習活動を続けて来た。

一九六八年六月二三日、臨時総会を開催し、特別委員会（永井昭、近藤修、岸透）によって作成された定款を承認し、評議委員会制を導入、伯国公認団体として登録する。

トメアスー開拓五〇周年に当たる本年は、当会も二〇周年を迎える。

一九七三年一二月一五日には念願の本部建物を十字路トメアスー文化協会会館隣に落成、トメアスー開拓五〇周年祭典当日、アラシジ・ヌーネス州知事他多数の来賓の臨席を得、二世会プールの落成式が行なわれた。

土地は若者のためにと藤橋鋼三氏が寄贈、若者たちは寸暇を倍しんで奉仕した。次なる目標を綜合体育施設の建設とし行動している。

特筆すべきは、この大事業を遂行するに当り終始黙々とその先頭に立ち努力を続けられた近藤修氏が、三六歳の若さで不帰の人となったことである。惜しまれてならない。

（文責　永井昭）

六、トメアスー新聞

一九六五年三月三〇日、トメアスー産業組合従業員親睦会で機関紙として『緑風』創刊号を発行したことから始まる。

植民地近時の流動性に備え、一般に解放すべく、一九七三年一月「トメアスー新聞」と発展改称し、植民地唯一の言論と報道の機関として一大抱負のもとに発足した。

植民地一般から原稿を募集し、三六号よりトメアスー新聞となる。自由な新聞と云っても営業を目的とするものと自から性格を異にし、植民地の機関紙的存在であって、植民地という枠より逸脱することは出来ないが、厳正な所論と批判は大衆と不離・不迎合の関係を保つことによって生れ、目まぐるしい社会に対する指導感覚と説得力とを要求されることは他と共通である。

コロニアもピメンタ単作のため病害侵入で大打撃を受け経済的に悪化、多角化社会となり、スタッフ不足もあって、資金難から運営がむずかしくなり、開店休業を繰り返していたが一九七八年度を最後に休刊となった。

トメアスー産業組合親睦会初代会長＝北島義弘、編集長＝福島栄。

（文責　鈴木こう治）

トメアスー新聞第三五号（一九七一年六月一七日）

一二〇名の日系人がモジュウ郡に移転か……

ピメンタ病害の対策も解決されていない現在、多数の日系人がトメアスー植民地を出て他の郡に移転し、その新耕地にピメンタ園を造成する動きは最近特に活発な動きを呈している当植民地だが、モジュウ郡長オートン・ゴーメス・デ・リーマ氏は去る五月二二日当地を訪問し、郡役所などに挨拶のあとトメアスー産組理事長山田元氏と会談、秘書と共に各農場を視察、つぶさに当地を見学した。

午後から開かれた移転希望者会議に出席し同部の新植民地造成案とその計画の進行状況について、郡長としての意見と立場を細かく説明し日系人の誘致を行なった。

当植民地においてすでに八三名の申込者があり、ベレン近郊の三七名を含めて一二〇名の日系人が同郡への再移住を希望しているという。ただ単に同郡だけでなく、他の郡や州への再移住は日増しに多くなる一方だが、この問題は当トメアスー植民地にとっては大きな問題となろう。

七、トメアスー俳壇

一九六〇年、青木月斗門下の吉丸丘南を迎え、藤橋耕春、阿部冬日等の奔走により「大河句会」を結成、参加者十数名にして盛会をきわめた。

丘南陣の指導よろしきを得て、熱心なる会員の句作により、今までどこにも知られなかったアマゾンの俳句が、南伯はもとより、遠く母国日本にまで紹介され、アマゾン俳人ここにあり、という感銘を深くした。

一九六二年には、日本の俳聖高野素十、南伯俳壇の巨匠佐藤念腹も当地トメアスーを訪れ、句座を共にし、雄大なるアマゾンの大自然に驚嘆と羨望の讃辞を惜しまなかった。

丘南師急逝後も、幽界に旅立ちし俳人、転住の俳人と入れ替わりはあったものの、句友の一致団結により「大河句会」「樹海」「花胡椒」「トメアスー俳句会」「アマゾン拓土句会」等、紆余曲折はあったが、アマゾンという特異な季節感に翻弄され乍らも、トメアスー俳壇の伝統を守りつつ、句友一同、先輩の師、藤橋耕春、横倉牧民を囲みその血脈は受け継がれている。

（文責　榎すえ子）

一家あり庭あり菊の香に立てり　藤橋　耕春

夕焼けや晩鐘椰子の花こぼす　横倉牧民

パウダルコ太古の森をバス走る　牧野万寿子

もの言うも黒きダイヤの移民祭　峰下妙子
亡き父と無言の対話魂祭り　松崎紀太郎
ものすべて影絵の如し大旱り　榎すえ子
炎天やバルサに涼を満喫す　三宅昭子
倖せと思い直してねぎ刻む　渡辺悦子
アマゾンに二人の絆銀河澄む　竹下澄子
山焼きの址をたずねて亀拾う　加藤三浪
大虻のアマゾン河を跨ぎけり　細川白生
天高く大王椰子の風に鳴る　谷口風慮
滴りに命を托す苔の花　山口つや
山焼きやゴッホの太陽夜に急ぐ　武藤霞城
コスモスを活けて心も清すがし　野田八重
かたつむりふと見失う立話　大口みよ
開拓の夢まだ遠し花胡椒　峰下牛歩
童顔に返りし父母と焚火祭　小林成子
夕焼けや子と童心の刻すごす　海谷山草
二代目も胡椒守りて移民祭　工藤末敏
夕焼けや天然の色塗り替えて　工藤秋子

八、芸能クラブ

一九三一年トメアスー（当時アカラ植民地）に青年会が結成され

て、当時の南拓社員鎌田譲氏、戸田子郎氏、川越邦夫氏他数人が入会し、団長関勝四郎氏、副団長沢田毅氏のもとに南拓より楽器の貸与を受け運動会等で演奏していた。

時代が移って第二次大戦後、ブラジル合衆国と日本政府間で移住及び植民に関する協定が結ばれ、一九五三年より移住が再開された。トメアスーに入植者があい次ぎ日系人が急増した。

芸道に通ずる椿日吉氏が戸田子郎農場に配耕になったことで、耕主の理解協力により有志が集まって、一九五六年一月四日、慰安演芸会を盛大に催した。以後沢田★氏の音楽趣味による楽団キング・ローズ（後ジアマンテ・ネグロ）の後援により、一九五七年、芸能クラブが結成された。

会長＝椿日吉、総務＝石塚明、会計＝細川悟一。

以後、毎年欠けることなく新春好日二日間を大会日に当て、植民地の潤滑油的役割を果して来た。

当時はこうした演芸会を催す会場もなく、産業組合の出荷場の二階に板を並べ舞台を仮設し、出演者は勿論大会役員の池田幸志朗氏始め裏方担当の苦労は並大低なものではなかった。

一九六七年、トメアスー文化会館が建設されてより、会館が会場に使用されるようになった。

演芸委員会から芸能愛好会と、現在は芸能クラブと時代と共に名称も変り、「のど自慢」「三つの歌」「紅白歌合戦」「ゼスチャー」モダンダンスからカラオケと日本での人気番組が異国コロニアにおいても盛大である。なかでも日本舞踊のあでやかな情緒に郷愁を感じながら、

明日への生活の潤いとなっている。若者から高齢者までの楽しめるクラブになってきたといえよう。

芸能活動は明日への生活の潤いとなっている。

九、囲碁クラブ

一九五六年、椿日吉氏の呼びかけで囲碁愛好者により囲碁クラブが結成された。

初代会長に真根井孝門氏、幹事兼会計に椿日吉氏が選ばれた。当初会員は一八名で毎月一回の例会と年一回の大会を持ち、現在三〇名の会員によって続けられている。家庭娯楽として将棋、麻雀と共に楽しまれている。

トメアスー開拓五〇周年記念「アマゾンの歌」ロケ隊俳優の山本

学、亘、兄弟より、囲碁に関する教材が寄贈され、〃アマゾンの歌杯〃を設け囲碁普及に努めている。

会長＝日野文夫、幹事＝佐々木勇幸、　会計＝吉村輝明。

（文責　佐々木勇幸）

アマゾン国際農友会

アマゾン国際農友会はアマゾン地域の日系四組合（トメアスー、パラエンセ、アマゾニカ、モンテ・アレグレ）によって一九七九年二月七日に結成された。結成目的は農業後継者育成であり、より具体的にはこの目的に沿って組合員子弟を農業実習生として米国カリフォルニア州に一年間派遣し、農業実習の体験を通じて農業を理解し、ブラジルの地域社会発展に寄与する人物を育成することである。

トメアスー新聞第三九号（一九七一年一一月三〇日）

コロニア融和への橋渡し

我々のトメアスー新聞もこの新年号で三九号を数える。一九六五年三月、産組親睦会機関誌「緑風」として「摩擦の無い所にエネルギーは生ぜず、エネルギーの無い所に進歩はない、紙上での論争を期待する」と張ち切れんばかりのファイトを秘めて、第一号を世に送った。

以来八カ年、トメアスー植民地唯一の報道、言論機関紙として当植民地と共に歩んで来た。その間色々の絆余曲折はあったが、常にその時々の問題点を取りあげ、読者にアピールし、建設への前進の糸口を見い出そうと努力し続けて来た。

特に昨年は道路の開通という植民地にとって未曽有の出来事があり、他の地域と違った形態で進んで来た当植民地が、大きく変遷を余儀なくされる時期が到来した。今後急テンポで変るであろうこのトメアスー植民地を、我々住民がいかなる施策、方法で対処し、発展させねばならないか。手近かなところでは主作物ピメンタの病害対策、これと付随した耕地、道路問題、郡、組合、文協、病院、学校等、より高い生産量を維持し、より住みよい、より楽しい村とするために解決せねばをらない問題が山積している。　これらの問題を一つ一つ住民一人一人が真剣に考え解決するのが我々の義務であろう。

トメアスー新聞はこの様な考えに立却し、諸問題解決の糸口を見い出し生活向上のため、村民融和のための言論機関として、常に光あるものでありたい。新聞への投稿を希望すると共に、投げかける諸問題に対して、読者諸氏の反応を期待してやまない。

〃主張〃欄より―

第四部

思い出で綴る五〇年

トメアスー開拓五〇年の歴史は、青壮の意気と情熱が織りなした高い響きをもつ叙事詩である。慈愛、勤勉を尊ぶ精神は脈々として今も受け継がれ、それが人をつくり産業を興こし地域社会発展に寄与している。ここに輝かしい伝統を創り継承し発展させてきた諸先輩の思い出の記を掲載し、その時々の印象深い出来事と感慨を紹介したい。

それは思い出で綴る五〇年史である。懐旧の念を越えてトメアスー開拓の確かな証でもある。（配列は順不同）

トメアスー移住五〇年祭に寄せて

慶祝使節団委員会事務局長　　中村浩三

アマゾン日本人移住五〇年祭が、盛大に催されますことを心から慶祝いたします。

日本に於いても、この歴史的祭典に御協力するため海外移住関係の

一一の団体が参画して、日本人アマゾン移住五〇年祭の日本側推進委員会が設立されました。会長千葉三郎、副会長田中竜夫（元通産大臣）、同田付景一（元ブラジル大使）、事務局長に私が選任されました。多感な青年時代をブラジルで過し、トメアスー第一回植民者からの皆様方と苦闘を共にして来ました私にとって、この意味深い祭典のために日本で御協力出来ますことを何よりの光栄と思っております。

委員会発足以来、大沼トメアスー委員長と共に東北六県の県知事を訪問して御協力を得たり、目下の大役として、全国各方面から五〇年祭祭典慶祝訪問団員を一人でも多く送り出すため日夜奔走しております。

トメアスー時代の一番苦しい思い出は、会社が事業縮少を決めた高木支配人時代だったと思います。会社も移住者の皆様も失望のどん底、その上に悪性マラリアが蔓延し、トメアスー病院はマラリア患者で満員、注射器を持って長い病院の廊下を走る看護婦さんの白衣姿が、煌煌とした灯の中で夜目にも良く見えました。古村看護婦長（現・東京芙蓉会会長四ヶ所よし女史）が突然会社の事務所に来られ「中村さん、棺桶何個ありますか、」私は「大人、子供用併せて七、八個位は船着場の倉庫の奥に置いてある」と答えました。

男まさりの婦長さんは、「ダメダメ、もっとたくさん用意しておいて！」と言われ、私は暗い嫌な思いがしましたが、ブラジル人の老人大工に頼んで人目のつかない森の中に仮小屋を建て、大小二〇個の棺を作りました。

四〇個分の材料を運んだのですが、出来上ってくる棺桶の積み重

なっているのを見て益々嫌な気持になり、「もう、これでよい。これ以上作るな！」と言って、積み重なった棺桶に椰子の葉を一杯に掛けて「これは、どうぞ使うことがありません様に」と、心から祈り立ち去りました。

思い出せば当時、祖国を遠く離れたアマゾンの奥地で、主作物を何にして生活したらよいかと、毎日毎日除草とマラリアとの闘いに明け暮れた事が思い浮かびます。

それから五〇年、現在のトメアスー植民地の発展を見るにつけ、始めからトメアスーに残って頑張り抜かれた皆様こそ真のパイオニアであると頭が下がります。

トメアスー万才、万才。

五〇年祭祝典によせて

日本アマゾニア協会事務局長　　松村徳次

今年（一九七九年）はアマゾン（アカラ）に、計画的に入植が行なわれて半世紀を経た事になります。これを記念して一一月に総合的にベレンで、更にマナウスとトメアスーに於いても其々の地域にふさわしい事業と行事が盛大にそして多彩な催しが計画されています。お目出度い限りです。

越し方を振り返って見ればほんとうに永かったと感じる人、或いは

短かったと思う人など、感じ方に違いはありましょうが、私は深い感懐を込め、御苦労様でしたと申し上げます。

私事に亘って恐縮ですが、良い機会ですから私の履歴を述べて祝詞に替えます。

昭和四年（一九二九年）に林熊男ご夫妻、久保田ご一家、並びに平良ご夫妻などと同船で渡伯しました。ブラジル語ができないので唖の旅でしたが愉快でした。

各々が持場に配置され、言語の不自由をものともせず彼等は開拓に、私は南米拓殖（株）の一員として、精一杯の苦闘を続けえたと確信を持って言い切れる事に満足しています。しかし、会社の都合とはいえ、一九三六年に日本に帰還せねばならなかった往時を思うと残念の一語につきます。

特に現地にとどまって引き続き開拓に精進を重ねられた同志を偲び、いつまでもいつまでも胸の熱くなるのを禁じ得ませんでした。そして戦争に突入してからも色々な場面に遭遇する度に、アマゾンの資源物質に結びつけては考えさせられたのを昨日の如く思い出されて転た感慨のあらたなるものがあります。

私が故国に帰着した当時は、満洲国の独立を達成させたとは言え、国際社会から完全に孤立し、昭和一二年（一九三七年）の七夕（七月七日）に日支事変、それから四年間泥沼の戦いをつづけＡ（米）、Ｂ（英）、Ｃ（支）、Ｏ（蘭）の石油を中心とした締めつけは日本の生存さえおびやかされるに及び、一九四一年一二月、第二次世界大戦に突入し、悪戦苦闘の末に力つき無条件に降伏したのはご承知の通りで

す。緒戦の勝利がはなばなしかった為、終末の惨めさはただ茫然天を仰ぎ焦土と化した戦いの跡に悲しみ且つ疲れ果てたとしても、けだし当然かもしれません。

日本民族が初めて味わった痛烈で深刻な体験、それは、国敗れて山河ありでした。ふっとアマゾンの皆さんに思いを馳せ一首。

椰子の葉蔭に月影さえて
すだく虫の音日本（ふるさと）の
便り聞かせて夢さめる
（白頭山節で唱うと調子よい）

戦後三五年が過ぎて感無量です。私の身辺にも色々な事が起こりましたが、在伯の皆さんの立派な業積は真に敬服にたえません。日本も新しくなりましたが、これには国民の総力が注がれた賜でしょう。新日本に生まれ変るための、国造り制度改革にも随分精力を便いました。各国各層の努力がみごとに結実し、今日見るような民主化した繁栄の日本を是非皆さんに見ていただきたいと思います。あの焦土の中で自失していた私共日本人のよみがえりの姿をです。

あの当時は、世界の誰もが今日の日本を予見出来なかったでしょう。誠に世紀の奇蹟、世界の驚異であるのは当然かもしれません。多少の行過ぎや試行錯誤は今後も起こりましょうが、胸を張ってスペース時代、お互い手をたずさえて元気で頑張りましょう。

秩序と進歩の国の皆さんに、日の出の国からエールを贈ります。

五〇年祭万才。

父をしのんで

協昭土建工業（株）　代表取締役田中紀久子

私の父田中久雄は、御地祭典の日を待てずすでに第二の故郷トメアスーに里帰りしているのではないかと思います。父は今年五月永眠しました。一番楽しみにしていた祭典を目前に控え、残念でなりません。ブラジル行きを楽しみに病気の療養に励んでいたのですから、亡くなる直前祭典の名誉顧問の推薦委嘱状を受け、父もさぞ満足だったと思います。その書状を遺体に添えブラジルの本で埋めて送りました（父の周りにはブラジルの話題が絶えませんでした。旅行をされる方やされた方がよく見舞って下さり、話がはずんでいました。ブラジル関係の集会にも参加していました。そんな時の父は生き生きして若かりし頃の思い出や昔のアマゾンを大いに語っていた様です。昭和四年七月の第一回アマゾン移民入植の際は、突貫工事となり現地人を使っての仕事は習慣の違いなどで大変なものだったようです。

まずアマゾンの原始林を切り開き、家を建て井戸を掘り、道をつけて、日本からの移住者がアマゾン生活の第一歩を不自由なく、希望を持って働ける様にと植民地建設に一生懸命働いたそうです。マラリアなど恐れてはアマゾン開拓は出来ないと、風邪位にしか思っていなく、第二、三回と移住家族が増えるに従い、次々と学校や病院等の建

築物に取りかかり、夜はランプの下で図面を引き、昼は現地人を使って大奮闘だったそうです。

上半身裸で、日本のはちまき姿で高い建物の頂上に立ち現場の指導を取っていたそうです。

その後も幾多の苦労を重ね、七年間アマゾンの地で過しました。私が幼い頃から家には時々外国人が泊っていました。当時八幡製鉄所へ研究に来るブラジルの人達などで、父は貴国にいた時非常に親切を受けたからと言っていました。

病院のメモ帳に南拓トメアスー社員寮々歌が一番から十番まで書いてありました。父は常にブラジルを思っていたのでしょう。父は常に千葉先生を始め当時のお友達の温い友情を受け、幸せな人でした。父共々御地の発展と日伯親交のなお深まらん事を祈ります。

再びトメアスーへ

元南米拓植株式会社

パラー支店総支配人　植木寿

私は昭和三年から九年まで満五カ年、南米拓殖株式会社パラー支店の支配人として、現地に常駐せられた福原社長の下に働いたのでありましたが、其の間一番の出来事は、一部不良植民の煽動によってトメアスー事務所が占拠せらるるに至ったことでありました。

社長の命により、前田光世（コンデ・コマ）氏と共に急遽トメアスーに行き、集合の植民諸氏に対し、契約条項通りの遂行は無理と思われるから、日下東京本社とその緩和につき折衝中であること、又、収穫期の来た米をそのままに放置しては内地米と異り、皆落穂して収穫は皆無となることなど、諄々と説明して速やかに占拠を中止するよう訴えました処、納得せられて解決するに至りました。

今度、五〇年振りにトメアスーに行く事となりました。当時の植民の方々が、果して幾人健在せられてお会いできることになりますか、心の高鳴りを覚える次第であります。

アマゾンの想い出

勝本志郎

昭和五年渡伯。サンタ・マリア並びにアサヒザール牧場に六年。一一月アカラを後にしノロエステ線よりパラグァイ、アルゼンチンに至る。昭和八年帰国。酒類販売業、日支事変、大東亜戦争に応召、九州にて終戦。

在伯当時は馬二頭、土人と同じ屋根の下で自炊生活。野菜のない時は、一時間も費しイナジャの新芽を取ったこともある。豚の頭の皮をむき、目鼻つきのままラッタで二、三回位水炊きし、訪問する仲間に供した。中々美味であった。

日ならずしてアサヒザール農場の牧場に移転、独身寮に起居するよ

うになったが会社が目指す主作物のカカオは中々意の如く進まなかった。しかし、日本人のニュースは大変好印象を与えていた様であり、牧畜業視察の為マラジョー島に出張旅行をした時には、島の娘さんに大変好意を持たれた。帰路カショエイラに寄った時など、着いた日から何処ともなく娘さんが集まってきて、私等の村を案内するとて教会や色々な処へ手をつないで引廻され、うれしい悲鳴をあげた。夜になると、ダンスを知らぬ私を入れ替り立ち替りに引き廻されたのは全く忘れられない。

アサヒザール農場の気象観測嬢ともラジオ、テレビも無い時代ゆえ、夕方にはよく農場内のバナナ園あたりを散歩したものである。その頃、ドウトール・セーダ・デ・ビッショ森老人のたきつけもあって、彼女のほうで熱を上げるようになり、だんだん深みに進む様な気がしてならなかった。

一方試作中のピメンタは海のものとも山のものとも判らず、意を決して社を辞し、リオ、カンピーナス、リンス、パラグァイ、ブエノスアイレスとパラーを出てから六カ月間南米大陸を放浪した。ブエノスアイレスでは大村君の知人の江見君にも会った。西、葡の両国語を解する江見君との旅は大変楽しかった。

一九七二年一〇月、ぶえのすあいれす丸にて神戸を出帆、妻、長女を伴って約三カ月の海外旅行に出た。ベレンには残念ながら上陸できず、沖に停泊しただけであった。そのため、妻子にベレンやトメアスーを見せてやることができず悔いが残ったが、モンテ・アレグレに居た長谷川保二君がわざわざ来訪してくれたので、ひと晩、昔話に花

を咲かせることができて嬉しかった。再会の様子は、確かパウリスタ新聞に掲載されたと記憶している。

アマゾンの野生動物について

須藤忠

アマゾン熱帯の多雨なる地方は、植物の発育繁茂が頗る旺盛であり、そのためか動物は熱帯地方、否アマゾンにおいては概して草食性動物が多く繁殖し、それと相対して食肉獣の大きな動物が現われているところが不思議である。このアマゾン地帯には、古来人跡未踏の部分が多く、猛獣毒蛇の跳梁跋扈するに適地であり、それらの種類も員数もきわめて多いであろうとは誰しも思い想像するところであるが、この想像と実際との間は著大な懸隔がある。したがって、南米大陸の四割を占めるといわれるアマゾンに存外大獣が乏しいの広むしろ当然のことで、アマゾンは動物が植物のために圧倒された地であると土地の有識者はいわれたが、蓋し至言であると思われた。或いは、植物の密集叢生がその度を越え身駆雄大なる禽獣の疾駆に適せざるにありという学者もあり、食肉獣の大きな動物は比較的少ない。

そのなかでも野獣の大きな動物としては、まず獏が第一であろう。土語にて「アンタ」と呼ばれるその形態は、豚と象との中間動物と見

得るべきもので体長二メートル余、肩の高さ一メートル余に達する。一見したところ脚の少々長い豚の様で、その鼻は短小なる象鼻の如く突き出し、耳は比較的大きく且つ直立して馬の耳の如く動く。毛色は一様に暗黒色であるが、頭の下面、咽喉部、耳の先端は白い。外観は愚鈍に見えるが、その動作は案外に敏捷である。性質はきわめて臆病で決して人間を襲うことなきも、進退極まる危難に遭遇した場合に限り、その有力なる歯を剥いて烈しく防禦するという。また食物は主として樹木の芽、草、果実などで、その肉は頗る美味であるといわれている。

昭和七年、当植民地第二回入植者で福島県耶麻郡駒形村出身の遠藤氏などがこの獏を捕獲したるを、余もその獏を見学したのであり肉をも食したが、いわれるほど美味いともいわれなかった。

この獏の親類に、二種の野猪がある。（福島県喜多方市）

開拓五〇年祭を迎えて

平賀清子

樹海のまっ只中を克服して、このトメアスー植民地建設の礎石となられた先駆者のお導きに続いて、たゆまず活躍されている気鋭の方々のおかげで今輝かしい五〇年祭を迎え感無量、遠き道のりもアッという間に過ぎた様に思われます。

なかなか邦人数が増えなかった此の地にも、二五周年後の頃より新

鋭の方々を迎え、ますます活気を呈し、二世三世の数も増え、教育熱心な一世に育まれたこの後継者への期待は、楽しい未来につながり前途洋々たるものをおぼえ頼もしいことです。

陸の孤島の地獄などといわれた此処が、私たちの大切な村、かけがえのないトメアスー村。この中の一軒一軒を守る私たち主婦も、よりよき合理的を暮しをとお互いに学び合い、真険に生きていきたいと思います。

都会への道路も開通し大きく外に目を向ける時、広大なブラジルの中の日伯関係を考える時です。相互扶助の精神で、お互い小さい時から助け合い、仲よく平和な世界をと感謝謙遜を忘れない毎日を過したいと念じております。

南拓社員先発第一船で赴任した思い出

服部連太郎

南米拓殖株式会社が伯国パラー州に植民事業を開始されることになり、私は社員に採用して頂けまして、一九二八年夏、日本郵船の河内丸で神戸から赴任しました。

一行は隊長の奥正助さん、星野修さん、阿部留次郎さん、私の四人です。出帆の際、千葉三郎先生がデッキの私に向かって投げて下さったテープが最後まで切れずに伸びに伸びて、勇気づけられました。

六〇日でリオ・デ・ジャネイロに到着、鐘紡派遣の友田金三さんが

ポン・デ・アスーカルに案内して下さいました。福原社長は万一の事故を用心してこのケーブルカーに乗られなかったそうです。

七二日かかってベレン港に着きました。間もなく、農業部長の新井高二さんに引率されてアカラ郡役所のあるビラ・アカラに乗り込みました。

郡長のエバミノンダスさんが、歓迎パーティでご馳走して下さったアサイ椰子の果汁が忘れられません。それから奥地の地形・地味・林相などの踏査が始められ、東西南北に調査を重ねた結果、トメアスー河の合流点を事業の起点に決定されました。

その後、第一回の入植者が到着されるまでの一年間に、万般の受入準備が急ピッチで進められました。

会社は「風土病で入植者に犠牲を出してはならない」と配慮されて、熱帯病の権威松岡冬樹先生（国立東京大学伝染病研究所出身）を衛生部長に迎え、入植者の健康管理に力を注がれました。そのお陰で私の今日在ることを感謝しています。

私は、アカラ時代に病気に罹りましたからトメアスーの第一線に加えられず、カスタニャール農場に転勤となりました。内藤さんが寒地作物のトマトやキャベツを初めて収穫され、感銘を受けました。

やがて西原清東翁が招聘されて、サンパウロから片岡治養さん、星井友一さん、星井菊次郎さん、高橋勝叡さんなど四家族の方々と共に来住され米作を始められました。

草分けから今日五〇年祭に至る皆さんの御苦労を拝察して、まことに頭の下がる思いです。

アマゾン移住五〇年祭に思う

日本アマゾニア協会　理事長臼井牧之助

アマゾンは古来、世界最大の森林地帯として、また地球上唯一の天然ゴムの野生地として有名であり、前世紀の後半まではそのゴムの恩恵に浴し、非常に繁栄したところ。それがひとたび一英人の手でゴムの苗が持ち出され、南洋に移植されるや、忽ちゴムのお株が名実共に南洋に奪われ急ピッチで衰微の一途を辿ったことは周知の通りである、

そこでゴムよ今一度という夢から、ドイツ、ノタリア、アメリカ等の人々に依るアマゾン開拓が、流域の各所に興ったのであったが、これらは悉く失敗に帰し、ここにアマゾン不毛説、アマゾン地獄説が流布せらるるに至った。丁度その頃―昭和四年（一九二九年）、日本人の手によるアマゾン開発が着手せられたのである。

この日本人のアマゾン開発には、色々の紆余曲折があり、筆舌に尽くせぬ苦労があったが、遂にジュートとコショウという二大産物の外、諸々の果樹、野菜類の栽培にも成功し、アマゾンをして人類安住の地たらしめたことは世界の驚異であった。

この日本人移住者の成功したジュートにしてもコショウにしても、なお未解決の問題を抱えてはいるが、兎も角ジュートは伯国内需要を完全に充たし、コショウは今や一六〇〇万本、年産四五、〇〇〇トンに達し世界第一位ということは驚嘆すべきことである。

アカラ植民地（現トメアスー）開設の初期、主作物カカオ栽培の失敗、マラリアの流行から脱耕者が続出し、入植総数三〇〇余家族が三〇家族にまで激減し、歩どまり一〇パーセントという惨状を憶う時、今更に今昔の感に耐えない。

このようにしてわれらの同胞が、不毛にして地獄といわれブラジル人自身さえ敬遠してきたこのアマゾン地帯が、ひとたび日本人の手により安住地とせられるや、アマゾンの新規の開発―地下資源開発が世界の関心を呼び、今や諸種の開発、企業計画が着々と進められ、わが日本企業も卒先これに参加していることは誠にご同慶の至りである。これひとえにわがアマゾン移住者各位の過去五〇年に亘るご健闘の賜物にて、全く感謝感激の至りである。

今日ここに盛大なる五〇年祭を迎えられるに当り、私はこの盛典を見ることなく中道にして雄図空しく倒れられた幾多の英霊に対し、謹しんで哀悼の意を表し、ご冥福を祈ると同時に、今日の在植者各位に対しては、その多年のご労苦に対し深甚の敬意を払うものであり、なお併せて今後一層のご発展とご多幸を祈念するものであります。

因に、現在世界はエネルギー危機に直面しており、このことが今や世界的重大問題となっているが、その原因は、最大のエネルギー資源と称せられる石油の寿命があと二、三〇年で枯渇するといわれているからである。

この石油の代替物として、アマゾンを原産地受するマンジョカとゴムが注目されていることは、大いに刮目せねばならぬことでしょう。マンジョカはアルコール原料として無限のものであり、ゴムは飛行機

や自動車に不可欠のものであるが、現在まではその多くが石油からの人造に依存していた。

ここにおいて、今後のアマゾンは只に企業面のみならず、農業面にも新たな脚光を浴びること必然、即ち、わが農業移住者に期待するところ多大といえましょう。

トメアスー雑感

元ＪＡＭＩＣ第二トメアスー事業所長
八重尾直忠

アマゾン日本人移住五〇年祭と、同記念誌の発行を心からお慶び申し上げます。

去る四月、折から訪日中の山内登氏（五〇年記念祭祭典委員会会長）、大沼春雄氏（同副会長）の両先輩を東京に迎え、一夕懇談の席で久し振りにお元気な姿に接し、懐しくまたこのアマゾン移住の苦闘の歴史そのものの両氏が祭典委員の最高責任者として訪日され、その成果として東京に五〇年祭推進協力委員会が結成されたことは、ご両氏の熱意の賜物とお慶び申し上げます。この時、大沼氏より五〇年記念誌発刊の話があり、かつてトメアスーに在勤した者として、その伸びゆくトメアスーを点描してみたいと思います。

〃トメアスーの沿革〃

アマゾン河流域への日本人移住の歴史は、私が申し上げるまでもなく、一九二八年（昭和三年）鐘紡を背景とした南米拓殖株式会社の開発事業計画に端を発します。翌一九二九年（昭和四年）九月に四三家族（一八九名）がトメアスー港から上陸し、開拓の第一一歩を踏み出しました。それ以来、丁度半世紀の間、南緯二度五分の熱帯原始林の開拓に取り組み筆舌に尽せぬ苦闘を克服され、現在のアマゾンにおける日系人の確固たる基盤を築かれました諸先輩に対し深甚の敬意を表すると共に、この苦難の時期に志し半ばにして不幸にも逝去された多数の先没者のご冥福を、心からお祈りするものであります。

〃悪路との戦い〃

私は一九七三年五月にＪＡＭＩＣ第二トメアスー事業所第五代目の所長として、鈴木前任所長の後を受けてサンパウロから着任しました。一九七五年五月の帰国発令により後任田中所長にバトンタッチするまでの丸二年間をトメアスーで家族と共に生活した訳です。日本人の移住業務に携わる私にとって、この時期が極めて大きな糧になったことを喜んでおります。

着任当初、折からの雨期のこととて第二トメアスーからトメアスー十字路までの幹線道路が完全に途絶しており、ブレウからの迂回道路も凸凹がはげしく、加えて泥濘、水溜りで車のマフラーに水が入り、ボコボコと噴き出す始末でした。うっかりするとエンストを起こすな

ど、僅か片道三五キロメートル程度の道を、毎日一時間から一時間半も要していました。組合、文協、郡役所、登記所及びトメアスー空港までの郵便袋の受・発送のための吐息の出るような悪路との戦いも昔のことになりました。

〃パラー州移動政府と第三トメアスー構想〃

この年（一九七三年）の六月二六日から二八日にかけて、パラー州政府は、フエルナンド・ギリョン州知事の積極的な地方行政施政の一環として、移動政府をトメアスーに設置しました。州知事以下各長官が来村し、トメアスー郡内の各種団体の要望の聴取と対話を行ない、その答申を出すなど、トメアスーに対する多大の関心と開発への熱意を披歴したものでした。

これを機会に事業所は、既に残ロッテ数の少なくなった現状に照らし、さきにトメアスー入植三〇周年を機に第二トメアスー移住地建設に乗り出した先輩たちの例に習い、ピメンタ等の農産業を更に伸展させるための土地の確保が先決という方針を打ち出しました。これを第一の要望事項として掲げ、第二トメアスー自治会とも図り、ポ語による要望書を作成し、上森嘱託と自治会代表を帯同して面談を行ないました。

これはギリョン州知事及び、アントニオ・アマラル官房長官、ピニェイロ農務長官等の大きな関心を呼び、本件を早急に具体化したいとの意向が示されました。

ただ、法令四九四（外国人土地取得制限法）の関係もあり、これを直ちに押切トメアスー産組理事長と大沼文協会長に相談したところ、極めて短期間に文協内に第三トメアスー建設委員会が結成されました。各委員の努力によって計画が練られ、交渉が進められ、現在のアイウアスー移住地の端緒となったことが思い出されます。

〃産業道路の開通〃

ギリョン州知事は積極的に産業振興のための道路網整備計画を打ち出されました。一九七二年一一月には、ブラジリア街道ＢＲ―一〇号に接続するトメアスー～パラゴミナス間街道が策二トメアスーまで完成し、引き続き一九七三年一一月にはトメアスー～ベレン間の道路が開通しました。これまで船かテコテコしかなかった陸の孤島的なトメアスーが、一気に陸上交通の要所となりました。

この産業道路の開通式に先立って、当時の宇山全権大使とギリョン州知事が第二トメアスーの第三センターに於いて、がっちりと握手し、開通を喜び合った場面は印象的でありました。

また、トメアスー十字路で繰り拡げられた式典には、宇山大使や州知事始め、各界の要人や地元日系人多数が参列し、道路開路開通記念塔の除幕の後、文化会館で催された祝賀会では、その喜びが爆発した感がありました。

〃第二トメアスー公民館の落成〃

年々増加する入植者と住民の熱望に答える様に、移住地社会基盤確立の一環として、事業団の助成金が認められ、これを受けて第二トメアスー自治会は、直ちに公民館建設委員会を組織しました。住民も我が村のシンボルとすべく村を挙げてこれに賛同し、切角建設するならより大きく立派なものを、ということで地元負担金が大巾に増加し、当初の予定よりもはるかに大規模な(四八〇平方メートル)公民館の建設を進め、一九七四年四月三〇日、遂に落成にこぎつけました。

落成式には、折からトメアスー訪問中の黒木宮崎県知事一行を始め、ベレン総領事館の内野領事、小島ベレン支部長、トメアスー郡長、トメアスー産組代表、大沼文協会長、多数の地元民が参集しました。新装会館のテープが切られ、祝賀会が始まり、建設功労者の表彰の後、祝宴に移り、シュラスコや地元婦人会による舞踊やアトラクションで花を添え、その喜びを分かち合いました。

〃未曽有の水害発生〃

一九七四年の雨期には、例年になく雨量が多く、五月にはその雨量は極に達しました。クシュウ川の再三の増水で、旧クシュウ橋は水没し、欄干を六〇センチメートルも越す有様であり、新橋も橋桁が洗われる始末に肝を冷しました。これが為に地下水が上昇し、遂には零メートルまで達し、平担地のピメンタ園は根元が水浸しの状態が何日か続きました。

また、トメアスー港付近は、桟橋も住宅も水没し、船は街路を上るなど、トメアスー入植四五年来最大の水害と称されました。

ピメンタは根が腐蝕し、衰弱しているところに来た反動的なセッカで、根腐病の蔓延を来たし、枯死するなど甚大な被害を蒙りました。これまで順調に伸びてきた第二トメアスーの営農も極端な落ち込みを示し、営農計画の練り直しを余儀なくされました。

ピメンタ単作農業の危険性は、つとに叫けばれていましたが、好況に支えられて来たため、第二、第三の作物導入がおろそかになっていたが、この水害を契機に大々的なカカオの導入、マラクジャやメロン栽培、牧畜の導入等が図られ、複合経営の端緒となったことは、禍い転じて福となした例でありましょう。

〃入植四五周年祭〃

一九七四年はまた、トメアスー入植四五周年にあたり、トメアスー文化協会では祭典委員会を結成し、年間を通じて各種の記念行事が催されました。四月のミス・トメアスー選出パーティーや、七月の演芸会の他二月の本式典、農産展には州知事も参列するなど水害による主要生産物の大減産にもかかわらず、予定通りの記念行事を遂行したトメアスーの皆さんのバイタリティーに感服したものでした。

その中で明るい話題を提供してくれたのはミス・トメアスーの柳橋嬢がサンパウロに於けるミス・コロニア全伯大会に出場し、準ミス（プリメイラ・プリンセーザ）となったことは、本人はもとより地元

にとっても大きな喜びでありました。そのほか、トメアスー地区の電化もこの年に完成しました。

〃アマゾニア熱帯農業総合試験場の設置〃

一九七四年六月一日を以て従来の第二トメアスー試験場が、アマゾニア熱帯農業総合試験場と改称されました。

これは本格的な熱帯農業試験研究の拠点として、またアマゾン地域農業の発展に寄与すべく日本政府の唯一最大の規模の熱帯農試として三カ年計画で認められたものでした。

本館、研究室、研修施設等の建設整備が始められ、原始林の中に忽然と白亜の殿堂が完成しました。現在もアマゾン地域、ひいてはブラジル農業発展のために寄与すべく国際協力の一翼を担っています。

〃国際協力事業団の発足〃

戦後日本人の海外移住を扱う機関は、凡そ十年毎に改編され、一九七四年八月一日を以て、日本ではこれまでの海外移住事業団が発展、国際協力事業団として発足しました。従来の移住業務はすべてこの新事業団が継承したため、第二トメアスー事業所も従来どおり業務を進めました。

第二トメアスー事業所事務所は、一九六二年入植開始と共に建設された来客宿泊兼用の木造二階建てでしたが、老朽甚だしく、新しい事

業所建設に着手、一一月に完成し、現在の事務所となっています。

〃むすび〃

私の第二トメアスー事業所勤務は僅か二年間でしたが、思い出は多く、トメアスー全体にとっても極めて多端な変遷期であり発展期であったような気がします。

この間、第二トメアスー移住地の皆さんはもとより、トメアスー産組、トメアスー文協の皆様には公私にわたり絶大なご協力とご鞭撻を賜ったことに感謝申し上げます。

五〇年を迎えられたトメアスーの今後の発展と、皆々様のご健勝を心より祈念し拙文を閉じます。

トメアスー第二移住地について

―第二トメアスー建設委員長大沼春雄氏あての書簡―

生島重一

第二トメアスー移住地造成事業が開始された頃、大沼春雄氏あてに送った書簡であります。

去る一一月一〇日付サンパウロ新聞によりますと、トメアスー第二

移住地がいよいよ建設されるとのことです。それは最初にアカラ植民地を創設した私らにとって実に嬉しいことで、その発展振りに涙を流して喜んでおります。

前から大沼春雄氏、佐藤忠雄氏に第二移住地は現在の植民地から少し離した他郡内に建設する様に話しておりましたが、既にトメアスー郡内に土地を取得して着々準備を進めているとのことであります。もっとも植民地を建設するのは生やさしいことではなく、莫大な経費がいるということですから、現植民地の近くに建設するのは、なにかと便利で経費も少なくて済みますし、又、新しく誕生したトメアスー郡当局者や地方有力者たちなどは政治的地盤のため、又、日本人を多く入植させ郡の収入を増加するために、土地を提供して第二移住地建設に大いに努力しています、よってトメアスーの方々は、計画が容易にできるので簡単に考え、それに便乗したように思われます。

現在トメアスー移住地には、日本人が約三三五家族（約一七六九人）、土地所有面積約一〇、四〇〇町歩あり、それに第二移住地に六〇〇戸（約三六〇〇人）、土地三〇、六〇〇町歩を増加すると、トメアスー郡の一角に、日本人が約四〇、〇〇〇町歩（四〇一平方粁）の土地を所有し、約一〇〇〇家族（約五四〇〇人。在住ブラジル人約一〇〇〇人を除く）が集団することになります。これを一平方粁の人口密度にすると、一二・三人となり、アマゾン全域の人口密度〇・五人の稀薄さに比べると、実に約二六倍の人口稠密度となり、たちまちキストよばわりとなり注意をひくでしょう。

ブラジル連邦新憲法第一五六条第二項によると連邦上院の承認なく

ては一〇、〇〇〇町歩を超ゆる面積の官有地の譲歩、又は特許は、如何なるものもこれをなすことを得ないとあります。又、ブラジル移民法第五〇条には植民地中最低三〇％のロッテはブラジル国人植民者に譲歩、又は売却するべきとされ、残余は他の国籍の移住者に最高二五％までを公正に分配するべき、とあり、明らかに外国人のキストを禁じています。

このキスト問題をたてに、他の有力者や政治家は黙っていないでしょう。もう直ぐに政変が来るのです。現に戦後一九五五年四月、日本人契約雇用移住者の導入は、国内労働者を圧迫するものであるとてこれを禁じられました。

トメアスー植民地で胡椒収穫期には一〇〇〇人以上のブラジル人労働者を使っていました。彼等はトカンチンス河沿岸、特にカメタ地方からの出稼ぎにきており、日本人植民者がどんどんこられると困るから、という理由で、同地方の豪族で有力者のメンドンサ家（ＤＥＯＤＯＲＯ　ＭＥＮＤＯＮＣＡ、社会進歩党ＰＳＰの連邦議員）やセアラや東北伯地方から来て成功した有力者達によって禁じられたのでした。

トメアスー植民地ではあわてて新ロッテを区画して、コロノが終わればそこへ入植させるから、との条件付で転耕を免れましたが、フォードランジャやベルデーラに入植した一二二家族七八五人は他へ転耕させられました。

戦前にも、日本人がサンパウロのみに入植し、そこの農業界だけに利益をあげていたため、他州の為政者達の妬みによって外国人移住者

入植二歩制限法が成立したようなものであり、トメアスー郡内のみに日本人が多く入植すれば、将来他の州や、又はパラー州内でも他の郡内の為政者からどんな抗議があるかもしれず、第二移住地に難問題が起き、ひいてはアマゾン地域の日本人移住にも悪影響を及ぼさないとも限りません。よってトメアスー第二移住地は、同郡内に隣接するツクルイ郡内に建設すればどうかと思われます。

同地はトカンチンス河沿岸にあり、そこまでは大きな汽船が航行し、トカンチンス鉄道の出発点でもあり、トメアスーから道路は開設できます。

土地は古生層のテーラ・ロッシャ、又はマサペの肥沃地で、トメアスー第三紀層の土地と比較にならないほど良い所であります。又、トカンチンス地方の大いなる開発となり、同地方の為政者達にも非常に喜ばれると思われますから、御参考までに申し上げます。

五〇周年記念式典に看護団の方々をお迎えして

池上あけみ

入植五〇周年記念式典に、四ヶ所ヨシ様一行一三名の看護関係の方々をトメアスーにお迎えしました。

一行の中に現職の日本看護協会会長の大森文子様、大学病院にお勤めの方、助産婦さん、看護婦を退職なさって芙蓉マンションにお住まいという元気なおばあちゃんもいらっしゃいました。長旅にもかかわ

らず、皆様お元気でした。トメアスー滞在中は二軒の家に民宿されましたが、私は西尾さん宅に泊った方々と日本の看護の現状や、それぞれの方々の経歴をうかがったり、私が感じたトメアスーの衛生状態等々を夜が更けるのも忘れて話合いました。

一九二九年に第一回の移住者がトメアスーに入植して以来、原始林伐採農作業の重労動から体力の消耗と栄養の片寄りなどから悪性のマラリアに猛威をふるわれ、犠牲者が続出し、入植者の八割がこの地を去っていきましたが、残された家族とがんばって今日のトメアスーを築き上げた先輩の方々には感謝の念でいっぱいです。

マラリアの特効薬もなく、対症療法のみで薬剤師、看護婦、看護見習生の皆さん方は献身的診療に携ったと言われています。

マラリアの他にも、ヘビに噛まれたとか、伐採時のケガ、お産などで、昼夜の区別なくジープを走らせたとも聞いています。

四ヶ所さんも、そんな状況の中で二代目看護婦長として病院勤務され、よくがんばって下さったと思います。帰国後は第二世界大戦の従軍看護婦として戦場をかけ回られた由、直接詳しい事情を拝聴する機会がなかったのが、かえすがえすも残念でした。

マラリアの撲滅は、北米で戦時にマラリアによって兵力を失なったことから研究が進められ、ベレンの米国人からもマラリア対策の研究を日本人対象に進めたいという申し入れを受けた結果、カモキンの有効性が証明されました。ゴムをブラジルから輸入していたので、アマゾン地域のマラリア撲滅運動を徹底的に行ない、衛生状況は好転したと聞きます。

現在は、トメアスー、ベレン間の陸路の開通で日本人の手で立派な病院が建ち、施設も完備し、専任医師を招き病気に対処できるようになりました。

人々と共に涙した四ケ所さんの看護婦としての若き日の使命感が、この五〇周年の祝典にかけつけて下さったお心ではないかと、私は式典会場にて感慨ひとしおでした。

私は移住して来て五年しかたっていません。日本赤十字看護学校、助産婦学校を卒業し、実務五年で第二トメアスー移住地に入植した時は、畑の仕事と三人の子供の育児に明け暮れる毎日で、白衣が遠くなりつつありました。しかし現在は、現地人の衛生知識の乏しさから、日系コロニアの発展と共にアマゾン地域の人々の生活レベル向上を願って日伯援護協会病院に勤めています。

寄生虫症、時々発生するマラリア、黄疸、成人病、事故等がありますが広域にわたっての巡回診療を実施しています。高齢化社会になりつつある中で、苦労を重ねていらした日系一世の方々の老後の慰安ということがこれからの課題で、ひとつでも多く施設が出来ることを願っています。

四ケ所さんは、その点いち早く着眼し、芙蓉会という老人ホームをおつくりになっていらっしゃることに、これからの私たちは学ぶところが多いと思います。　五〇年の祝典は次の祭典へと、アマゾン河のごとく流れてゆきます。

先輩たちの意志をついで、これからも社会のために尽してゆきます。

入植当時の思い出

押切愛子

一九三二年（昭和七年）七月に、私は両親と五人の姉と共に、一二歳で南拓第八回移民として当時のアカラ植民地に入植しました。

多勢の人達に迎えられて、目的地トメアスー波止場に着いたのは早朝でした。アントニーナ号の中で一夜を明かしましたが、とても寒くて困ったのを覚えています。

南拓会社の社長の福原さん自らのお出迎えで、トメアスーの宿泊所に家族みんな集まり社長さんのお話を聞きました。その時は、もうすでに脱落者が続出していて、社長さんの心は痛んでいたようでした。社長さんは私達第八回移民に対して、この土地に落着く気持ちのない人は、今から直ちに引き返して下さい、と言って頭を下げられました。

トメアスーの波止場から荷物車で、いずこに連れていかれるかわからないまま、私達は森林の中の広い道路を走っていきました。ここが、日本に居た時父が話していたバナナの沢山食べられるところなのかと思いました。

独立農として一耕地を得て落着いたのが、アライアの今住んでいるところです。両親はここまで来たのだからどうしても頑張らなくては、と固い決心をしていました。聞くと見るとでは全て違い、未開のこの土地での生活は随分と不自由でした。

両親は、開拓者として希望を持ち、会社が分けてくれる苗木類を何でも植えて育てて来ました。当時、会社は植民者にカカオだけを植えさせ、ボア・ビスタ、イピチンガ、マリキッタの直営農場はカカオばかりでした。

熱帯農業に経験のない人ばかりだったので失敗に終わりました。一九三三年に臼井牧之助さんがシンガポールから持参したピメンタの苗三本だけが、芽を出して伸びていました。

カカオに失敗した会社は引き上げ、アサヒザール農場で働いていた尾花さんも、サンパウロに行かれる事になり、その時譲ってくれたのが、ピメンタの南洋の優良種でした。父は大変喜んで、その苗を大事に植えて世話するようにと私に言いました。

私は毎日世話をしました。父は農業に熱心で野菜組合にも働き、永年性の作物はないかとみんなと話し合い、種を集めて来ては植えていました。

カスタニャール、カカオ、ゴム、ウルクー、グァラナ等を植えていましたが、輸出のできるものはないかと日夜考えていました。父が種々集めてくるものを、母が一生懸命育てていました。この母がいなかったら、父の植えた南洋種は成功しなかったのではないかと思います。

トメアスーを心から愛してやまなかった父も、黒ダイヤの成功を見てから、一九五九年に亡くなりました。庭にある母樹は、今なお子から孫へと生き続けています。まるで父の魂が、私達を守っているようです。

母は八八歳の高齢にもかかわらず、今も健在です。渡伯して五〇年、あらゆる困難に打ち勝って築いてきたものは、ピメンタなくして語ることは出来ません。今またピメンタの高値が続いており、夢よもう一度と祈らないではいられません。

五〇年史の中での戦後第一回移民の歩み

松永年四雄

私達戦後第一回移民二八家族がトメアスーの歴史の中に加わったのは、丁度二四年前の一九五三年（昭和二八年）八月であります。

先輩達の言語に絶する苦闘の末、胡椒の高騰によりトメアスーの歴史に栄光が訪れようとしている時でありました。

当時のトメアスーの風景はまことに殺風景なもので、戦後のあの焼野原を経験した者にとっても、強いショックでありました。

あの当時、十字路の組合の大きな建物はなく、今福原さんの胸像が建っている所に、事務所兼出荷場があり、その隣に部品売場、裏に購買部の一棟があったのみでありました。

十字路に立って東を望めば、家は一つも見えず、再生林が道路に迫っておりました。西方には山田さんの家はあるも望見できず、南方へは押切さん宅までに貧しい労働者の家が一軒あるだけでありました。マリキッタの方角は野原、江畑両家が木の間に見える位でありました。日曜日などは、男でも一人歩きは無気味さを感じたものであり

ました。当時、誰が今日の繁栄を予想できたでしょうか。

トメアスーの環境には落胆したものの、胡椒の将来性は非常に魅力的で、私たちの定着には力となりました。一九五三年より六〇年頃まで確実に基礎作りが出来、六五年のあたりは胡椒値の好調に支えられ、私たちの生活は潤ったのでありました。トメアスーにも、いわゆる岩戸景気が訪れるのではないかと胸を膨らませたものでした。

六五年を過ぎる頃よりのマリキッタ病の発生で、一抹の不安を抱きながら、七〇年を迎えました。七〇年から七五年にかけて、病勢は一挙に強まり、またたく間に二〇数年かかって築いた経済を根底から粉砕しました。

単一作物のみに依存した結果の悲惨さを、つくづく味わされました。胡椒の無病菌地帯を求めて、トメアスーを去ったのもこの時期でありました。

この内在的な問題に加え、第一次、二次石油ショックの余波で胡椒値は凋落し、最悪の条件の下で、五〇周年を迎えたのであります。

私達トメアスーに入植した二八家族の中で、五〇周年を迎えたのは、家長が二人、遺された家族が四家族、分家五家族だけであり、苦労を物語っています。

五〇年史を踏まえて私達は、私達に課せられた勤勉という言葉が真実か否かを、今後の歴史の中で証明しなければならないと思います。

トメアスー開拓五〇周年祭典を終えて

上森六園

トメアスーの五〇周年祭典が一一月に行なわれると発表されてから、サンパウロより多数の人々が祭典に参加されることがわかりました。これらの人達は、かつて当地に住んでいた方々や私の関係する高拓生の一部です来訪者の受入れには、在住の皆さんに依頼して、民宿していただくことで何度も会議を開き検討してきました。

私は高拓関係の人々には、小生宅に一泊してもらおうと軽く考えて引受けました。ところがバラックでは余りにみすぼらしいので、一部改修する必要がありました。また水洗便所の新設をなし、宿泊に必要なもので寝具等の不足分は、知人から借りればこと足りると準備にとりかかりました。

あいにくこの年は乾燥がひどく、一一月ともなれば井戸水は底に五〇センチ位しかなくなり、これも日増しに減っていくので心細くなりました。

この水をなんとかしてタンキに引揚げなければならず、備え付けのポンプでは円滑にいかず閉口しました。いつもポンプをみてくれるブラジル人に来てもらって、どうにか当日使用する水をタンキいっぱいにすることができてホッとしました。

来村した高拓関係者は全部で二〇名。私宅に一一名、七名は親戚の高橋春さん宅にお願いしました。到着した晩は私の庭先で裸電球を取りつけて、かねて据えつけてあった丸机に、これも急造した机を並べ

て、家内の手料理で七面鳥、豚の丸焼き、パットのトゥクピーで遠来の客をねぎらいました。一行へは白黒少量のピメンタ・ド・レイノをお土産に差しあげました。その緑で今も文通していますが、先回サンパウロへ行った折、これらの人々が集まって小生を招いて下さり、来村当時の御礼を言われたのには赤面しました。

今でも、あの時井戸水が少なくて苦労した事を思い出し、もし揚水できなかったらどんな不都合が起きただろうと、無事祭典が終わったことに安堵の胸をなでおろしています。

皇太子御夫妻に拝謁して

平賀練吉

このたび、トメアスー代表として皇太子殿下・妃殿下にトメアスー事情をお話し申しあげる光栄に浴しましたのは、ひとえにトメアスー在住の皆様のお働きのおかげと心から感謝いたしております。

事前に臼井牧之助氏よりこのたびの御訪伯におかれては、是非トメアスーに行かれるよう働きかけているとの通信を受けとりました。また新聞で、コスタ・エ・シルバ大統領が訪日の際、レセプションで平田進氏を通じ、アマゾンのトメアスーに行きたいというご希望をうけた大統領は、陸軍特別機でご案内しますと答えた意味の記事を読みました。このように、殿下のアマゾンへのご関心のほどは存じておりました。沢田美喜女史がトメアスーに寄られたとき、女史と作家の角田

房子氏がアマゾンの話を一時間二〇分にわたって殿下にお話しされたと聞きました。辻小太郎氏からも、上塚司氏や千葉三郎氏が殿下にトメアスーのことを話されたと聞いておりました。辻氏の示した角田氏の手紙には、できあがったところに移住する南伯とちがって、原始林に立ち向かう北伯の移住の形を殿下にご覧いただくよう、もしトメアスー行きが不可能ならせめてベレン空港に立ち寄られ北伯の人々にお会いになれば、どんなにか励ましになるでしょうと申しあげたとありました。

伝え聞くところでは、殿下は日航に電話されベレンに寄って下さいとお頼みになったが、暑さとマラリアなどの恐れ、また日程の都合と飛行場の警備の問題から取り止めになったとか。これだけご熱心なので、大使館では特にアマゾン事情とトメアスー事情を両殿下にお話し申しあげるよう誰かよこすようベレン総領事館に通達があり、トメアスー産業組合代表が出席するように高良総領事から連絡がありました。私は理事長を推薦しましたが、理事会の推薦で私が代表で参ることになりアマゾン全体では辻氏と私の二人が行くことになりました。

押切理事長はサンパウロで開催の物産陳列場のアマゾンコーナーに立ち会い、御質問があれば御説明申しあげることになりました。

こうして五月二三日午後五時、ブラジリアに於いてて皇太子ご夫妻に拝謁することに決まりました。

トメアスーよりトメアスー文化協会の名で天皇陛下にムイラピニーマのステッキ、皇太子殿下にはパウ・サントのステッキと木刀、妃殿下にはパウ・サントの短冊掛を浅黄の布で包みマルパの白木の箱に納

めて献上することになり、大沼会長のお骨折で立派なものが出来あがり、それをブラジリアの大使館に陳列後お持ち帰りいただくことになりました。

トメアスー産業組合からは、植民地及び胡椒栽培風景など五〇枚で写真帖を謹製、ジャカランダの箱に入れて献上することになり、阿部専務理事のお骨折でこれまた立派なものができました。これも大使館に陳列するはずでしたが、その折押切理事長も加わるようにとのことで、写真帖を持参のうえ押切氏がご説明申しあげることになりました。

五月二一日、辻氏とともにブラジリアに飛びました。二二日両殿下ご到着の日、大使館に汎アマゾニア日伯協会の献上品及び移民史料、白黒胡椒の見本を陳列、一行の方々が持ち帰れるようにしました。

押切氏もサンパウロより到着。大使からは、儀式ばらずにお話しするようにご注意をいただき、また殿下よりピメンタの単作で大丈夫かとのご質問があった場合、よくご説明申しあげるようにとご指示をいただきました　両殿下の御宿所はホテル・ナショナルで九階の半分を占め、それも見せてもらいました。飾りの花代が五千コントかかったとか聞きました。

〃拝　謁〃

五月二三日午前一〇時、ブラジリア近郊日本人会合同歓迎会にアマゾン組も出席。午後三時上院・下院合同の議会歓迎に、パラー州選出

下院議員のブリエル・ヘルメス氏の誘いで三名出席。演説が長く、四時半中途してホテルで待機。殿下の五時ご到着が四五分遅れたので、大使は二〇分位といわれたが、待徒長は殿下は非常にアマゾンにご熱心だから一時間はかかるでしょうとのこと。昨日ご到着の日、夜はレセプションからお帰りが一二時過ぎでありましたがホテルより八〇キロのところにトカンチンス河の源流地点があるときかれると、翌朝五時半起床、お忍びで車を出され河魚を採集なさってお持ち帰りになられたと聞きました。

午後五時五〇分、大使館の応接間に導かれ、高良総領事に従い押切氏、辻氏らと部屋に入ると、すでに両殿下は正面の長椅子に着席されておりました。前には低い二メートルほどの真四角のテーブル、左側に同じような長椅子、右側にテーブルより少し離れて椅子が三つありました。

私たちが一列に並んでお辞儀いたしますと、大便から紹介があり、着席して下さいとのことで左側長椅子に坐りました。

私は高齢者のためか一番前にされたので、殿下のすぐお側に坐ることになりいささか硬くなりました。待従長、東宮太夫、大使が右側の椅子に着き、この他は誰も入れませんでした。

まず高良総領事のベレン総領事館管轄のご説明が約一〇分。次に大使がアマゾン一般事情を辻氏に話すよう促すと、辻氏はブラジルの地図をテーブルに拡げ、ジュート及びマウバの見本を前に話しました。殿下はマウバとジュートは同じに使えるか、またジュートが日本人の手から現地人に移ったあと高拓生はどうなったかなどのご質問をされ

ました。

第一四号国道開発構想に話が入り約二五分、続いて大使に促され、私がトメアスー事情を説明いたしました。

〝緑の魔境〟

トメアスー在住者二六五〇名の日系人を代表し、遠路はるばる日伯親善のため陛下のご名代としてご来伯くださったことを心から御迎え申しあげます。ことに殿下がアマゾンのトメアスーをご覧になりたいとご希望くださったことに一同感激しております。欧米人が緑の魔境、猛獣毒蛇が棲み、悪疫があってとても人の住めるところではないとした緑一色の大密林の真っ唯中に、孤島の様にいくらか文化的な生活ができる植民地を日本人がつくりあげたものを、一目でも両殿下にご覧いただけたら、私どもの光栄これに過ぎがものはございませんのに、一同非常に残念に思っております、と申し上げました。

トメアスーの沿革や胡椒栽培のはじまりについては、すでに日本にてお聞き及びのことと伝え聞いているので、現状をご説明するにとどめ、パラー州の広さ、人口、トメアスー郡の独立、広さ、人口、日系人数、家族数などを申しあげました。

日系人と伯人の比率はとのご質問に、五分の一になりますとお答えしました。続いてトメアスー郡と日系郡長誕生のいきさつ、日系帰化人数、二世人口の他、一世のうち六八歳以上が八五名在住し、なかでも今年八五歳になる槍分氏、また戦後八〇歳で渡伯し現在九〇歳を越

している細川氏などの例をひき、アマゾンはこのように長生きも可能なところですと申し上げました。妃殿下は驚きのご様子で、八〇歳で移住されたのですかと訊かれたので、息子さんたちが皆トメアスーに移住するので一緒に来たのですとお答えしました。

次に、トメアスーの発展は和と協同、日本農業者の勤勉と努力にあると申し上げました。つまりここが農業者の集団であること、協同組合が中心でトメアスー村建設に団結したこと、その後入植者が増えてきて農業以外の職業の人が出てきて、これらを含めすべての人が志を同じくしてトメアスー文化協会を生んだこと、しかしながら根幹はやはりトメアスー産業組合で、たとえば一九六六年度の胡椒の取扱高は三九七二トン、金額にして九億八千六三五万円にのぼり、トメアスーが胡椒村と呼ばれる所以であることを申し上げました。

〃胡椒を手にとる〃

ここで代表が白と黒の胡椒見本をテーブルに出しますと、殿下は袋の口をお開きになり掌にあけてご覧になって、綺麗ですねと仰言いました。そのあと、商品作物として胡椒が選ばれた理由と胡椒の将来性についてご説明いたしました。組合は胡椒を国際商品として品質の向上につとめると同時に、低価に対しては生産費の低減で対抗する、他方、安全かつ堅実を多角農への道を確立する必要があるとしてこの方面の研究も進めていることを申し上げました。どんな方々がなさっていますかとのご下問に、宇都宮大学卒業の鶴崎君と東京農大出身の移

住者数人が頑張っており、それに北伯農事試験場や国際協力事業団の熱帯農業試験場の協力も得ていると申し述べました。

トメアスーが農村から新興都市に発展するためには二世、三世がすべて農業に向くとは限らないため、土地に定着させるべく、商工業を興す必要があること、商業面では小規模ながら自然にできていくであろうこと、工業面ではカネボウ・ド・ブラジル杜のピメンタ搾油工場と高砂香料（株）の香油製造会社ができることを申し上げました。

独立自尊のひとつの自治社会を創設するためには、日本人が一千家族は必要と思われます。そこで総領事館、国際協力事業団の賛成を得て第二移住地の建設をすすめたことと、その完成によって一千家族となれば、日本からの新移住者の橋頭堡となってアマゾン発展のお役に立てることを申しあげました。

〃お別れ〃

口で申しあげるよりは実際に目でご覧いただいたならばよく分っていただけると、持参した写真帖をみながらの説明は押切理事長に譲りました。ここでお茶が運ばれてきました。

押切理事長が写真帖を御前に拡げますと、殿下は傍らの妃殿下に「こちらへ」とお誘いになり、仲良く寄り添われてご覧になり、押切理事長は立派にご説明申しあげました。

妃殿下が、胡椒はコーヒーと同じように実をもぎ取るのですかとご下問になったので、そうですとお答えしました。さらに、人種偏見の

少ないブラジルに、エリザベス・サンダース・ホームの混血児が楽園づくりに励んでおり、沢田美喜女史が始めたステパノ農場に一所懸命協力しておりますと申し上げました。

写真帖でご説明申し上げていると、侍従が時間がございませんと言ってきましたので、両殿下のご自由なご質問をお受けしようと思っていましたが果せませんでした。

正面に全員整列して、お別れのお辞儀をいたしました。

殿下より、「お帰りになったら皆さんによろしくお伝え下さい。ブラジルの国に喜ばれる仕事に励んで下さい」とありがたいお言葉を頂戴しました。

私は「お元気で楽しいご旅行をお続け下さいますように」と申し上げますと、殿下は「ありがとう」と仰せられました。（退出七時一〇分）。

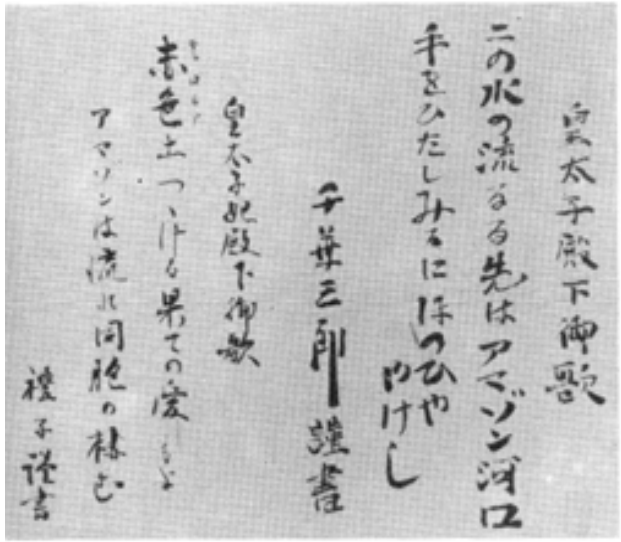
一九六七年五月二三日記

皇太子殿下御歌

この水の流るる先はアマゾン河口
手をひたしみるにほのやひややけし

皇太子妃殿下御歌

赤色土（テラロシャ）つゝける果ての愛しもよ
アマゾンは流れ同胞の棲む


皇太子殿下御歌
この水の流るる先はアマゾン河口
手をひたしみるにほのひややけし
千葉三郎謹書
皇太子妃殿下御歌
赤色土つゝける果ての愛しもよ
アマゾンは流れ同胞の棲む
禮子謹書

トメアスー野球五〇年の歩み

トメアスー野球連盟会長　戸田子郎

アリアンサチーム（ノロエステ線アリアンサ移住地）の草創時代（一九二六年）名投手として鳴らした鎌田讃氏が、アカラ植民地の野球の創設者である。

一九三〇年八月、上塚司氏の組織するアマゾナス州調査団第二隊員の一人として北上し、アマゾニア産業研究所の本拠地パリンチンスに在ること半年、パラー州モンテ・アレグレ植民地に移り、二年後アカラ植民地に転じて運輸部植民地耕地係に勤務した。

当時アカラ植民地には悪性マラリアが猛威をふるい、退耕者が続出する動揺時代であった。そこで野球によって青年たちに積極性のある気塊を与え、無味乾燥な植民地に慰安を与えるべく戸田子郎、川越邦夫、佐藤忠準、沢田毅、沢田哲、関勝四郎、阿部昇などの中堅青年層の支持を得、吉田耕三支配人より野球道具の寄付を仰ぎ、半分は青年の負担としたのである。

一九三五年南拓から十字路の角の一耕地二五ヘクタール（現在の文協、伯銀、二世会館の建っているところ）を譲りうけ、南拓運輸部の貨物自動車を使用し、滑車を利用した網で球場の株おこしをやり、エンシャーダで地ならしをして青年会一同毎日曜日グランドづくりに労働奉仕をしたのだった。

当時、皇后陛下よりの御下賜金五万円で青年会館を建設、それは後にトメアスー産組へ貸し、事務、購買、出荷などに利用された。（現在の伯銀前）

バットは良質材を山から伐っての手製、ボールも縫い直しては何度も使用した。

アリアンサ移住地において、弓場勇一党に伍し、野球創設時代の遠征費用具購入費などは原始林伐採、木挽き、米作などで稼ぎ出した体験を有する鎌田氏は、アカラ野球部に対してもスパルタ訓練をもって臨み、ヘマをやると容赦なくガツンとやられたもので、氏に殴られぬ選手は一人もいなかった、とは当時の選手たちの述懐である。

選手とともに炎天下に汗を流した鎌田氏の愛情は、野球を通じて青年層や植民者の胸に流れ、開拓への逞しい意欲を与える原動力となった。

鎌田自身もマラリアに罹り、さらに長女、次女を失うという悲境に陥った。一九三八年南下して、再びアリアンサの弓場農場に入った。一九五二年からアンドラジーナ近郊に移り、北伯時代の旧友篠田六郎氏ほか同志、家族を合わせて二〇名で養鶏に従事しつつアンドラジーナ野球部の監督をしていた。

鎌田氏がトメアスー開拓二五周年祭典に際し、植民地の旧知に贈った辞がある。

「思い出深きアマゾンの同志たちよ。開拓者として撓まざる奮闘を続け今二五周年を迎えた君たちの姿を見る時、途中半ばにして逃避した小生は、満腔の敬意と拍手を送る。小生が常に口にした如く、戦い

は最後の五分間にある。換言すれば、自分がヘトヘトになりモウ駄目だと思う時は、相手方も疲労困憊の極に在るのだから、この時最後の勇気を奮い起こすか否かが勝敗の分岐点となるのである。この真理を実社会の面にも生かされ、アマゾン流域に理想郷をつくっていただきたい。」

この当時アマゾン大江流域で野球が行なわれていたのはトメアスー植民地だけで、新しい日本人集団地がアチコチに出来つつあったが野球どころではなかったらしい。

一九五三年度植民地内野球リーグ戦は、トメアスー、アライア、ボア・ビスタ、第二コロニア（現カニンデー）の四チームで行なわれ、トメアスーチームが優勝。一九五四年度は、戦後の新移民入植によって選手の新陳代謝が行なわれ、ブレウ、セントラル、イピチンガ、トメアスー、ボア・ビスタ、ジュベニールの六チームとなり、パウリスタ新聞社寄贈の優勝盃をめぐって熱球譜が展開された。

一九五四年六月二七日より工事を開始して、野球場の一、三塁側に千余名の収容能力を有する六段の大スタンドを、総工費一三〇コントスで建設した。沢田脩トメアスー郡長の好意と、日高寅男道路局長兼土木部長の協力によって完成した。

新移住者導入とともに野球人口も急激に膨張して、各地域にチームが出来、ベレン北伯野球連盟（会長戸田子郎）が結成された。北伯野球大会では、一九五九年に一度コッケイロチームに敗れたのみで、トメアスーチームが連勝している。

一九六〇年（アラサツーバ）一九六一年（パラナ州ロンドリーナ）

一九六二年（カネボウ）と三年連続して全伯青年野球大会に出場した。このあたりから七〇年にかけてが、トメアスー野球の全盛であった。ボア・ビスタ、組合、マリキッタ、アライア、アグア・ブランカ、ホークス、スドエステ、第二コロニアの八チームが優勝を争い名勝負、名場面、名選手を出した。観覧席も応援団で埋めつくし、仕事の苦労を忘れて一日をグランドで過した。

時代とともに後続移住者が少なくなると、二世、三世の時代を迎えて少年野球が盛んになってきた。白球をもてあそび試合に熱中する少年たちに、規則正しいスポーツを通じて有能な地域社会人に育ってもらうため、一九七五年から全伯少年野球大会に出場すべくサンパウロに遠征している。大会は参加することに意義があり、競技においては正々堂々と戦い、スポーツ精神に則って成績にこだわらず大会参加を続けてきている。少年たちが南伯サンパウロを知り、友を得て、これから村のために尽すだろうという期待からである。

毎年の入植記念家族慰安運動会は、球場を使用し各々の野球チームの協力の下で行なわれている。後援する球連役員はもとより、全村民の和が、こうした時に発揮されるのである。

これまで球連運営に協力くださった永野敬士、永野吉春、遠藤政紀、阿部昇、柴田英夫、沢田照雄、日高寅雄、沢田脩、大屋久雄、木下昭夫の諸氏を忘れてはなるまい。野球を通じて青年教育にあたった鎌田譲氏は一九八四年八月四日、トメアスーの地で昇天した。同氏をはじめ、故人になられたトメアスー野球関係者の方々のご冥福を心からお祈りするものである。

前田光世（コンデ・コマ）について

在ベレン日本国総領事館　甲斐信一郎

一九八四年一一月二八日は、前田光世（通称コンデ・コマ）の四三回目の命日にあたる。

コンデ・コマの名は、今の若い人々の間にはあまり知られていないが、現在、当地ベレン市で五〇歳を越える人々であれば、日本人、ブラジル人を問わず耳にし、記憶に今も残る名であり、人物でもある。

前田光世（明治三五年七月一九日付で栄世から光世へと改名）は、明治一一年（一八七八年）一二月一八日、青森県弘前市大字富栄字笹崎一三三番地二号に生まれた。

明治二七年（一八九四年）一七歳の時に上京し、同三〇年（一八九七年）に講道館に入門するとともに、早稲田中学から東京専門学校（現在の早稲田大学）に進む。

身長一メートル六四センチ、体重六四キロの小柄な体躯にもかかわらず、めきめきと柔道の実力を伸ばし、後に四段位を得た。

明治三六年（一九〇三年）前田二五歳の時、米国より柔道指導者派遣の要請を受けた講道館の嘉納治五郎は、富田六段（姿三四郎のモデルとなった富田常雄の父）と前田四段の二人を渡米させた。

二人は米国陸軍士官学校、プリンストン大学、エール大学及びコロンビア大学で柔道の紹介をすると共に、ニューヨークに道場を開いた。しかし、入門者もすぐに途断え、金銭難も手伝って、同地の日本

人仲間の入れ知恵で入場料をとってプロレスラーやボクサー相手に柔道のデモンストレーション試合を始めた。前田は連戦連勝でその名を高めたが、他流試合を禁止する講道館は、後に前田を破門した。

その後ヨーロッパに渡り、各国で他流試合を行ないつつ柔道の宣伝に励んだが、中でも闘士崇拝意識の強いスペインにおいて特に注目と尊敬を集め、スペイン国王より伯爵（コンデ）の称号を受けた。

前田伯爵となった彼は、その名称をあまり好まなかったらしく、折しも日韓併合（一九一〇年）のニュースを聞き、高麗（コマ）の名をとり、コンデ・コマと自称するようになった。

ヨーロッパを後にしたコンデ・コマはニューヨーク経由でキューバ、メキシコ　ペルーを回り、大正四年（一九一五年）ブラジルのベレン市にたどり着いた。実にアマゾンへの第一回日本人移住団がベレンへ入港（一九二九年）する一四年前の時分である。ここに彼は、人種差別のない土地柄が大いに気に入り定住することになる。

当時流行していたルッタ・リブレ（プロレス）に登場したコンデ・コマは、たちまちチャンピオンになった。

一九二一年から二二年にかけて一年間、キューバ、メキシコに遠征をして各地で名を高めるうちに、各国の日本人大使館においても前田の名声に対して何らかの表彰をすべきだという声が高まった。そのため、講道館もその圧力に動かされ、前田破門を撤回し、急拠七段位を与えた。

コンデ・コマは最初、フランス系女性と結婚した（入籍せず）が、先立たれ、その後、イギリス系女性のメイ・イリスと結婚（入籍一九二二年）した。子供に恵まれず、ブラジル人のセレステを養女にした。（セレステは後にアメリカ人と結婚し、香港で飛行機事故に会い死亡している）。

ベレン市では軍・警察関係で柔道（柔術）を指導し、自ら道場も開いて多くのブラジル人に実践教授をした。その神秘的な技能と、明朗・高潔な人柄は当地の多くの人々に感銘を与え、尊敬を集めた。

コンデ・コマは柔道の普及に励むと共に、南米拓殖会社代行支配人及びアマゾニア産業株式会社顧問として移住事業にも力を注いだ。それらの功績に対して一九二五年、パラー州政府は、コンデ・コマに二六〇〇余町歩の土地を無償譲渡している。

彼は当時の日本人としては特別に、政府関係、軍・警察関係その他各界の中・上流階級との交流の機会に恵まれていた。

現在ベレン在住の六〇歳を越える人々で、彼と直接親交のあった人々は、コンデ・コマの名をなつかしみ、彼の紳士的態度とその高貴

な性格を特に強調している。

彼はアマゾンをこよなく愛し、柔道を通じて日本の精神文化の紹介に半生を捧げた。当時の彼の使命感と志気の高さは、一九三一年（昭和六年）に彼が旧友へあてた書簡の中によく表現されている。

彼は高邁な理想を抱き、いつまでも若々しい志気を失わなかったが、老齢の波には勝てず、ついに一九四一年（昭和一六年）一一月二八日未明、ベレン市ビラ・ボローニャ四番地の自宅にて逝去した。享年六三歳。彼の死の翌日（一一月二九日）の当地の二大新聞であるフォーリヤ・ド・ノルテ紙及びオ・エスタード・ド・パラー紙には、コンデ・コマの逝去に関する記事が次のように掲載された。

〔一九四一年二月二九日付、フォーリヤ・ド・ノルテ紙〕

コンデ・コマ

昨日、老スポーツ家コンデ・コマの遺体は、サンタ・イザベル共同墓地内の礼拝堂側墓地に埋葬された。

故人は気高い人徳を持った紳士として我々社交界の中に一生とけこんでいた。

遺体はボローニャ街四番地の自宅から、故人を慕う多数の人々の自家用車及びバスに見守られながら、墓地へと運ばれた。在ベレン佐藤ノブマサ領事を始め、多数の日本人コロニアの列席があった。

コンデ・コマはカトリック教のサクラメントにより慰霊され、埋葬

にはトリンダーデ教会のミゲル・イナシオ代行司祭が帯同した。
尊敬すべき市民の遺体は、赤紫色の布が内張りされた高価な棺に安置された。沢山の花でおおわれた棺には、名入りの様々な花飾りがたれ下っていた。

〔一九四一年一一月二九日付、オ・エスタード・ド・パラー紙〕

死去　コンデ・コマ

昨日未明、ボローニャ街四番地の自宅にて逝去したコンデ・コマは、当州日本人コロニアの中でも最も秀でた人物の一人であり、我々の社交界に関係した充分すぎる紳士でもあった。その死は約二〇年の永い間、常に誠実で正直な働き者としての彼を知る我々を非常に悲しませた。
彼はアメリカ諸国を永い間遍歴した後、一九一五年柔道の教師として当地に着いた。一九二一年から一九二二年には、キューバ及びメキシコで有名な、恐るべき日本格綿技の神聖なチャンピオンになった。
パラー州及びアマゾナス州に於いても、数回にわたり格闘技のデモンストレーションを行なった。
故人は当年六三歳。一八七八年一二月一八日、日本の青森県で生まれ、東京早稲田大学に学んだ。
メイ・イリス・コンデ・コマ夫人との間に一人娘の医学生セレステ・

イリス・コンデ・コマを残した。

コンデ・コマは南米拓殖会社の支配人及びアマゾニア産業株式会社顧問を勤めた。

葬儀には、コンデ・コマ家の友人多数と各国の代表及びパラー州内日本人コロニア代表メンバーが列席した。

現在、パラー州の柔道熱は、ブラジル東北部及び北部の中でも最も高く、全国柔道選手権大会においても、当州からの代表選手が必ず上位に入賞している。

今日、ベレン市内にはコンデ・コマの創設したアカデミア・デ・コンデ・コマ（コンデ・コマ柔道学院）を始め、六校の柔道専門学校があり、児童、少年、青年、壮年から女性に至るまで、非常に多くの柔道愛好者が練習に励んでいる。毎年パラー州柔道連盟の主催により、柔道選手権大会が年間を通じて開催されている。

柔道に対する当地の人々の関心の高さとその普及をもたらしたものは、ひとえにコンデ・コマの業績に端を発すると言っても過言ではあるまい。

又、今をさかのぼること半世紀の時代に、故国から遠く離れたアマゾンの地において、講道館柔道の基本的精神を忘れず、普及方法の是非はともかくも、その半生を柔道の伝播に捧げた彼の生き方は、高く評価されるべきであろう。

今もなお当地の人々の間に伝わる彼の人徳の高さ、誠実さ、紳士的態度、謙虚さ等々の人間性を考える時、一人の柔道家としてのコンデ・コマから謎多き魅力を秘めた伝説的人物へと飛翔していきつつあ

る。

彼の人間的奥深さを、今我々は感じざるを得ないのではあるまいか。

機会があれば再び訪ねたい

日本看護協会派遣訪伯団

吉田浪子

小沢きのゑ

トメアスーを訪ねた時の皆さんの心からのおもてなしを、今も時々夢に見ます。

黒ダイヤの干してある庭を拝見した時、皆さんの御苦労が目に見えるようでした。シンガポーンからはるばるアマゾン奥地に移植されたというピメンタの原木の前では、人生の中で最も強い感動を受けました。

トメアスーに日本人のための大変良い病院が出来上っていました。心からおめでとうございますと申し上げます。けれど、利用する方があるということは、病人があるということで、あまり好ましいことではありませんけれど。

皆さん立派なお仕事をなさって、安住の地を築かれたのを見て、感激しました。おたずねした大沼さんのお宅は、まるでジャングルの中

の龍宮城でした。機会があれば、世界の自然の宝庫、緑とアマゾン河のブラジルを、もう一度たずねたいと思っています。

星野修氏への書簡

ピメンタの由来

長尾武雄

吉田悟郎氏は南洋地方に於ける農林経営の先覚者であり、権威者であったので、昭和四年六月拓務省創設に際し迎えられて、最高の嘱託として就任、拓務局に配属されていました。

当時、最年長者であり且つ有名な頑固者で通っていました。然し、どういう風の吹き廻しか、小生とはウマが合い時々老夫婦だけの家によばれて、南洋名物のカレーのご馳走になり柘植、農義に花を咲かせた懐しい思い出があります。

従ってピメンタ導入についての件も、真相を記憶しているのです。昭和五年春、吉田氏は当時の文書課長北島氏（後に次官）と共に、拓務省として最初のブラジル調査員として渡伯。帰国して改めてベレンに赴任された。

アカラも当時カカオの生育が予想に反して、会社も植民者も悩みはじめ、従って吉田氏は南洋の経験に基き、代替永年性のピメンタ植栽を植木氏に申し述べ、植木氏もこれに同調、併せて種苗の斡旋方を吉

田氏に依頼すると共に、南拓本社の平井取締役にも報告された。（福原さんはシングー開発問題で帰国中であったと思います）。一方吉田氏も本省へ種苗斡旋配慮方を申請すると同時に、南洋時代の部下で当時同氏と共に拓務省嘱託に採用され南洋拓植指導のため、シンガポールに駐在していた堺理喜太、照屋全昌の両氏にも拓務省を通じ、マレー半島で種苗の入手方を指令したのであります。

ピメンタ苗などはシンガポール市内では絶対に入手できず、マレー半島の専門農園でなければ手に入らないのです。同地はボルネオ、ジャバ、印度等と共に、世界で限られたピメンタの産地であったのですから、私は昭和九年二月第一回の訪伯に際し、シンガポールで照屋君に会い、又同一一年初頭ベレン赴任に際しても同地で同君に会い、その人間性及び技術者としての真面目さをよく知っています。永年在住のため、マレー地方の農園には顔が広く且つ信用絶大でありました。そこで昭和八年四月二七日神戸港出帆はわい丸で、臼井君が訪伯するのに合わせて、拓務省から照屋君宛に入手準備を指令したのです。

航海途中の手入れ、それをし易くする荷造り、手入れ方法の詳細は照屋君の手配指示により万全が期せられたのです。臼井君はその指示に従って、日々真面目に管理したことは賞讃されてよいでしょう。

平井取締役は照屋君等のマレー農園への入手、旅費、荷造費その他の経費として、臼井君に百円を照屋君に交付するよう托したのであります。

臼井君の船中での熱心な手入れ振りは、同君と同航した細川悦次郎

君から聞いたことがあります。

一方福原さんが大正一五年調査団長としてアマゾンに赴いた折、土民の家の土産ピメンタを見て、大いに興味を持ちカスタニャールを経営するに当り、これを当り入れ、片岡治美、本木七郎、西村亀太郎の各氏に栽培を命じ、ベレン赴任後もアカラに奨励し、同地に在植中の土屋一君が真面目に植栽していたことも私は見て知っています。然し福原さんは一本から二、三キロ採れると誤算し、他方当時のブラジルではピメンタは南洋、印度の特産でブラジルでは出来ぬものと信じこんでいたので、折角の改良が結実しなかったのです。

幸いに世界大戦により南洋方面からの輸入が止まり、土産種のみとなりこれが値上りしたため、改めてアサヒザールの二本が注目され、斉藤、加藤の両人により、確認増植されるに至ったのでしょう。

関係資料は拓務省から大東亜省に引継がれましたが、昭和二〇年三月一〇日の大空襲で被爆全焼のため何も残っておりません。以上の件は私の記憶及び片々のメモによってお知らせいたしました次第。

拓務省初代拓務局長郡山智、二代目高山三平など南米拓殖特にアマゾンに執念を持ち続けている者は唯一人となってしまった。死んだコンデ・コマの遺志、アマゾン在植者の意思を伸ばしたいと思っております。

広大なる国土も環境に応じ、農生産も伸びるでしょうし、地下資源の開発に真の文明国家に発展することでしょう。

「ピメンタ・ド・レイノ」の種苗輸入に関する資料の発見について

在神戸　植木寿

昭和四九年六月八日

首題の件に関連してトメアスー植民地開拓二五周年記念アルバム中の問題の記事については、私、蚕業会を引退し余暇を持てることになりましたので、保存していたアマゾン開拓当時の書状や書類を取り出して点検いたしました処、左記二口の書状と報告書が発見されました。

一、昭和七年八月二一日付、当時ベレン市駐在拓務省嘱託吉田悟郎氏に宛てた、パラー支店支配人の「胡椒苗輸入に関する件」の回書状写。

二、昭和八年八月二二日付、南拓トメアスー出張所支配人に宛てた農事試験場主任吉田耕三氏の「ブラガンサ沿線農業経営状態討査告書提出の件」についての報告書。

右資料の内容を仔細に点検したところ、吉田悟郎氏へはハワイより「ピメンタ・ド・レイノ」の優良種苗輸入の斡旋方を依頼いたしており、その種苗がシンガポール港にて、第一二回植民輸送船に積み込まれ、折良く臼井牧之助氏が船中給水など面倒を見て、ベレンに運ばれパラー支店にて一週間程入念に保管し、吉田耕三氏がこれを昭和八年七月一〇日トメアスーに持ち帰ったことが、明確に記述されており、

七月一一日にアサヒザール農場に植付けられたと推定されます。

何十年も前のことですが、両資料はトメアスー植民地ピメンタ・ド・レイノ種苗輸入の正確な記録として主な関係各位のご閲覧を願うよう希望いたします。

トメアスー郡長時代の思い出

沢田脩（ふかし）

私は父弥太郎、母とねの三男として育ち、七歳の時南拓アカラ植民地に移住してきました。一九三七年五月九日、黒水病で母を亡くし、同年一〇月二七日、四八歳の父も亡くしました。兄毅（こわし）のもとに兄弟妹と協力しあって頑張り、後のピメンタ景気によって今日があるわけです。

入植当時の苦難時代、父はアカラ野菜組合創立に際し購買部理事を勤めたことがあります。私も一九四六年三月、終戦後のアカラ植民地在住者の生産物販売権がＣＥＴＡ（州植民地管理局）に自由にされていたのを、その不合理に堪えられず、アカラ農民同志会の一員として販売権獲得に猛運動を続けました。その結果、八カ月後に農産物輸送船ウニベルサール号を完成、州政府から販売権を獲得してトメアスー産業組合の基礎をつくったこともあって農場の管理よりも他人の飯を食ってみたいと思うことで、組合の販売部に勤めました。

トメアスーはピメンタ・ド・レイノの好景気とともに経済的に恵ま

れた移住地となって、一九五九年九月一日、郡として独立しました。そこで兄哲（さとし）とともにトメアスー都会議員を勤めてきました。

一九六三年二月一五日、郡長選挙に立候補して当選、同二一日に就任式を行ないました。私が四二歳のときでした。母が亡くなったのが四二歳で、〝頑張れ〟と勇気を与えてくれているようで感慨無量。思わず、やるぞ！と自分を鼓舞したことを今も憶えています。

トメアスー郡独立記念日の式典（1979年９月１日）

一九六九年一月二一日まで部長を勤めましたが、その間の一九六四年ブラジルの革命政府が誕生を見、党派の派閥間題で随分考えさせら

れました。

パラー州人のことをパラエンセと呼びますが、パラエンセは一般に他所者排撃の意識が強く、物事を成立させることが困難です。たとえば、第二次大戦中の伯人による焼打ち事件があったことから、日本人が仕返しをしてくるのではないかと本気で思っている伯人が少なくありませんでした。

戦後の日本人移住者がトメアスー波止場に着くと、同郷人同県人が幟を立てて出迎えにいくのを見るにつけ、伯人はますます日本人は何かやるのではないかと誤解し硬化し、そのたびに私はどうやったらブラジル人とうまくやっていけるかということに腐心しました。

当時の州知事ドゥトール・アウレーリオ・コレイア・ド・カルモ閣下が親日家であったので、私たち日系人を引き立ててくれました。都庁の附属建物、病院、小学校、市街地の電化、水道、郡内道路など公共施設を充実したものにいきました。

伯国はフットボールが盛んですが、トメアスーに戦後移住者が増すにつれて野球が盛んになりました。私の野球狂も手伝って、十字路に球場をつくるときは郡が六千クルゼイロ協力して完成させました。

ブラジルの慣例では、上司が自分とともに信頼できる部下をそれぞれの役職に就かせますが、私も道路局長に日高寅男氏、現場施設担当官に福島清一氏を起用して仕事をスムーズに運ぶことができました。

第二トメアスー移住地造成に先立っての地権取得は、日系人一七名の名儀を借りて取得することができました。これには前述の州知事の深い理解と協力があったことが、今でも感謝の念を込めて思い起こさ

れます。

私と妻ゆり子の間に後継者がないのが残念ですが、トメアスーにおいても私の以後日系郡長が出てこないのは何とも淋しい限りです。

これからのアマゾンにおいて、日系人の政治家がどしどし育ってくれることを願っております。

戦後移住

横倉信由

アマゾンに移り来て三〇年、開拓農民のあわただしさにそれは夢のように過ぎてしまった。移民船あふりか九が神戸港を出帆した時の紅顔の美少年どもは、はや立派に成人して、ブラジルの人となり家長となった。当時アマゾンに大いなる希望を賭けた主人公達も、今や白髪童顔の好々爺となってしまった。懐しい日本、美しい故郷の山河が険に浮かぶ時、望郷の念抑えがたく詠みし駄句一句を句集『郷秋』として綴ってみることにした。

アマゾンでの私たちの人生も、満更意義なきにしもあらずではないだろうか。

郷愁

横倉牧民

原爆忌今美しき祖国なる
ダイヤルは日本の夕朝の月
初便り忘ることなき女文字
日本の便りが欲し秋灯下
帰化すれど祖国は祖国原爆忌
夕端居故郷（くに）に姉あり妹あり
戦歴を友と語らい秋灯下
故国（くに）恋しアマゾン夜烏月に鳴く
原爆忌我が青春は兵なりき
読み返す姉の便りよ天の川
クリスマス母の故郷は雪の国
行年や日本の客の多かりき
日本種の夏ネギ一束買うて来し
日本名を由美と名づけて天花粉
移り来て波乱万丈夜々の月
ポーダルコ咲くアマゾンを故郷とす
故国より嬉しき便り胡椒干す

追悼記

千葉三郎先生の激励の御言葉に支えられて

トメアスー産業組合顧問
トメアスー文化協会顧問
平賀練吉

日本人アマゾン移住五〇年祭祭典出席のため、慶祝使節団団長としてトメアスーへ向う途中、メキシコ上空で倒れ亡くなられた千葉三郎先生を偲び、今から一〇年前先生から賜った御言葉を、私どもはその後も心の励みといたしましてトメアスー植民地の基礎づくりを果し今日に至りました。この先生の御言葉を次に掲げたいと思います。

昭和四年、田中義一（田中竜夫代議士の実父）総理大臣の時、ベレンに居住するブラジルの士官に柔道を教授したコンデ・コマ（前田光世）から、鐘紡にあててアマゾン開拓の要望がありました。

これを受けて移民課長大橋忠一君が、リオ駐在の田付大使と連絡し、ブラジル政府から正式に日本政府に開拓要望のあったのがそもそもの始まりでありました。

鐘紡では、東京の工場長であった福原八郎さんを団長として実地視察をさせ、その結果南米拓殖（株）を創立することになりました。

私は当時代議士でありましたが、この仕事には献身的に協力して株の募集にも、また福原さんの企画構想にもお手伝いしたものです。

私は昭和五年四月、代議士立候補を見合わせ、妻を伴い永住の心境でアマゾンに向いました。南米拓殖（株）の取締役として、現地との橋渡しをする役目でした。

アカラ植民地に定住して自ら山焼きもし、また植民地諸君を激励しましたが、主作物の選定の研究が十分でなく、生活の保障も得られず不安動揺し、サンパウロ方面に逃げ出す人もかなりの数にのぼりました。

私自身二回マラリアに昌され、重体に陥ったこともあります。

ブラジルではターボラ革命が起こりました。しかし私はブラジルが大好きでした。日本人の将来の発展地域として素晴しいと思いました。

その後太平洋戦争が勃発いたし、ブラジル政府は日本人を軟禁、現地では随分辛い思いをしたようです。この間臼井牧之助君の持参したピメンタが栽培にやや成功して、前途に希望を見い出したのです。

終戦後は、日本人の研究心と勤勉さが実を結び、トメアスー産業組合の方々の指導がよかったのでみちがえるように立派になり、私も三〇周年のお祭りには日本政府を代表して親しく出席し、その後も二回訪問致しましたが、生活も安定し環境も整い、加えてパラー州当局の心からの協力で模範的集団地域をつくることができました。

私は・トメアスー郡の名誉市民として表彰され、またアマゾン開拓功労章をパラー州議会から受けました。まことに名誉であり、ありが

たいことです。私はトメアスーにお墓を建て武藤山治、福原八郎、コンデ・コマと一緒にここに永久に眠り、開拓者の皆さんに感謝したいと考えております。

アマゾン・トメアスーは私にとって第二の故郷であります。

御言葉を聞いて、先生の温顔を再び拝することの得ざりしを思い、御霊安かれと心からお祈り申し上げます。

（一九七九年一一月一五日）

第五部

年表・参老資料

■アマゾン日本人移住史年表
（参考資料）

アマゾン地方に於ける農業と経済
大カラジャス総合開発計画について
マンジオカ・アルコール計画について
アマゾン熱帯農業総合試験場
ピメンタ・ド・レイノ由来記
コショウ・フザリウム病の総合考察
オイルパームの収量に関する試験
胡椒根腐病及び胴枯病

アマゾン日本人移民史年表

一八九五年

●伯国東洋移民貿易株式会社、日本移民三〇〇〇名誘致の目的を持って、パラー州統領ラウロ・ソドレーとの間に契約したが、実現せず。

一八九九年

●日本東洋移民会社が二〇〇〇名のアマゾン移民計画を持ったが、外務省の許可とならず。

一九〇三年

●アクレ地方に、ペルー移民のゴム景気に刺激された出稼ぎ者が多く定着（ゴム景気後、一部がマナウス、ベレンに下り、野菜栽培を始める。

一九〇五年

●南伯に移住した鹿児島県人の松下正彦、ゴム景気時代アマゾン下りし、玩具商を営むも、ゴム景気後サンパウロへ帰る。

一九一八年

●前田光世、柔道世界巡業の途次ベレンを訪れ、六年後（一九二四年）ベレンに定住。アマゾン日本移民導入調査に大きく協力。

一九二二年

●パラー州統領、駐伯田付大使に州内への日本移民受け入れ希望表明。

一九二四年

●駐伯大使館の野田良治書記官、森本海軍武官、アマゾンを視察調査。

一九二五年

●外務省嘱託農学士芦沢安平、鐘紡社員仲野英夫、パラー州内を視察調査。

州統領より五〇万ヘクタールの土地譲渡の申し出を受ける。

一九二六年

●駐伯田付大使は粟津金八、江越信胤、関根郡平夫妻を伴い、パラー州、アマゾナス州を視察。

●福原八郎調査団、アマゾン調査を実施。

●アマゾナス州は粟津、山西源三郎に対し、日本移民用地として一〇〇万ヘクタールの土地の許可を与える。

一九二七年

●福原八郎調査団団長、帰国後アマゾン河流域の植民計画に関する調査報告書を、外務省通商局より刊行。

一九二八年

（八月一一日）南米拓殖株式会社設立。

（八月一七日）南拓社長福原八郎一行四名ベレン着。

（一二月）アカラ、モンテ・アレグレ地区を主体に計一〇三万ヘクタールの土地譲渡を、福原八郎名儀でパラー州より受ける。

●上塚司調査団をアマゾナス州に派遣。パリンチンスを中心に一〇〇万ヘクタールを選定。

一九二九年

（一月）南米拓殖株式会社の伯国法人コンパニーア・ニポーニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジル設立。

（四月）アカラ郡トメアスー植民地の港兼本部として先発隊が斧を入れる。

（六月）拓務省設置。

（七月）第一回移民四三家族、大阪商船もんてびでお丸にて神戸港出航。

（九月七日）リオ・デ・ジャネイロ港着。「花の島移民収容所」に一泊。ま　にら丸に乗り替える。同二二日、トメアスー着。四三家族、単身八名、合計一八九名。

（一〇月）第二回移民二五家族、神戸港出航。

（一一月）モンテ・アレグレに南米拓殖直営農場を開設。

一九三〇年

●アマゾニア産業研究所設立。八名入植。
●アマゾン興業、マウエスに農場開発。第一陣七家族五〇名入植。

一九三一年

●大阪ＹＭＣＡアマゾン開拓青年団四七名モンテ・アレグレに入植。
●アマゾニア産業研究所関係高等拓植学校卒業生五〇名、第一陣としてパリンチンスに入植。
●アカラ野菜組合創立。
●小作料納入問題で争議。
●千葉三郎、蚕種携行で養蚕開始。
●山田義雄と青年七名、オーレン前田光世土地に入植。
●アマゾン興業株式会社、事実上の解散。

一九三二年

●崎山此佐衛、海外植民学校南米分校をマウエスに設立すべく入植。
●南拓カスタニャール農事試験場に於て、胡椒在来種五〇〇本植付ける。
●木下又一、キャベツの結球に成功。

一九三三年

●南拓社員臼井牧之助、シンガポールから胡椒苗を持ち込む。

一九三四年

●ベレン市に日本国領事館開設。

●尾山良太、ジュート尾山種を発見。

●ブラジル政府、移民二分制限法を実施。

一九三五年

●コンパニーア・ニポーニカ、植民事業を断念。福原八郎帰国。

●農事試験場閉鎖の際、農場雇員尾花福太郎より、胡椒苗三〇本を加藤友治、斉藤円治譲り受ける。

●野菜組合、アカラ産業組合に改組。

●アマゾニア産業研究所、アマゾニア産業株式会社に改組。

一九三六年

●悪性マラリア発病、猛威をふるう。退耕老後をたたず。

一九三七年

●マラリア病治療費免除。植民者の体格検査実施。

一九四〇年

●旧アマゾニア興業株式会社関係者、アマゾニア産業株式会社に入社。

一九四一年

●太平洋戦争勃発。

一九四二年

●ブラジル対日国交断絶。

●ベレン日本国領事館閉鎖。アマゾニア産業株式会社解散。

一九四三年

●ベレン沖にてブラジル船、ドイツ潜水艦により沈没さる。これがため、邦人商店・家屋焼き打ちされる。トメアスーに邦人軟禁。

●コンパニーア・ニポーニカ株式会社、連邦政府に接収され、州政府の管理下に置かれる。

一九四五年

●太平洋戦争終結。海外在留邦人の家族呼び寄せ始まる。

一九四六年

(三月) アカラ農民同志会結成。

(四月) アカラ農民同志会産組改革案提出。

(一一月一八日) アカラ農民同志会ウニベルサール号進水、処女航海。

一九四七年

●東京に海外移住協会発足。

（七月一〇日）アカラ産組、加藤友治、斉藤円治を顧問に、平賀練吉を理事長に推す。

（九月一五日）母国戦災救援金として五コントスを組合事業資金より送金。

（一二月二八日）胡椒の売り上げ伸びる。

一九四九年

●アカラ産業組合を、トメアスー産業組合と改称。

一九五〇年

（一月）辻小太郎、ヴァルガス大統領に会見、戦後日本人移住受け入れについて具申す。

（七月）東京に海外移住促進協議会発足。

●トメアスー産組、サンパウロ出張所設置。

（九月）対日平和条約の調印。

（一〇月）上塚司、ヴァルガス大統領に会見、日本人移住者受け入れに関して懇談。

●ブラジル移植民審議会、日本人アマゾン移民辻枠五〇〇〇家族を許可。

（一二月）日本外務省欧米局第二課に移民班を置く。

一九五二年

（六月）日本農林省、アマゾン移民の募集を開始する。

●渡航費の貸付制度の実施。

（八月）東京に海外移住中央会発足。（海外移住協会と海外移住促進協議会　の併合）

●トメアスーに胡椒ブーム起る。

（一〇月）榊戸移住斡旋所再開さる。

（一一月）海外移住促進議員連盟の結成。

（一二月）戦後集団移住の第一回一七家族五四名、アマゾン・ジュート移民として神戸港を出航。

一九五三年

●日本外務省に海外移住懇談会設置。

●外務省欧米局に移民課設置。

●アマゾン河流域大洪水。これがためジュート移民大打撃を受け、以後中止さる。

●ベラ・ビスタ、モンテ・アレグレ、マタピ地区、トメアスー、ベレン近郊呼び寄せ移住始まる。

●二八家族神戸港出航。

一九五四年

●（財）日本海外協会連合設立。

●ベルテーラ、フォードランジャ、トレーゼ・デ・セテンプロ地区への移住始まる。

（六月）トメアスー第二回移民二九家族入植。

（七月）第三回移民入植。
（一一月一五日）トメアスー植民地開拓二五周年祭典挙行。
（一二月）第四回移民三六家族入植。
●トメアスー飛行場開港。

一九五五年
（七月）外務省に移住局設置。
（九月）日本海外移住振興会社設立。

一九五六年
●胡椒輸出許可申請、許可さる。
（三月）横浜移住斡旋所開設。
（六月）ジャミック移植民有限責任持分会社設立。
（七月）海協連アマゾン支部をベレンに、駐在員事務所をマナウスに設置。
（一一月）移住振興信用金融投資有限責任持分会社設立。
●グァマ地区入植開始。

一九五七年
●アマゾン地区入植開始。
（五月）第一回北伯野球大会開催。
（一二月）東京に全国拓植農業協同組合連合会発足。
●パラー州胡椒栽培者中央組合結成。

●トメアスー農事研究会発足。

一九五九年

●エフィジェニオ・デ・サーレス地区入植開始。

（三月）ジャミック移住振興ベレン支店開設。

（四月一七日）トメアスー第二移住地建設準備委員会結成。

（五月）トメアスー二世会発足。

（七月）トメアスー組合、パラー州中央組合脱退。

（九月一日）トメアスー郡独立。パラー州第六〇番目の郡となる。日系郡全議員二名当選。

（一一月）為替の自由化。

●トメアスー産組無線連絡開始。

●トメアスー開拓三〇年祭。

●アマゾン開拓三〇年祭を行なう。

●トメアスー・サンフランシスコ・シャヴィエル教会定礎。汎アマゾニア日伯協会発足。

●キナリー地区入植開始。

一九六〇年

●胡椒世界市場漸騰。

（一月）臼井牧之助謝恩会創立。

●トメアスー野球連盟結成さる。

●第二トメアスー移住地建設のため、ネイ・ブラジル郡長より二万

町歩の地権証受け取る。

（三月）（社）中央農業柘植基金協会発足。

（五月）海外移住研修所開設。

（一一月）日伯移住協会調印。

●ロザリオ、ムルアイ地区、入植開始。

一九六一年

（六月）（財）海外移住婦人ホーム設立。（現国際女子研修センター）

●横浜移住斡旋所新施設落成。（現海外移住センター）

（一一月）第二トメアスー事業所設置。

一九六二年

（四月）トメアスー地区マラリア防疫委員会結成。

（五月）トメアスー地区連合会結成。

（一〇月）第二トメアスー移住地、第一陣二四家族入植。

（一二月）胡椒産業調査団来村。

一九六三年

（三月）トメアスー中学校開校。（アントニオ・ブラジル中学校）

●エリザベス・サンダース・ホーム先発隊到着。

●トメアスー郡長に、日系沢田脩当選。

●高砂香料工業会社、アマゾン香料研究所建設。

（七月）海外移住事業団発足。

（一〇月）日伯移住協定発効。

一九六四年

●トメアスー飛行場滑走路完成。

（一一月九日）トメアスー入植三五周年記念事業として文化会館定礎式。

（一一月二五日）胡椒油抽出工場鐘紡化学工業株式会社操業開始。

●ベレン・ブラジリア間国道開通。

一九六五年

（五月）トメアスー産組従業員親睦会機関紙『緑風』発行。

●外務省移住局が中南米移住局に改組。

（八月）聖ステパノ農場第一陣入植。

●マナウスに日本国領事館設置。

●アマゾニア日本移民援護協会設立。（現アマゾニア日伯援護協会）

一九六六年

（一月四日）トメアスー波止場、新桟橋落成。

（四月）移住者への渡航費貸付け制度から支給制へ。

●事業団北伯雇用農青年制度始まる。

●第二トメアスー試験場開設。

（一一月一五日）トメアスー地区連合会、トメアスー文化協会と改称。

一九六七年

●トメアスー文化会館落成。

●ジャミック移住振興マナウス支所開設。

●マナウス、自由貿易港となる。

●少年野球大会始まる。

（一一月）トメアスー産組、第二トメアスー移住地に購買部第二配給所新設。

●皇太子、同妃殿下来伯。ブラジリアにてトメアスー代表が記念品献上。

一九六八年

（八月二三日）パラグァイ大統領就任式参列帰途の千葉三郎トメアスーを訪問。

一九六九年

●胡椒病害（フザリウム性胴枯病、立枯病）蔓延。

●胡椒病、ウイルス菌発見。

●日本冷蔵現地法人、ベレンに設立。

一九七〇年

（四月二九日）山田義一勲五等瑞宝章叙勲。

●北伯移住地代表者会議開かる。

一九七一年

（八月一八日）平賀練吉、吉川英治賞受賞。

●神戸移住センター閉鎖。

一九七二年

●アマゾン横断道路（トランス・アマゾニカ）開通。

一九七三年

（二月）移住船最終便にっぽん丸、横浜港出航。

（四月）平賀練吉、勲三等旭日章叙勲。

●トメアスー産組従業員親睦会機関紙『緑風』『トメアスー新聞』と改称。

（五月）渡航費支給、所得制限による支給基本方針が決定。

●トメアスー産組第二トメアスー出荷場落成。

（六月二六日）パラー州第一回移動政府トメアスー郡に設置。

（七月）移住者送出し、航空機利用となる。

●トメアスー連合婦人会結成。

（八月）第三トメアスー建設委員会発足。

（一〇月）事業団地方事務所、一二支部に統合整理。

●永大産業現地法人、ベレンに設立。

●大洋漁業現地法人、ベレンに設立。

●トメアスー文化協会別館落成。

（一一月四日）国道ＢＲ一〇号線接続道路トメアスー―パラゴミナ

ス間開通。

（一一月五日）第二トメアスー入植一〇周年記念祭。

（一二月一二日）ベレンに至る産業道路開通。陸の孤島より開放される。

一九七四年

（一月）トメアスー野球ＯＢ会結成。

（二月）トメアスー産組定款改正し、活動をパラー州一円に拡大。

●第二トメアスー入植者二一一家族になる。

（四月）アマゾニア熱帯農業総合試験場設置。

●日本大使館よりパラー州に贈られた桜百六本のうち、トメアスーの一本に花が咲く。

（四月三〇日）第二トメアスー移住地公民館落成。

（五月）多雨による胡椒病害蔓延、大被害を受ける。

（八月）国際協力事業団発足。

（九月一二日）州立病院、発電所落成。

（一一月）トメアスー相撲愛好会発足。

一九七五年

●マナウスに日系企業進出。

●千葉三郎植民地計画を州政府が許可。

●先没書慰霊碑建立。

（一月）トメアスー河架橋促進運動始まる。

（一一月一五日）トメアスー河架橋完成。

一九七六年

（四月二六日）親日家パラー州知事フェルナンド・ギリョン逝去。

一九七七年

（一月四日）第三トメアスー移住地分譲の開始。

●トメアスー日語学校校舎建設定礎式。

（一月二八日）ドゥトール・ウイルソン・トメー校校長、アナ・ネリー賞受賞。

●アマゾニア熱帯農業総合試験場落成。

●少年野球全伯大会三位入賞。

一九七八年

（四月）大沼春雄勲五等旭日章、平賀清子勲六等宝冠章叙勲。

（六月一八日）日本移民七〇年祭、サンパウロで行なわれる。

（六月二二日）皇太子殿下、同妃殿下アマゾンを御訪問。

（一二月一日）マンジオカ・アルコール・エネルギー調査団来村。

●トメアスー入植五〇周年祭典委員会発足。

●トメアスー農村振興委員会発足。

一九七九年

（一一月八日）アマゾン日本人移住五〇周年祭典行なわれる。

（一一月二九日）千葉三郎、五〇周年祭典慶祝団団長として、空路出席の途上、メキシコにて客死。

一九八〇年

（二月）菊地文雄勲六等瑞宝章叙勲。

（二月一六日）トメアスー日語学校、新校舎開校。

●アマゾニア援護協会、高齢者のため巡回診療始める。

（一一月一二日）千葉三郎納骨式。

一九八一年

（八月）トメアスー農村振興協会結成。

（一一月二日）日伯政府間の合意によって国際協力事業団現地法人ジャミック、ジェミスは撤退、精算業務に入る。

（一二月二二日）交通遺児育英会のブラジル研修団一行、トメアスーを訪問。

一九八二年

●押切他男勲五等瑞宝章叙勲。

●トメアスー連合婦人会一〇周年。

（一一月六日）第二トメアスー移住地開拓二〇年祭行なわれる。

一九八二年

●パラー州ツクルイ水力発電所工事着工。

一九八三年

●日伯合弁アルミ製錬会社工事着工。

●カラジャス鉄鉱石開発プロジェクト進行。

一九八四年

●トメアスー総合農業協同組合、増産プロジェクト推進。

参考資料

アマゾン地方に於ける農業と経済

阿部昇

農業と経済の一般論は私達農業者の論ずるものでなく、経済専門家とか学者の論ずべきものだと思う。しかし、私はここでアマゾン地方に於ける農業と経済の特殊性、特にトメアスーの農業と経済に関して農業者の立場より、簡単にしかも断片的に思いついたことを述べてみたいと思う。

ブラジルは農業国である。しかも一面では世界でもっとも立ち遅れている農業国といえるかも知れない。南部ブラジルは別として、特に

アマゾン地方は国策としてアマゾン開発庁を設置して、その開発には年々莫大な予算が計上され、力を入れているにもかかわらずその開発は遅々として一向に発展せず、見るべき農業地帯とてなく、いたずらに昔ながらの掠奪農を繰り返しているにすぎない現状である。

このことを思う時、私達日本人農業者の立場は、アマゾン開発の第一線にあり、その使命の極めて重大で、意義のあることに思い及ぶのである。

私達、日本よりの移住者をその大きな腕の中に抱擁せる養国ブラジルに対して、何をもって報いるべきかを考えれば、自らその進むべき道は判然と認識されて来るはずである。

アマゾン農業の特殊性

アマゾンに於ける農業と経済の特殊性は、現在のままでは天然産物が豊富であるために、あえて苦労して働く必要がなく、又古くからの慣習であるアビアード制度はこれを助長して農業の発展を阻害した感があり、いつまでも昔のままであって将来発展する可能性も誠に少ないということである。

実際にアマゾン全域を眺めわたして、これぞといった農業地帯は皆無といっても過言でない現状であって、一部の牧場を除いては、農業地帯らしいものはほとんど日本人農業者の集団地に限られている。

また、アマゾンの立地条件、土地、気候等あらゆる面から言って、余程の心身強健な者かあるいは特別の農業的技術を有していなければ

成果を挙げることは非常に困難である。

現今のアマゾンは、あらゆる面に於いて、世界の脚光を浴びるに至り、各国が積極的な経済戦を展開しているにもかかわらず、そこに農業移住者を送り込んでいるのは独り日本だけのようである。これはアマゾンの農業がいかに難しいものであるかを如実に物語っているものと考えてさしつかえないと思われる。

要するにアマゾンに於ける農業の開発は、日本人農業者をおいて他にないと断言できるのであって、そこにアマゾンに於ける農業的興味があり、私達の希望もある。

将来に於けるアマゾン農業の在り方と移住事業

現在、相当数の日本人農業者がこの広大なアマゾン流域に分散して各種の農業を営み、アマゾン開発に邁進しているにもかかわらず、未だ経済的にも恵まれず、その成果を挙げることの出来ないのが現状である。

いかなる理由であろうか。私はここで日本側並びにブラジル側の移住者に対する営農指導に対する欠陥を指摘したい。最も重要なることはその地方に於ける主作物の問題につきると思う。

現在のアマゾン流域の各植民地を見ると、永年作物とてなく一様に短期作物、またはその地方的需要農産物に限られている。このブラジルのインフレ下の不安定きわまる経済状況に於いて、このようなありふれた農産物を生産しては生活を維持するのがようやくのことで、百

姓として生活を安定せしめ、その向上をはかることは不可能なことである。

アマゾン地方はその立地条件からして、要するに量が少なくて金額のあがる国際市場に送り得る産物を探求しなくてはなるまい。勿論、トメアスーとしては胡椒に次ぐ第二作物として研究しなくてはならず、他のアマゾン流域の各植民地では緊急を要する事項である。

そうして、その地方の土質と気候に適した国際商品としての性格を有する産物が見出されぬ限り、アマゾン流域の日本人農業者の移住地も永久に現在の穀を破り得ず、生活の向上、文化的生活を営むことは至難なことであり、悲惨なる末路となり得る可能性がある。南伯の人々の、アマゾンに三年すめば猿になるという言葉は、私達としては実に心すべきことである。

以上のような見地より、私達が常に日本よりアマゾンを訪問する官公庁移住関係者に強調・力説することは、移住者を送り出すだけではいけない、日本の移住事業が国策ならば、もっと積極的に乗り出すべきであり、現地の営農指導機関を充実させるべきであるということである。現地の農業経営者と日本よりの農業技術者とが、しっかりとした組合せのもとに、アマゾン農業に科学的なメスを入れ、そこに合理的で有効適切なる営農指導方針を確立しなければならない。そして日本側も移住者に対して、積極的な援助をなし、進むべき道を知らしめ、科学的な試験場の設置と相まって、世界的農産物を探求して、はじめて本格的に日本よりの移住者をアマゾンに送りこめる基礎が完成されるのではなかろうか。

トメアスーに於ける主作物と経済

トメアスーの場合、前述せる如く、国際市場の対象となる産物は胡椒である。往年のトメアスーは最初のカカオが失敗に終り、野菜を主作とした生活を営んでいた時代、誰が今日の隆盛を予期し得たであろうか。

篤農家による胡椒の栽培が無かった場合を想像するに、現在のアマゾン流域の日本人移住地と同様の状態であり、戦後の日本よりの移住者を受け入れかね、昔ながらの五家荘の名の如く、人口増加も望めず、最低の生活を営むという段階から一歩も前進することなく今日に至ったに違いない。

世界の胡椒市場に突如として出現したブラジル産胡椒はニューヨーク市場に於て、世界一級品として折紙をつけられ、今や世界の胡椒市場に於て注目の的となっている。当地を視察した世界各国の胡椒取扱商社の派遣員達は、この科学的な農法と企業的な経営を見聞して、はっきりとブラジル胡椒の産地の実力と将来に於ける世界で最大の胡椒供給地となり得る可能性のあることを認識して、驚異の目をみはって帰っている。私達も南洋方面の主産地における幼稚なる農法と住民の副業的なる極めて小規模なる栽培を想像する時、私達日本人農業者による合理的栽培と品質向上、生産コストの低下により、世界胡椒市場の制覇はあながち夢とはいえないことを確信出来るのである。

又、経済的見地より考察した場合、ドル獲得の生産者は如何なる

悪性インフレにも恐れることなく、有利な立場を保持出来るのであり、当分トメアスーの社会的経済的発展も順調なる歩みを続け得ると思われる。

唯、二、三年後には当然、来るべき市場値の下落に備えて、その合理的経済栽培と、それによる生産コストの低下を計り、びくともせぬ経済的基盤の確立は絶対に必要なことである。現今は、世界的に生産が低下し、一九六〇年度の生産予想は五～六万トンといわれ、世界の需要量七～八万トンをはるかに下廻る生産であり、生産者にとっては極めて有利な状態である。しかし、南洋生産地の現状は今日の市場の高騰により、増植と管理に全力を尽くしているので、二～三年後には急激な生産量の増大が予想され、これに対するあらゆる手段を講じなければならない時期が来ることは必至と見られている。

トメアスーに於ける組合組織と経済

産業組合組織とは、即ち、経済力のない個人農業者を擁護することを目的として、その組織の力により生産物を有利に販売し、商人に乗ずる機会を与えず、又、すべての必要物資を出来る限り、安価に農業者組合員に供給するということである。

しかし、このようにその目的と使命が判然とされているにもかかわらず、認識され難く実績の上がらないのは何故だろうか。農業協同組合の運営ほど難かしいことは、現今の社会にはないとさえ思われる。しかしながら世界各国においても、この組合組織は強く農民の間に強

調され、国としてもこれを奨励してその発展に力を入れている現状をみるに、確かに農民擁護の唯一の機関とさえ考えられる。

若年にして渡伯した私は、日本内地における農業協同組合の実態は知るよしもないが、何か当地には根本的に異なる条件があるように感ぜられる。

例えば、日本に於いては国を背景にした金融機関として農林中央金庫があり、農林省はその監督と奨励に力を注ぎ、又地域的にもかけ離れたることもなく、販売・購買の市場への距離も近く、交通運輸機関が発達している関係上、すべてが便利である。そこに組合自体としての諸設備において、負担もきわめて軽いものがあろう。その点、当地はどうであろうか。組合員の数と生産物の多少にかかわらず、一切の諸施設は絶対的に不可欠のものであり、建物一切の設備、運輸機関はいうまでもなく、自国内は勿論、国際的な販売網まで組合自体の手によってなさねばならない。その組合数あるいは生産物取扱高の割合は大きく、資金も固定され、組合員に対して重い負担となる。又、特殊な立地条件とあいまって社会的な負担も加わり、日本とは自から異なる状態となる。

しかし、これも将来における増産と組合の合理的な運営により、有利に展開させ得る道はある筈である。いかなる事情にせよ、仮りにもここにこのような経済団体の皆無な場合を想像すれば、この世界的にもっとも有利と思われる農産物を生産しながら、おそらく商人の跳梁するままに、彼らの商業的政策に乗せられ、生産者は惨めな立場に追い込まれることは想像に難くない。

ブラジルのような商人天国においては、ことさらに農民の協同団結と自覚がなくては、自らを擁護し、利益を得ることは困難である。目前の欲を堪え忍んで、将来の基に団結してこそ、自らの生産物を有利に販売し、組合の目的も達成出来るものと思う。

トメアスーこ於ける組合組織の強化は、その経済的発展と直接つながった重大な社会的意義を有するものと言えよう。以上の如く、アマゾンの農業は将来にあり、アマゾンより国際市場に連結されることにより、その発展と経済的基盤が生じ、又組合組織の強化により、農業者に福利をもたらし、人生最終の目的に到達出来ることと確信する。興味あり、又、希望あるのはアマゾンの農業者であると結びたい。

（『トメアスー産業組合三十年史』（一九六一年六月一〇日発刊）より）

大力ラジャス総合開発計画について

アマゾニア熱帯農業総合試験場　　場長　栄田剛

ベレンから南西へ空路五四〇キロメートル、トカンチンス河とシングー河の中間地点に、推定埋蔵量が世界最大の一八〇億トンと言われているカラジャス鉱山があります。

既に一九八一年度より処理能力一〇〇万トンのパイロットプラントが稼動し、将来は五〇〇〇から七〇〇〇万トンまで処理能力を高める

計画となっています。　このカラジャス鉱山からマラニョン州サンルイスまで、八九〇キロメートルの鉄道を敷設して鉄鉱石を輸送し、サンルイスのイタキ港を整備して、世界各国へ輸出します。

カラジャス鉱山の電源地ツクルイ水力発電所工事現場。

以上が、カラジャス開発の中心計画ですが、これら鉱山、鉄道、港等の建設によってもたらされる開発インパクトを核として、周辺地域の非鉄金属、例えば銅、マンガン、ニッケル、ボーキサイトや、農産物のマンジョカ、トウモロコシ、マメ類、ヤシ類、林産物の木材、パルプチップ、木炭などの開発、並びに国際市場への輸出を併せて図る計画でもあり、その故に総合開発計画と呼ばれています。

丁度、トメアスー入植五〇周年の一九七九年の八月、ブラジルより日本に対し協力要請がなされ、その後数次にわたって日本側から各種調査団が派遣されており、既に膨大なレポートも提出されています。総工事費は、一九八一年の価格にして四五億ドル、その資金はブラジ

ル国内の外に世界銀行、西ドイツ、日本などから調達する計画になっています。

既に鉱山、鉄道、港等の大部分の整備が終っています。この計画で、農業開発計画は、特にトメアスー地域の農業の将来に、有形・無形のインパクトが予想されるので、今後とも推移するブラジルの開発政策には注目していく必要があります。

マンジョカ・アルコール計画について

白井凡生

国際食飼糧開発協会の千葉三郎会長が中心となって、一大構想のもとに、アマゾン流域にマンジョカの大生産地を造成し、食糧としてはもとよりエネルギー源として、マンジョカの生産プロジェクトが進められた。

マンジョカは全世界に広く栽培されているが、主要生産国はブラジル、インドネシア、アフリカ諸国である。ブラジルはアマゾンから南リオ・グランデ州まで広範囲にわたり栽培され、原住民の食糧となっている。

ブラジルのアマゾン流域に日本人が入植して五〇年になるが、千葉三郎氏は一九二九年（昭和四年）最初に移住した一人であり、一年間滞在して帰国、国会議員として活躍した。残った人たちは、第二次世

界大戦前後は苦闘の連続であった。

千葉三郎氏がアルコール計画を思い立った直接の動機は、邦人が手がけた胡椒の根腐病であった。胡椒はトメアスーに豊かな富をもたらしたが、この病気が入ってからはふるわず、これによって連作ができなくなった畑の跡地利用として考えつかれたのがマンジョカであった。

現在ブラジルではアルコールがガソリンに混入され、アルコール生産が国策として進められている。いつの日か石油が枯渇しエネルギー危機を迎えた場合に備え、そして将来は日本国内でも利用できるようにしたいという夢があった。

こうした一連の構想の底流には、千葉氏の若い頃からアマゾンに賭けた執念と現地邦人に寄せる限りない温情があった。一九七六年（昭和五一年）七月に国際マンジョカ・エネルギー開発協会がつくられた。理事長に中西健次・高砂香料工業社長が就任し、同年六月、国際協力事業団から調査団が来村。一一月、開発協会からも派遣調査団来村。一二月、アラシジ・ヌーネス・パラー州知事と調印にこぎつけ、一九七八年（昭和五三年）一月には、千葉三郎氏自らが現地視察に来伯した。

アルコール値段から逆算してマンジョカがいくらになるかというと、一町歩より三五屯から四〇屯の収穫があると採算が上れる。コロンビアでは六〇屯とれた例がある。収量と収益が見合えば現地ではどんどん増産に励むであろうし、アマゾンは無限であるということになる。

一単位年間八、〇〇〇キロリットル、二〇単位で一六億キロリットルとして工場規模、生産量、償却費等を詳細に検討のうえ計上して事業に着手した。

このモデルケースが成功すれば、アマゾンにマンジョカ旋風が吹き、この地の農業大を大いに潤したことであろうが、残念ながら時代の変遷と人材の問題、それに南伯のカンナ・デ・アルコール生産の増加に伴い採算が合わなくなった。また、鉄鉱石開発からデンデ椰子樹（パームオイル）の一植付けに休墾地が利用されることで、マンジョカ・アルコール開発協会の現地工場は食餌糧としてのマンジョカ・ファリーニャ（粉）を製造していたが、これも閉鎖せざるを得なくなった。現在は、現地住民の食糧としてのみ栽培されている。

アマゾン熱帯農業総合試験場（Ｉｎｓｔｉｔｕｔｏ　Ｅｘｐｅｒｉｍｅｎｔａｌ　Ａｇｒｉｃｏｌａ　Ｔｒｏｐｉｃａｌ　ｄａ　Ａｍａｚｏｎｉａ　略称ＩＮＡＴＡＭ）

一九七四年四月、従来の第二トメアスー試験場の改組・拡充により設立され、四年間にわたり、建造物の新築・施設整備が進められ、一九七七年一一月一五日落成式が挙行された。当試験場の設立目的はブラジル熱帯における日系農家の定着と安定を目指すことであり、具体的には病虫害（植物病理）、線虫、作物、土壌、畜産の各部門に関する試験研究であった。

しかしながら、日伯両政府の合意により現地法人のＪＡＭＩＣ、ＪＥＭＩＳの撤退が決定し、八一年一〇月一日より精算に入ったため、当試験場は胡椒病害の対策確立にその試験研究を絞っている。一九七四年以降の、当研究所のスタッフ、主要活動を示したのが左記である。

〔一九七四年〕場長三宅博敏、職員大堂志郎、永井和夫、平形広、浜田雅広。試験場マスタープラン造りと本館、職員宿舎二棟、給水、発電施設の建設を行なう。

〔一九七五年〕場長吉田貞吉。研究室長栄田剛。各種研究棟、附属建物の建設。研究器材の整備。

〔一九七六年〕専門研究家一戸稔博士（農水省線虫学研究室室長）、工藤和一博士（農水省東北農試研究主任）が着任。研究部門の充実と共に新研究がスタートする。職員として諸橋茂喜、石塚幸寿、橋本明博、山県正安が着任。また、専門研究家として岸光夫博士（元農水省、園芸学）、福富雅夫（京都大学農学部植物病理学）が滞在し、胡椒病害関係の試験研究に成果を挙げる。

〔一九八〇年〕場長阿相繁（事業所長兼務）研究室長遊佐健輔着任。

〔一九八二年〕場長栄田剛（事業所長兼務）着任。

〔一九八四年〕農業試験場敷地面積五六八ヘクタール、本館、研究棟二棟、グァラナ室二、車庫、農機具庫、農場倉庫、職員宿舎一二棟の建設。研究器材、万能顕微鏡、原子吸光分析装置、恒温恒湿装置、浸盪培養装置、クリーンルーム等一連の土壌分析器、各種測定器の整

備。圃場には各年次別胡椒園の外、カカオ、グァラナ、オイルパーム、各種熱帯果樹、ヤシ類が植えられている。

以上の施設を有する試験場も清算業務に入り、アマゾニア熱帯農業総合試験場が将来も研究機関として維持されていくかどうか、その場合の運営母体をどこにするかといった問題には未だ結論が出されていない。

ピメンタ・ド・レイノ由来記

星野修

トメアスー植民地は現在、胡椒村・黒ダイヤ植民地といわれているようにブラジル否、南北アメリカを通じて最大の胡椒生産地となっている。

一九三三年、南米拓殖株式会社の臼井牧之助氏が「はわい丸」で輸送監督として渡伯の途次、シンガポールで六三歳の老婆が死亡した。上陸は禁止されていたので、輸送監督の臼井氏と親族の五人だけが上陸して埋葬をすませ、帰途会社の命によりピメンタ・ド・レイノの苗二〇本を入手し船中水をやりながら、ベレン港に着いた。同船者に南拓移民細川悦次郎氏がいて水をやっているのはみていたが、何の苗かは知らなかったと述懐している。

アカラ植民地（現トメアスー移住地）のアサヒザール直営農場（場長吉田耕三氏）に移植された。この苗のうち発芽したのはわずかに三

本だけであった。三本の苗を丹念に育て二年目の一九三五年（昭和一〇年）には、三〇本に達していたが、会社の経営不振のため直営農場は閉鎖の止むなきに至った。その折、加藤友治、斉藤円治の両氏が買い取り、自分の農場に移して手入れをし、育て上げ、知友に少しずつ分けて栽培したのが、今日のピメンタ王国を作った因である。

「斉藤円治氏と自分は胡椒を育成した草分け的存在かも知れないが、胡椒村としてトメアスー植民地が喧伝されるに至ったのは、野菜作りに苦しい体験をした精鋭なるトメアスー邦人農業者の胡椒栽培に対する不撓の努力と優れた技量に基くものである」と加藤友治氏は語っている。

〔ピメンタ苗導入時の移民船〕

移民船名　はわい丸

神戸港出帆　一九三一二年四月二七日

輸送監督　臼井牧之助

助手　寺庄一郎、御牧景一

船中で死亡した老婆氏名とその家族構成。

有岡アイ　六八歳四ケ月（乗船時）

元治元年（一八六四年）二月二日生

旅券番号　二二四二七四

広島県高田郡向原村大字長田四一〇三番地出身

有岡詩楼（家長）三八歳
明治二九年（一八九二年）一一月二〇日生
同　カナス（妻）三三歳
明治三三年（一九〇〇年）三月二五日生
同　ユキエ（長女）
大正一〇年（一九二一年）二月二八日生
同　アキコ（次女）
大正一三年（一九二四年）二月五日生
同　秀男（長男）
大正一五年（一九二六年）七月一四日生
同　チエ子（三女）
昭和四年（一九二九年）一〇月一日
同　清司（次男）
昭和七年（一九三二年）四月六日生
計　八名
老婆船中にて死亡、シンガポールには遺体と五名の乗員が下船した。

下船者名
臼井牧之助（監督）
有岡詩楼（老婆の長男）
事務長　（名前不明）
ボーイ　（名前不明）

斉藤徴真（僧侶）

他に五名の老婆が乗船していた。

萩野つね　七〇歳六ケ月（一八六二年生）

旅券番号　二二五〇八二

家長　嘉重　三五歳

土居マサ　七八歳八ケ月（一八五四年生）

旅券番号　二二五一六七

家長　獅太郎　四二歳

広野りた　六六歳一一ケ月（一八六六年生）

旅券番号　二二五一九四

家長　広吉　四七歳

久乗ヒサ　五九歳一ケ月（一八七四年生）

旅券番号　二二五三八〇

家長　音次郎　四九歳

岩永ハル　五九歳（一八七四年生）

旅券番号　二二五二四六

家長　恵之助

※資料は外務省資料館より入手。但し臼井氏の記憶による六八歳の老婆を根拠としたものである。

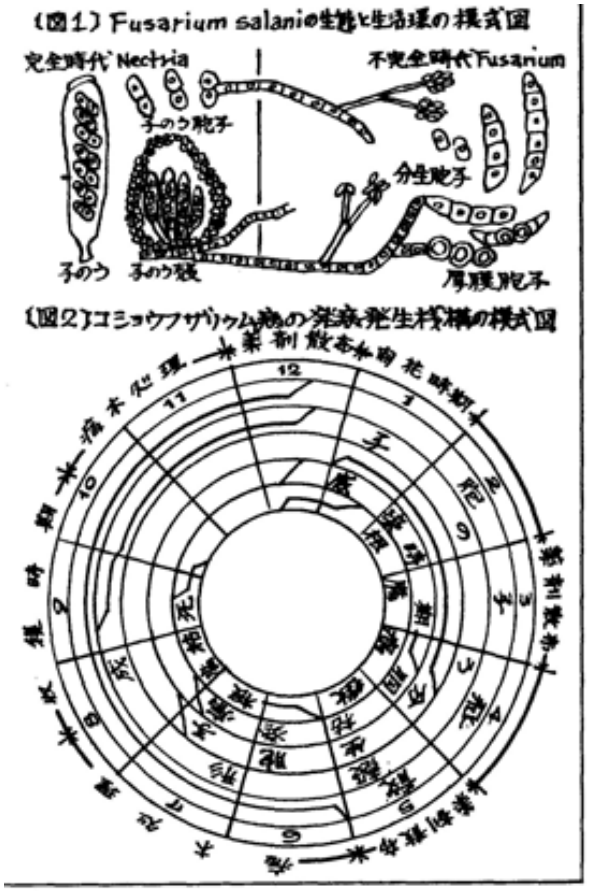
（日本フロンティア協会　玉野良雄氏調べ）

コショウ・フザリウム病の総合考察

（胞子伝播を中心として）

アマゾニア熱帯農業総合試験場　担当者濱田正博

アマゾン地域におけるコショウ病の主因はＦｕｓａｒｉｕｍ　ｓｏｌａｎｉ．ｆ．ｓｐ．ｐｉｐｅｒｉｓという糸状菌の一種である。本病原菌が根部に感染した場合には根腐症を生じ、茎部に感染すると胴枯病を起こす。特に茎部の場合は、病原菌の侵入門戸の主体が付着根で、細胞学的には根組織の一部であるので、両者を合わせて病名をコショウ・フザリウム病とし、それぞれ根腐症（型）、および胴枯症（型）と呼ぶ方が、今後のコショウ病害を研究する上においても、種々の混乱が生じないものと思われる。



本病原菌は、不完全時代（無性繁殖）と、完全時代（有性繁殖）の二つの生活環を有し前者をＦｕｓａｒｉｕｍ　ｓｏｌａｎｉ，後者をＮｅｌｔｒｉａ　ｈａｅｍａｔｏｃｏｃｃａと呼んでいる。（図一）。コショウ・フザリウム病は、主として不完全時代のＦｕｓａｒｉｕｍを対象に研究されてきたが、完全時代については、調査が不充分であった。その後、完全時代の調査がなされたことで、コショウ・フザリウム病の伝播機構が説明し易くなった。

アマゾン地域では、年間の降雨量によって雨期と乾燥期に分けられる。

トメアスーの気象は、雨期が月平均三〇〇ミリメートル以上の降雨量で相対湿度が八〇パーセント以上の日が約五ケ月間続く。一方、乾燥期の降雨量は月平均一〇〇ミリメートル内外で相対湿度八〇パーセント以下である。このような気象条件下で、空中胞子飛散を調べると、胞子飛散数は降雨量と密接に関係していて、雨期が始まると同時に飛散数も増加し、乾燥期が近づくにつれ減少し、乾燥期間中は、比較的少ない。

胴枯病は、雨期の終り頃茎部に病徴が目立つようになり、その感染は雨期の始め境より開始されるものと推定される。根腐病の場合は、発生機構に未だ不明な点が多く、今後に残された課題であるが、病徴は雨期入りと同時に展開した新葉に現われ、乾燥期に葉が黄変し、落葉落枝を伴ない枯死する。

分生胞子は、胴枯症の患部の表皮上に多数形成され、胞子塊が粘質物により着生するため、通常の条件では離脱し難いが、雨滴を伴う風

があれば離脱飛散する。一方、子のう胞子は、橙赤色を呈した子のう殻内に形成され、子のう胞子が水分を得ると、子のうより胞子が自動的に噴出し、微気流等で飛散する。子のう殻は、雨期期間中には胴枯症罹病樹の各部に形成するが、乾燥期には根腐症や胴枯症で枯死したコショウ樹の地際部に多数発生する。

地際に発生した子のう穀からの胞子飛散は、支柱の風下側に発生する乱気流により、支柱上部まで胞子が舞い上り、分散する。従って地上部に形成された子のう殻からの胞子は、より広範囲に飛散するものと推定される。乾燥期に形成された子のう殻は、雨期があれば胞子飛散は行なわれる。しかし乾燥期に飛散した胞子による感染は、胴枯症の発病発生時期より推定すると比較的少ないようである。

本病原菌の伝播は、雨期始めの子のう胞子飛散による第一次感染が生じ次に分生胞子による第二次感染との繰り返しにより、病原菌密度が増加しフザリウム病が蔓延していったものと推察される。従って、現在までの研究結果を総合すれば、コショウ・フザリウム病は図二のような模式図が得られる。

次に、本病害の防除方法の基準は、胴枯症の感染が茎部の付着根より生じているため、殺菌剤散布は、茎部に対して行なう。すなわち鉄砲ノズルで支柱に対して下から上へと洗うように散布する。殺菌剤の散布時期は、Ｂｅｎｌａｔｅ&Ｔｅｃｔｏ等の浸透性殺菌剤を雨期始め、中間、終り近くの三回を基準とし、その間に成分の異なる殺菌剤を数回使用する。特に浸透性殺菌剤の多用は、病原菌の耐性化が生じ易いので、十分に注意が必要である一方、本病原菌の伝播は、種苗に

よることもあり、健全苗の定植が防除の第一歩である。定植後は、常に圃場衛生を心がけ、病木は全て抜根し、焼却処分する方が最も望ましい。胞子は近隣のコショウ園まで飛散するので、コショウ栽培者は協力し合って、病害蔓延防止に努めることが、今後のトメアスーにおいてコショウ栽培の継続を可能にするものと思われる。

オイルパームの収量に関する試験

アマゾニア熱帯農業総合試験場　　担当者　濱田正博

（目的）

トメアスー地域におけるオイルパームの収量を調べ、今後の基礎資料とする。

（材料及び方法）

オイルパームは品種Ｔｅｎｅｒａ（Ｄｕｒａ × Ｐｉｓｉｆｅｒａ）を一九七六年に株間九メートルの千鳥植えで一一〇本を一ヘクタールに植付け、その後除草作業のみ行ない、八年間放置されていた。このパーム園を利用して、収穫量を調査した。

調査方法は、果房が熟して果実が二、三個落下したものを収穫適期の基準と七で花梗を除去して果房を計量した。

調査期間は一九八四年八月から八五年一月までの六ケ月間であるが、その後も引き続き継続中である。

（1）、六ケ月間の総収量は一ヘクタールあたり二、二〇〇キログラムであり、収穫時期のピークは九月から一月までの五ケ月間で、その後減少の傾向がある。（図1）

（2）、一本あたりの収穫量を見ると、〇～二〇〇キログラムの範囲で、平均一〇〇キログラムであった。（図2）

（3）、平均一房重の分布では五～二四キログラムの範囲が見られ、全体の総平均一房重は一〇・九キログラムであった。（図3）

（4）、収量調査は殆ど無肥料に近い条件のパーム園で行なわれたので、単位面積あたりの収量は、やや低いようである。

（5）、一方、Ｔｅｎｅｒａ種はＤｕｒａとＰｉｓｉｆｅｒａのＦ１とされるが、非常に個体変異が大きく、単位面積あたりの収量を向上させるには、優良系統を選抜し、それから組織培養等で増殖させる必要がある。

胡椒根腐病及び胴枯病

一九四二年頃から始められたブラジルにおける胡椒栽培は、第二次世界大戦以後、東南アジア地域における胡椒生産の激減から、需要に対する生産量の世界的不足の影響を受けて著しく隆盛を極め、胡椒黄金時代を迎えるに至って胡椒特産地としての地歩を固めたかに見え

た。

日系移住者に巨万の富をもたらし、アマゾン流域及びブラジル各地へと広がった胡椒栽培も、一九六二年頃より胴枯病及び根腐病が目立った発生を示し始め、一九六五年頃より一部地域に胴枯病が激発し、以後栽培地域へと蔓延して行った。

根腐病は胡椒栽培当初より単発的に発生していたようである。しかし現在の根腐病と同一のものであったかどうかは明らかでない。胴枯病は一九六二年にブレウで発生が見られたが、その後三年たって一九六五年にボア・ビスタに蔓延し、一九六七年にはマリキッタ地区で蔓延している。マリキッタ地区における発生が極めて激甚であったので本病が注目され、当時トメアスー産組技師鶴崎宗雄氏がこの地名をとってマリキッタ病と呼び、根腐病と区別して扱った。

国際協力事業団職員寺神戸曠氏は病徴を示す病名を用いる方がわかり易いという理由から、胴枯病の病名を用いている。渡辺龍雄博士はマリキッタ病を採用している。（一九七七年）

栽培を始めた当初は病害の発生を恐れて、丁寧に処理していたが栽培規模が急速に拡大し、労働者まかせの栽培になると枯死による減収を見越してその分だけ多く栽培しておくことにより、目的の収量を確保する方法がとられ、収益を上げることのみを考える傾向の農耕法がとられるようになった。病害は病原菌のなすがままに放置され、遂に胡椒栽培を不能にする激発を招くに至ったのである。一般的に特産地が等しく辿る公式的な道を忠実に走ったといえる。

病害の激発をみるにつけて病害の調査研究が開始された。Ｄｒ・

Ｆ・Ｃ・アルブケルケ、渡辺龍雄博士（宇都宮大学農学部）、鶴崎宗雄技師（トメアスー産組）によってＦｕｓａｒｉｕｍ属菌による病害フザリウムであることが指摘され、Ｆ・アルブケルケによって一九七六年、病原菌はＦｕｓａｒｉｕｍ　Ｓｏｌａｎｉ　Ｆ．ＳＰ．Ｐｉｐｅｒｓと命名された。

トメアスー新聞第４７号（１９７４年９月５日）

第三トメアスー土地問題　　代表八名、州統領と接見

去る八月一九日午後五時、州統領直接の招聘により土地その他の問題についての会合が州庁舎内で開かれた。

産組より押切理事長、岡部理事、文協より大沼会長、沢田理事、郡より郡長、副郡長、郡全議員が一名、国際協力事業団より山中氏以上八名の代表が出席された。

州としての方針は依然として変りなく、第三土地造成関係者以外には入植の許可は一切していないとの事、先決問題である道路のピッカード開けは、八月中に着工の予定であったが、都合で出来なくなり九月一五日までは必ず着工する事を約束された。

道路はピッカード開けと同時に即時着工するが、完成は来年になる見込みである。なお現在トメアスーに不足しているカカオの種子苗木の調達を依頼した。従って造成委員会は八月三一日に委貞会を開催、

実行具体案を審議する。

州統領は八月二六日、トメアスーを非公式に訪問されたが、来る九月一七日、発電所、病院、留置所のイナグラソンに出席される。

第三トメアスー造成委員会

八月三一日、文協会議室に於て、州統領接見後に於ける第三トメアスー造成委員会が開かれた。当日の出席者は次のとおり。

押切他男、岡部孝、沢田照夫、穎川竜夫、石川辰明、大沼春雄、沢田哲、武田武志、日野文夫、押切正三、新井範明、金義夫、加藤義孝。

初めに押切委員長より八月一九日に州統領と会談した結果の内容説明があり、続いて現時点に於てのモカジューバ沿線既入植者、マリキッタ奥地に於ける土地についての詳細な説明があり、その後具体案審議、検討に入った。活発な意見交換があり、

一、九月八日、申込者の総会開催

二、マリキッタ地区土地の確保

三、申込金の金額及び収納時期及び回数について、以上三件を検討、総会に臨むことになった。現在申込者は九七名。

第二トメアスー植民地建設功労者

海外移住事業団が国際協力事業団に統合成るに当り、事実上解消さ

れる事になった事業団は、第二植民地建設当時の功労者を称え、柏村信雄理事長代理八重尾事業所長より感謝状を手渡された。故関弘殿以下一六名。

平賀練吉、押切他男、佐藤忠雄、藤橋鋼三、武田武志、岩間敬蔵、永野敬士、沢田哲、阿部昇、鈴木信次郎、山田元、永野吉春、沢田毅、沢田照夫、上森六国、大沼春雄。（順不同）

第六部

受章・入植者名簿
章を受けた人たち
トメアスー植民地入植者名簿
植民者氏名表
先没者名簿
アマゾン白本人移住五〇年祭慶祝団名簿
トメアスー移住地と関連ある団体代表著名

ご婦人たちの結束も村の大きな力となっている。

章を受けた人たち

藍綬褒章

勲三等旭日中授章

功労章（五〇年祭）

吉川英治賞

白井牧之助賞

平賀練吉氏

東京都千代田区出身。一九三一年七月、大阪ＹＭＣＡ海外協会募集の「アマゾン開拓団」の副団長として、モンテ・アレグレに入植、一九三九年まで同地で開拓に精進した。同年トメアスーに転住し、戦中・戦後の混乱期には、パラー州管理部職員として移住者と州との橋渡し役で奔走した。

一九四九年、公認の産業組合の初代理事長に就任して、組合活動の基礎造りに手腕を発揮した。理事長引退後は、顧問として現在に至る。一九六〇年代から約一五年間、移住振興の仕事にも携わり活躍した。

一九七三年、十字路に転居。移住者の子弟教育などにも務めている。

過去の顕著な業績に対し、これまでに数多くの章を受賞している。

又、五〇年祭には副総裁をつとめ、功労章を授与された。

現在トメアスー名誉市民。日本政府より勲三等旭日中授章。清子夫人と共に健在。

一九〇二年一二月二四日生。八三歳。

勲六等宝冠章

コメンダドール章

功労章

白井牧之助賞

平賀清子氏

東京都千代田区出身。一九三一年二月、練吉氏と結婚。同年七月夫君と　共に渡伯。モンテ・アレグレに入植し、開拓初期の幾多の苦難に耐え、何一つ不平を漏らさず、常に夫君練吉氏を助け、その内助の功は大であった。

一九三九年トメアスーに転住後は、移住者子女の育成と婦人会活動の指導などに献身的に尽し、長らく連合婦人会会長をつとめ、コロニ

アの婦女子に対する地位・教養の向上に尽力された功績は多大であり、今なお「トメアスー移住地の母」と慕う人は多い。

五〇周年祭典には、婦人会顧問として活躍された。過去の功績に対し、伯国政府よりコメンダドール章を受賞、五〇年祭典委員会よりは功労章を授与された。

現在、トメアスー名誉市民。夫君練吉氏と共に健在。

一九〇七年四月二二日生。七七歳。

勲六等瑞宝章

カルロス・ゴーメス章

細川悦次郎氏

岐阜県郡上郡出身。一九三三年七月、第一二回南拓移民として「はわい丸」にて渡伯。

一〇歳の長女を頭に幼児五人を抱えての悪性マラリアとの闘い、その中で稲作、蔬菜、家畜等で自給自足の生活。多くの同胞の脱耕にも動ぜず、残留し苦闘多難の途を歩んだ後、ピメンタ栽培に成功する。義弟細川悟一氏及び義父母を呼寄せ、耕地の一部を与え面倒を見た他、戦後移住者を受入れ、営農指導、独立に尽力された。その功績と努力を賞讃され、一九七五年日本政府より勲六等瑞宝章、一九七九年

ブラジル政府よりカルロス・ゴーメス章を授与される。
伴侶、古代夫人を一九六六年九月に失い、孤独の身を趣味の読書と俳句で慰められる。
一八九八年一一月二三日生。八六歳。
（原稿作成中の一九八五年一月死去された。冥福を祈る。）

勲六等瑞宝章
日本国外務大臣賞
秋田県知事賞

加藤三郎氏

秋田県本荘市出身。一九三三年四月、りおでじゃねいろ丸にて渡伯。第一二回南拓移民としてトメアスーに入植。
万事実行派の氏は、米作りの片手間に精米所を設け米糠を利用して豚を飼育、コロニアの食生活の改善につとめた。伯人間ではポルケーロの愛称を受ける程であった。
豊子夫人と共に温情家である氏は、当時、猛威を振ったマラリアや黒水病で両親を亡くした孤児を育て、薄幸な老人の世話をしたり花嫁学級を開いて移住地子女の教育に尽した。戦後移住者受入れには、秋田県人会会長として多くの県人を受入れ、独立への面倒をみた。
公職にあっては、一九五八年ニポーニカ商工株式会社監査役、トメ

アスー産業組合理事・監事をつとめた。その功績を讃え、一九七七年秋田県知事賞、一九七八年日本国外務大臣賞、一九七九年日本国政府より勲六等瑞宝章を授与された。

亡き夫人を悼み俳句を詠み静かな余生を送っている。

一九〇六年九月二五日生。七九歳。

（一九八五年二月一六日、原稿作成中に亡くなられた。冥福を祈る。）

白井牧之助賞

開拓功労章

青森県知事賞

太田幸一氏

青森県五所川原市出身。一九六〇年八月、ぶらじる丸にて渡伯。押切他男農場に配耕、二年後第二トメアスー移住地創設と共に第一陣として入植。

開拓に励むかたわら自治団体の地区長を勤め、青年会の育成、相撲愛好会会長として日本国技の宣揚に寄与した。移住地においては棟梁として、国難な初期開拓に携わる新移住者の相談、指導、住宅建築に精力的に活躍し多くの人々から慕われた。

第二トメアスー移住地のイピランガ区とクシユウ区を結ぶ動脈クシ

ユウ川架橋には、全力投球して完成させた。その功績により一九八一年度臼井牧之助賞を、アマゾン五〇年祭に青森県知事賞を授与。

第二トメアスー機械運営委員会の仕事中の事故にて久しく病床にあったが、一九八二年一月一四日、第二トメアスー開拓二〇周年祭典をまたずに昇天す。行年七二歳。

一九一〇年一〇月三〇日生。

保健衛生功労章

白井牧之助賞

熊本県知事賞

長井キミ氏

熊本県荒尾市出身（出生は広島県）。一二歳の頃より台湾にて日本赤十字病院に勤め、助産婦としての資格を取得しその仕事に尽していたが、終戦で郷里広島に引揚げた。そこでも奉仕活動を続けていた。夫君・子息が移住するにつき戸籍を熊本県に移し、一九五四年一月、あめりか丸にて渡伯。

マナウス、ベラ・ビスタに入植。一年後トメアスーに移り、ブレウ七区の阿部昇農場で働く。夫君・子息に尽しながら、かたわら助産婦として地域社会に奉仕する。その間に夫君浜一氏を病気で失う。その後住所をブレウ五区（カニンデー）に移し、二十数年間助産婦として

地域社会に貢献した。

取上げた子の数五百数十人にのぼる。

その功績を賛えられ、五〇年祭祭典委員会より保健衛生功労章を授与された。また文化協会より第九回臼井牧之助賞を受く。

健康に恵まれ八四歳にして尚健在で孫の世話をしている。細川護熙熊本県知事より寿賞を受く。

一九〇一年七月一二日生。

勲六等瑞宝章

ペードロ・カブラル章

日本国外務大臣賞

山形県知事賞

鈴木一郎氏

山形県西置賜郡出身。一九三〇年一二月、さんとす丸にて渡伯。南柘アカラ移民としてアライア区直営農場に入植。カカォ栽培、米作りに健斗した。一九三六年直営農場閉鎖後、アカラ産業組合購買部主任として明敏卓絶、機略縦横の才幹を揮った。創立当時の苦難を経て一九三七年、ベレン市事務所に移り、野菜販売の新市場開拓に苦心惨澹人知れぬ努力をした。一九四二年八月、ベレン市暴動焼打ち事件でアカラ植民地に移り軟禁された。

一九四六年、再びベレン市に戻りトメアスー産業組合発展のために尽し、確固不動の組合の経済地盤を築き上げた功績は偉大である。日本政府より勲六等瑞宝章、伯国政府よりペードロ・カブラル章、日本国外務大臣章、山形県知事賞を贈られる。

剣道の達人で無口だが物事に恐れない胆力を備えている。寡黙慎重、口下手であるが氏の誠実さに対して信用絶大である。他人の世話をよくする義侠心の強い人である。

内助の功、八重夫人も世話好きな女性で、小事に拘泥せぬ清濁併せ呑む鷹揚さがある。戦後移住者は、氏の自宅をホテルなみに活用した。金銭に対する執着心の強い東北型には珍らしいご夫婦である。そろって健在。

一九〇二年七月六日生。八三歳。

マレシャル・ロンドン章

パラー州知事賞

武田武志氏

山形県西村山都出身。一九三三年九月、あらびあ丸にて渡伯。南拓直営農場に入植、カカオ栽培に邁進。当時一二歳であった。余りにマラリアが猛威を振うのでベレン市郊外に移転したが、再発により厳父清志氏は雄図空しく開拓前線の朝霧と消えた。氏の一五歳のときであ

る。遺志を継ぎ健斗、基礎の固まったとひと安心した一九四二年八月、ベレン市焼打ち事件が起きアカラ植民地に軟禁された。

終戦後、トメアスー産業組合の基礎を築いた。仕事に忠実であり、明朗濶達な人柄である。一九五三年トメアスー産業組合会計係、二年後理事に推され、常任理事を経て理事長となり、トメアスー産業組合の難問題を次々と処理し、トメアスー村発展に尽された。

一九七五年、伯国政府よりマレシャル・ロンドン章及びパラー州知事賞を授与される。

現在、惜しくも病気のため理事長の座を後進にゆずり療養中。一日も早く回復されることを祈る。コノ夫人は健在。

一九二二年一二月八日生。六三歳。

ペードロ・カブラル章

農業功労章

沢田哲氏

熊本県菊地都出身。一九三〇年二月、まにら丸にて渡伯。当時一一歳の彼は、伯語を学びそれに精通した。一九四六年、アカラ同志会の州政府交渉、生産物の自由販売権の獲得運動に大活躍。一九年間トメアスー産業組合渉外部長を勤め、産業組合大改革時には渉外理事になる。第二トメアスー移住地創設に際しては寝食を忘れて州政府と交渉した。一九七三年、ブラジル国家事業としてのツクルイ・マラバ開発、

発電所建設、産業道路の造成、それに伴なう沿線農業開発、第三トメアスー構想プロジェクトを州知事に提出、一二〇万町歩の土地を獲得し、不況のトメアスーに希望をもたらした。現在のアイウアスーのピメンタ生産地である。

アマゾン邦人の対伯人交渉史は氏の功績が最も光彩を放つ。

一九七五年、伯国政府よりペードロ・カブラル章を、五〇周年祭典委員会より農業功労章を授与さる。

現在トメアスー文化協会副会長、トメアスー農村振興協会会長の公職にある。藤枝夫人もトメアスー地区連合婦人会役員として活躍されている。

一九一九年九月一二日生。六六歳。

マレシャル・ロンドン章

パラー州議会章

勲五等旭日章

社会功労章

山形県知事賞

白井牧之助賞

大沼春雄氏

山形県尾花沢市出身。一九二九年一二月、さんとす丸にて渡伯。二二歳の時、南米拓殖会社千葉三郎氏の弟福島五郎氏のすすめにより、

トメアスーに入植。南拓直営試験農場、アサヒザールを経て九年間マリキッタ農場の監督を勤めた。

産業組合理事、第二トメアスー建設委員副会長として産婆役をつとめてきた。また自治団体トメアスー文化協会の創立者として、今日まで会長として親しまれている。絶対に立腹しない円満福徳な温顔で、連日起きる紛争事件の仲裁、またその秘伝でまとめた夫婦は百幾組もいる。世情に精通し座談の名手である。

一九七四年伯国政府よりマレシャル・ロンドン章を、一九七八年には日本政府より勲五等旭日章を贈られる。五〇周年祭典には社会功労章、パラー州議会章、山形県知事賞、一九八四年度臼井牧之助賞を授与される。

現在、車椅子生活を送られる美津子夫人（一九八一年度臼井牧之助賞授与）をいたわりつつ自著を整理中であるが、トメアスー及びアマゾンの代表として多忙な日々を送っている。

一九〇九年四月六日生。七六歳。

ジャンヌ・ダルク章

加藤邦蔵氏

山形県寒河江市出身。一九二九年九月、三歳の時両親と共に「もんてびでお丸」にて渡伯。厳父友治氏は第一回アカラ移民の草分け開拓者であり、日系コロニアの礎石としてピメンタ・ド・レイノを育成し

数多くの功績を残した人である。

その遺産を継いで氏はトメアスーにおける実業家として、邦人としては稀にみる巨体ながら厳父の遺訓「人間は水の如く生きよ」を信奉し、コロニアのために活躍している。

一九五八年トメアスー産業組合監事、一九六一年理事を勤めている。親子二代にわたる貢献を讃えられ、一九七六年三月、伯国政府よりジャンヌ・ダルク章を贈られる。

内助の功のまさ子夫人は秘伝の味噌造りが上手で、日系人はもとより伯人間に試食され好評である。

一九二六年一一月三日生。五九歳。

ジャンヌ・ダルク章

新井亀吉氏

北海道旭川市出身。一九七二年四月、ぶらじる丸にて渡伯。ウメ子夫人と共に、一時停滞していたトメアスー日語教育再建に尽力された。

氏の教育目標は親子間の意志・感情の交流、さらに日本文化を理解・吸収して、ブラジル社会に貢献出来る人造りである。

教室らしい建物も設備もない場所で、日本語指導及び青少年情操教育に献身された。

一九七六年度の日語学校学習発表会「舌切り雀」の児童劇は、出席

された在ベレン総領事増沢幸三郎ご夫妻より、海外の日本語学校生徒による学習発表会の中では最優秀であるとの賞賛を得た。

一九七七年、ブラジル政府よりその功を讃えられ、ジャンヌ・ダルク章を贈られた。

老後を郷里で過すべく帰国。北海道海外移住留守家族会の顧問を勤められている。

夫人と共に旭川市にて健在。

一九〇六年七月二七日生。七八歳。

ウメ子夫人、七四歳。

教育功労章

西尾あい氏

北海道帯広市出身。一九三四年八月、あふりか丸にて夫君と共に渡伯。

南拓社員教育部主任・丸弘毅氏のもとで日本語教育の任に就く。

当時植民地は困難きわまる時代であり、農家の倉庫の一室を借りての質素なものであった。日本語教育を通じての人造りはその実績をもたらし、現在、各公共団体の第一線で活躍している人達が流暢な日本語を使えるのもその賜である。

その功を賞讃され、五〇年祭典において、教育功労章を授与された。

マラリアで三児を喪うなど悲惨な境遇にも直面しながら、正邪に潔癖なその性格は変らず、それに比して明朗・社交上手であった。

夫君勝利氏はトメアスー産業組合購買部主任として歴任十余年、煩雑な事務を黙々として勤続した拓入である。一九三七、八年頃、黒水病猛威の最盛時、病院事務主任として重症患者の介抱と昼夜兼行の努力を尽した。

私利私欲なく共存共栄の権化であったが、一九七三年六月他界された。

あい氏は現在孫子たちと楽しい日を送っている。

一九一三年二目一〇日生。七二歳。

（原稿作成中の一九八五年二月二〇日、この人も鬼籍に入ってしまった。冥福を祈る。）

マレシャル・ロンドン章

白井牧之助章

農業功労章

下前原光次

宮崎県えびの市飯野出身。一九五五年一月、ぶらじる丸にて渡伯。トメアスー産業組合評議員や監事に選ばれ、自治団体においては地区長を勤め、青年会の相談役、戦後移住者連絡協議全委員、北伯雇用農青年の相談役として、受入れ・独立・営農指導等に当った。

一九七二年、ピメンタ廃園利用の換金作物としてマラクジャ（時計草果実）栽堀を導入、それによりトメアスー農業経済を好転させた。その功績で、一九七四年三月伯国政府よりロンドン章を授与された。

五〇周年祭典においては農業功労章を、一九七九年度臼井牧之助賞を授与される。

イセノ夫人と共に健在。

一九一四年一二月三一日生。七〇歳。

芸能功労章

椿栄子氏

大分県下毛郡出身。一九五五年一二月、あふりか丸にて渡伯。夫君と共にトメアスー郡ボア・ビスタ区、戸田子郎農場に配耕。働くかたわら地域の婦人子女に舞踊を教え、情操教育に尽して来た。

女史は日本舞踊椿流家元を継ぎ、その芸道には厳しいものがある。ボア・ビスタ区に独立、その後第二トメアスー移住地に移っても芸能を通じての環境造りに尽力した。

トメアスー植民地の娯楽の少ない中で、正月の家族慰安演芸会は、椿舞踊団の発表会そのものの感がする位の盛況である。女史の話題なくしては開催出来ないと云っても過言ではない。

一九七九年トメアスー開拓五〇周年祭典において、その功を賛えられ芸能功労章を受く。「私のような踊りでもこのトメアスー植民地の

心の潤いともなれば、トメアスー文化に通じることで、今後も頑張っていきます」と語る。夫君も芸道に通じ、その美声は若さを感じさせる。第二トメアスー自治会長としての公職にあり、第二トメアスー開拓二〇周年祭典委員長として、開拓二〇年史『アマゾンに挑む』を刊行した。現在も夫妻そろって芸能に尽している。

一九二二年三月一七日生。（椿栄子）

一九二年一月八日生。（椿日吉）

勲五等瑞宝章

プリマベーラ章

体育功労章

白井牧之助賞

戸田子郎氏

岐阜県大垣市出身。一九三二年九月、ぶえのすあいれす丸にて渡伯。大阪府立高津中学校卒業後、厳父が鐘紡社長武藤山治氏と懇意の間柄で、千葉三郎先生の推めで、岐阜県製紙試験場に一年勤務、のち農事試験場に転勤、技術を習得してから南拓社員としてアカラ植民地に入る。吉田耕氏退陣の後、南拓トメアスー事務所支配人となる。

一九四七年、終戦後「アカラ農民同志会」を組織し委員長に推される。

一九四七年、任意組合をつくり理事長兼専務を勤め、一九四九年ト

メアスー産業組合が公認組合となり、大改革により専務理事に推される。一九五七年その職を後進に譲り、ニポーニカ商工株式会社専務理事となる。アマゾン日本移民援護協会初代会長を勤める。汎アマゾニア日伯協会副会長一〇年、パラー野球連盟会長、トメアスー野球連盟会長に就任、現在に至る。

一九六四年、伯国政府よりプリマベーラ章を、トメアスー開拓五〇周年祭典委員会から体育功労章を、日本政府より勲五等瑞宝章を贈られる。トメアスー文化協会より白井牧之助賞を受く。

青年時代から野球、庭球、写真、読書、麻雀と多趣味であるが、野球を通じての青少年教育にはことさら熱心であり、後輩育成に尽されている。

内助の功多い澄子夫人と共に健在。

一九一二年七月二四日生。七三歳。

勲六等瑞宝章

社会功労章

藤橋鋼三氏

北海道芦別市出身。一九三二年八月、ぶえのすあいれす丸にて渡伯。第九回南拓移民としてアカラ植民地に入植し南拓社員として五カ年間勤務。

会社閉鎖と共に独立し営農に励む。アカラ農民同志会メンバーとし

て活躍。

一九四九年二月、トメアスー産業組合の理事に推される。以後一三年間組合の運営に携わり、組合発展の一端を担った。

その功績により日本政府より勲六等瑞宝章を贈られる。五〇年祭典には社会功労章を授与される。

現在、トメアスー俳壇会長として、「惜春」の俳号を持ち同好の士と相寄って、句を詠み指導に当っている。

一九一〇年四月三日生。七五歳。

臼井牧之助貫

林熊男氏

福岡県浮羽郡出身。一九二九年一一月、らぷらた丸にて渡伯。南拓アカラ植民地の第一回草分け入植者。イピチンガ区の実兄のもとに入植したが、後アライア区に独立。

一九三八年マラリアの病魔に冒され重態に陥るが、黒水病を免がれ九死に一生を得る。

弱冠二一歳で渡伯、新夫婦で大密林開拓に挺身あらゆる辛酸をなめた。

生れる子供は女ばかり五人、うち一人を病気で失う。

一九三七年水車を建て、その運営にて利潤をあげ、それを資金にピメンタを植えた。一九五六年、彗星的経済飛躍によって農場に必要な

機具を備えることができた。

九州特有の質実剛健な性格で後輩の世話をよくした。トメアスー産業組合では肥料部主任として敏腕を振った。

未開の大処女林開拓こそ男子の快事と絶叫、率先してその開拓に参加。人生苦数年よくぞ更生の道をはかり、アマゾンに終生を送る決心を固めた事は激賞に値する。

写真に趣味を持ち、アマゾン地方特有の風景、開拓時代の貴重な史料を保存している。いまなお健在。

一九一〇年九月一七日生。七四歳。

勲六等瑞宝章
保健衛生功労章
マレシャル・ロンドン章
パラー州知事賞
白井牧之助賞
千葉県知事賞
日本国外務大臣賞

菊池文雄氏

千葉県長生郡出身。一九三〇年七月、さんとす丸にて渡伯。丸熊男氏の構成家族の一員となり、南拓アカラ移民として勇躍入植した。カカオ栽培に健斗の後、トメアスー中央病院薬剤係となり、アカラ入植

以来終始一貫して熱帯病研究に没頭した。病院主任として悲壮な努力は筆舌に尽しがたい。一九四一年世界大戦勃発の空白時代にも、不自由を忍んで斯道に尽した。

トメアスー植民地の保健衛生を今日の水準にまで引き上げ、優良な植民地に成し遂げた功績は大である。

一九七四年、伯国政府よりマレシャル・ロンドン章を、日本国政府より勲六等瑞宝章を贈られる。五〇周年祭典には保健衛生章を、一九七五年度臼井牧之助賞を授与される。

アカラ植民地開拓のトメアスー史を紐解くとき、氏のマラリアの治療に尽した功績を忘れてはならない。邦人アマゾン開拓が年を重ねるにつれ、その悲壮悲惨であった初期開拓に、終始一貫した氏の献身努力は益々光彩を放つだろう。

現在、自宅にて恵美子夫人と共に静かな余生を送られている。

一九〇九年一一月四日生。七五歳。

勲六等瑞宝章

星野修氏

香川県高松市出身。一九二八年一一月、河内丸にて渡伯。東京外語大学卒業後、農学士芦沢安平氏に推され、一九二八年創立された南米拓殖株式会社に入社。南拓アカラ調査団一員としてコロニアの選定に、前人未踏の大密林跋渉の苦斗を体験した。

第一回移民入植後は、売店配給部主任、労働者係主任、製材所主任、運輸部主任を勤める。一九三五年直営農場閉鎖後は貿易商事部部長であった（一九四一年一二月世界大戦勃発、中央警察に監禁された。一九四二年八月ベレン暴動焼打ち事件でトメアスー植民地に軟禁された。一九四五年終戦（この年静江夫人と結婚、ピメンタ栽培に本腰を入れ、農場経営に専念する（一九四九年トメアスー産業組合改革で理事に推される。ニポーニカ商事会社創立で、専務理事取締役となる。後、戸田子郎氏にゆずる。

トメアスー産業組合理事職にあっては販路拡張に努めた。戦後移住者、単独青年の受入れと独立への援助指導に尽された。これら邦人移住者のために尽された功績により、日本政府より勲六等瑞宝章が贈られた。

温厚篤実な人格者で、アマゾン最古参の拓入であり、生字引の一人である。貞節のはまれ高い静江夫人と共に薬草の研究に専念しておられる。夫妻そろって健在。

一九〇六年一一月一八日生。七八歳。

ペードロ・カブラル章
勲五等瑞宝章
農業功労章
山形県知事賞
パラー州議会章

白井牧之助賞

押切他男氏

山形県尾花沢市出身。一九二九年一二月、さんとす丸にて渡伯。南拓第二回移民としてモンテ・アレグレに入植。一六年間を平賀練吉氏と共に同植民地の発展に努めた。

戦後、ピメンタブームのトメアスー植民地に移る。一九五七年、トメアスー産業組合理事長に推され、以来数年に亘り要職を勤め、組合の発展に力を注ぎ今日に至る。一九七五年、伯国政府よりペードロ・カブラル章を、日本政府より勲五等瑞宝章を贈られる。

五〇周年祭典には農業功労章、パラー州議会章、山形県知事賞を、一九七九年度臼井牧之助賞を受く。

現在、組合相談役を勤め国際食飼糧マンジョカ・アルコール・エネルギー株式会社社長として活躍されている。内助の功、愛子夫人はトメアスー地区婦人会連合会会長として、婦人の地位向上のためリーダーシップを発揮している。

一九一一年八月二四日生。七四歳。

勲六等瑞宝章
農業功労章
白井牧之助賞

池田忠蔵氏

福岡県三池市出身。一九三二年二月、らぷらた丸にて渡伯。入植と同時に在来種のピメンタを本格的栽培したいわばピメンタの元祖。野菜栽培においては「柵掲上式」の発明者として有名。たゆまない研究熱心さは、一本のピメンタ樹より九ｋｇ収穫という記録が残っている。篤農家として、数多くの新移民にその栽培技術の伝授に努められた。

日本政府より勲六等瑞宝章を、五〇周年祭典には農業功労章を贈られる。

一九七八年度白井牧之助賞を受く。

アバエテツーバに住み、悠々自適の生活を楽しみ、高齢ながら毎日一回ピメンタ園を見廻る事を健康法としていたが惜しくも死去した。

一八九六年一月二〇日生。行年八九歳。

勲六等瑞宝章
カルロス・ゴーメス章
開拓功労章
日本国外務大臣賞

熊本県知事賞
白井牧之助賞

永野豊喜氏

熊本県鹿本郡出身。一九三二年一月、もんてびでお丸にて渡伯。第八回南拓移民としてアカラ植民地に入植。蔬菜、米作りの片手間に大工職人として、移住者の家屋を始め、医師の宿舎、青年会館等を建築した。

初期移民が味わったひと通りの精神的苦悩も味わった、アカラ植民地の代表的拓人である。地域においては地区長を勤め、戦後移住者の受入れ、営農指導、子弟教育に尽力された。

その業績は多大で、日本政府より勲六等瑞宝章を、伯国政府よりカルロス・ゴーメス章を贈られる。五〇周年祭典には開拓功労章、日本国外務大臣賞、熊本県知事賞を授与され、一九七七年臼井牧之助賞を受く。

内助の功で誉れ高い静香夫人と共に金婚式を迎えて健在。

一八九〇年九月一五日生。九四歳。（豊喜）

一八九三年九月一三日生。九一歳。（静香。一九八五年二月二〇日歿。冥福を祈る。）

ペードロ・カブラル章

岡部孝氏

北海道河西郡出身。一九三三年九月、あらびあ丸にて渡伯。南拓第一四回移民としてアカラ植民地のマリキッタ直営農場に入植。カカォ栽培に健闘したのは一二歳のときである。入植以来二〇年間は血と涙で綴られた苦闘の連続であったが、終始一貫した開拓精神に依って遂に今日の栄冠をかち得た。

一九五八年トメアスー産業組合理事に推され、以来、購買部主任を兼任、渉外理事を経て専務理事となり、備えられた敏腕を揮った。

その功労を認められ一九七五年伯国政府より、ペードロ・カブラル章を受く。

現在、伯国農業者福祉協会の公職にある。まり子夫人と共に健在。

一九二二年一〇月二日生。六二歳。

体育功労章

沢田毅氏

熊本県菊地郡出身。一九三〇年二月、まにら丸にて渡伯。弱冠一三歳の時である。二〇歳の時、マラリアのため相次いで両親を失う。幼い弟妹七人の長として、肥後魂を発揮して今日に至る。

野球をこよなく愛し、北伯随一を誇る今日のトメアスー野球チームの基礎を固めた。

一九四六年アカラ農民同志会を結成し、産業組合の基礎を固めた。第二トメアスー植民地創設の発案原動力となった。一般社会の公共事業に対する理解が深く、趣味も多様で、音楽グループ〝キングローズ〟への後援を惜しまなかった。五〇周年祭典において体育功労章を贈られる。

静香夫人、令息と共にピメンタを植え忙中閑を求めて太公望を決めこむ静かな日々を送っている。

一九一七年三月二六日生。六八歳。

勲六等瑞宝章

細川悟一氏

岐阜県郡上都出身。一九五四年九月、あふりか丸にて渡伯。トメアスー植民地アグア・ブランカ区の義兄細川悦次郎耕地に配耕、老齢の父母も同行した。二年後独立。一九六〇年トメアスー産業組合理事に推される。以後、三期その職につく。その間、トメアスー文化協会理事として文化芸能部を担当する。

ピメンタブーム再来とともに、戦後移住者の組合加入につき組合精神を力説し、胡椒検査規格の厳守を実行させ、組合マークの商標イメージを高めた。その功績により日本政府より、勲六等瑞宝章を授与

された。

青年時代三菱系スマトラ農場に勤務した経験の持主で明朗闊達、理事になったからとて偉張らず、他人の世話を面倒がらずにする人柄で、衆人に好感をもたれる人である。酒豪で座談の好きな社交家でもある。アマゾン囲碁クラブ会員で老後を楽しんでいる。明子夫人とともに健在。

一九〇七年一〇月二〇日生。七七歳。

勲六等瑞宝章
開拓功労章

遠藤滝三氏

福島県原之町市出身。一九二九年一〇月、さんとす丸にて渡伯。南拓第二回アカラ移民として入植。まもなく悪性マラリアで二児を亡くした。逼迫した経済苦境の中でのマラリアの猛襲は筆舌に尽し難く、入植者の多くが土地を棄て脱耕した中で、土地を目的にアマゾンに移住し、土地を購したら三カ年は離れない、果樹を植える、世界中何処でも苦労はつきものだから辛抱すること、の三条件を守り続けた確固たる信念の持主である。

適性作物の選択研究に情熱を注ぎ、アカラ植民地養蚕の元祖である。後ピメンタの導入によって経済を好転させた。

トメアスー産業組合の前身アカラ野菜組合の初代理事を勤めた。

日本政府より勲六等瑞宝章を贈られる。一九五九年、トメアスー開拓三〇周年祭典に開拓功労章を授与される。

白銀色の顎髭をたくわえて数多くの孫・曽孫に恵まれ天寿を全うした。

一八八八年五月二一日生。

一九七五年九月二三日没。八七歳。

勲五等瑞宝章

プリマベーラ章

カルロス・ゴーメス章

日本国外務大臣賞

白井牧之助賞

浄土真宗本願寺派賞

山田　義一氏

広島県双三郡出身。一九二九年九月、もんてびでお丸にて渡伯。トメアスー植民地第一回草分け入植者である。農聖二宮尊徳のようなタイプの人で、如何な困難に遭遇するも、トメアスーを去らず踏み止まって農業を貫いた。秀作、角田房子著『アマゾンの歌』の主人公である。その功績を賛えられて一九七一年、日本政府より勲五等瑞宝章を贈られた。一九七七年度臼井牧之助賞、一九七八年伯国政府よりプリマベーラ章、一九七九年カルロス・ゴーメス章を、五〇周年祭典に

は日本国外務大臣賞、浄土真宗本願寺派賞を受く。
氏は仏教西本願寺派の信者であるので、仏事の一切を献身的に世話されている。
高齢ながら季節にこだわらず、毎日規則正しい生活を送り、朝夕の読経をかかさない。野菜を育て家庭の食卓を潤している。
みつよ夫人と共に静かな充実した生活を楽しまれている。
一八九八年五月一三日生。八七歳。

白井牧之助賞
農業功労章

石川道善氏

熊本県下益城郡出身。一九五五年一月、ぶらじる丸にて渡伯。篤農家として人望厚く、何事にも綿密繊細にして精励情動を心掛ける氏は、どの分野でも他の新移住者の追随を許さない程の収穫と収入をあげ、戦後組のトップクラスとして知られている。
トメアスー産業組合常務理事、創立当時のトメアスー文化協会常務理事などの公職を勤め、地区においても南アライヤの親父さんとして公私共に親しまれている。
一九七六年度臼井牧之助賞、五〇周年祭典には農業功労章を受く。
藤子夫人と共にカカオを育てているが、模範農園として質・量ともに見学者が訪れる程である。
一九一六年六月二日生。六九歳。

社会功労章

白井牧之助賞

沼沢谷蔵氏

山形県尾花沢市出身。一九三四年九月、あふりか丸にて渡伯。南拓アカラ植民地のマリキッタ直営農場に配耕、カカオ栽培に従事する。僅か八カ月後農場閉鎖の憂き目に遭う。マラリアの猛威に背水の陣を布き、決死の勇を揮って健闘したが、不幸にも一家全員罹病した。多くの子女を犠牲にするに忍びず、ベレン市に移った。努力の結晶が実り、経済的に恵まれ一息ついた処で世界大戦勃発。ベレン市民の暴動焼打ち事件が起き、トメアスーに軟禁された。

一九四五年終戦と共に木崎衛氏の跡地に入植した。百姓一途な気骨はゆるぎなく、農業者の鑑とも云える人である。一九六〇年頃にはピメンタ九二トンの収穫を上げ、多収穫の記録を残した。篤農家としての氏は人望・人情共に厚く、戦後移住者、単独青年を引受け、指導・独立への援助を惜しまなかった。日本からブラジルへ派遣される農業実習生の北伯研修農場でもあった。

その功を讃えられ、一九七九年トメアスー開拓五〇周年祭典において社会功労章を授与される。

老後も野菜づくりに専念し、トメアスー住民の食卓を潤している。こん夫人共に健在。

一九一〇年三月一〇日生。七五歳。

勲六等瑞宝章

岩間敬造氏

東京都目黒区出身。一九三二年八月、ぶえのすあいれす丸にて渡伯。アマゾン開発邦人の先駆者、日本植民学校校長崎山此佐衛氏の徳を慕って渡伯南拓アカラ植民地入植、サンタ・マリア直営農場に一カ年在住。後マウエスに移りグァラナ栽培に健闘。愛妻を喪い、女児二人を抱え苦難の旅を続けた。

一九四一年七月二〇日崎山此佐衛氏の死後、神園万輔、崎山一家と協同農場を運営したが悪戦苦闘で一九四七年、ベレン市に移り野菜栽培をする再婚後トメアスー植民地に入植、胡椒園を経営し戦後移住者の受入れ、独立への援助指導、北伯雇用農青年の受入れ、独立への指導と面倒をみて来た模範農場主である。毒舌家の反面人情味があり、博識でマンネリ化する移住地にあって、氏の存在は尊重に値する。温厚で未開処女地を拓く逞しい精神の持主、金銭を超越した理想郷建設への信念を持っていた。

日本政府より勲六等瑞宝章を贈られる。

一九〇三年一月一八日生。

一九七六年八月一〇日没。行年七三歳。

勲五等瑞宝章
ジュビレウ・デ・プラッタ章
伯国地理学会章
社会功労章

上森六園氏

富山県氷見市出身。一九三三年六月、もんてびでお丸にて渡伯。第三回高拓生としてアマゾナス州パリンチンスに入植、ジュート栽培に従事。

一九五二年より移住振興の仕事に携わり、常に新移住地（モンテ・アレグレ、ポルト・ベーリョ、ロザリオ、ムルアイなど）が創設されると、その地に赴き困難な初期開拓に携わる新移住者の相談・指導に精力的に活躍し、多くの人々から慕われた。

一九六二年から一九七八年まで国際協力事業団の現地機関ＪＡＭＩＣの第二トメアスー事業所に勤務。渡伯後の大半を移住業務に専念した。これらの業績に対し、一九七五年伯国地理学会より、ジエビレウ・デ・プラッタ章を贈られる。五〇年祭には功労章を、日本政府から勲五等瑞宝章、第二トメアスー二〇年祭にはベレン総領事賞など贈られる。

トメアスー産業組合理事を、またアマゾニア日伯移民援護協会の監事を勤め、一九七八年には第二トメアスー自治会長を勤め、第二トメアスー共有林造成委員長の役にある。

現在、百合夫人と共に健在。アマゾン邦人移住史の生字引であり、ピメンタ、カカオ栽培に熱帯農業の模範農園主である。

一九一三年一一月二四日生。七一歳。

勲六等瑞宝章

阿部昇氏

山形県東田川郡出身。一九三五年、あふりか丸にて渡伯。弱冠一五才のときであった。南拓アカラ植民地に入植、米作、野菜栽培に従事。南拓直営農場がカカオ栽培に見切りをつけて閉鎖。マラリアが猛威を振う暗黒時代が出現したので、一応植民地を退散、ベレン市に移り、オイテーロ島で野菜栽培、生産物をベレン市で販売した。

経済的基礎が固まった時、太平洋戦争勃発、アカラ植民地に軟禁された。

戦後裸一貫の再出発に大勇猛心を揮い、東北健児特有の堅忍不屈の粘着力を発揮、胡椒栽培に励む。

スポーツマン精神に培われた明朗闊達、春風駘蕩の人柄で、トメアスー野球の基礎をきずいた。文学面においても俳句を詠み、句集『花胡椒』を刊行。組合従業員親睦会機関誌『緑風』を支援した。

トメアスー産業組合にあっては専務理事として長年にわたり活躍、〃トメアスー住民は組合員なり〃とその範を示し、従業員には組合員のために体を使えと指導、数々の難問題を解決し、組合発展に尽し

た。

無理な激務から、一九七三年四月一六日歿。行年五二歳。一九二〇年一月一七日生。

白井牧之助賞

近藤秀雄氏

愛知県岡崎市出身。一九三一年七月渡伯。

元聖市総領事館書記生の五反田貴巳氏が大阪ＹＭＣＡ海外協会を設立、常務理事となりアマゾン開拓を目的に開拓練習生を募集したのに応募。一九三一年五月一九日りおでじゃねいろ丸で神戸出帆。七月三日リオ・デ・ジャネイロ着、ベレン経由七月一九日、モンテ・アレグレのサンタ・ローザ農場に入植する。同志四七名。

入植後、意見の衝突と軋轢を生じ青年たちは去って行ったが、ミーリョ、煙草、棉を栽培して二〇年間住む。

南拓モンテ・アレグレ試験場に勤めていた押切他男氏、副団長で来伯した平賛練吉氏がトメアスー移住地に移ったので、成瀬義治氏と共に一九五二年トメアスーに移る。ピメンタ栽培からカカオ栽培に変り、ブロイラー養鶏、香料作物バニラ栽培と堅実な経営をしている。トメアスーにおけるバニラ栽培の第一人者である。これにより臼井牧之助賞を受く。

マラリア防除薬の副作用で難聴であるほかは病気なし。四人の子女

はそれぞれ嫁いでいる。
一九七八年に長男に先立たれたのが惜しまれる。夫婦そろって健在。
一九一二年一月一八日生。七五歳。

勲五等瑞宝章

日野文夫氏
宮崎県佐土原市出身。
一九五四年一〇月、あふりか丸にて渡伯。
トメアスー産業組合評議委員、トメアスー文化協会副会長を勤めた。

勲六等瑞宝章
メリト・インテグラソン・ナショナル章
香川県知事賞

山本峰雄氏
香川県坂出市出身。一九五四年五月二八日、あふりか丸にて神戸出帆。七月七日ベレン港着。
トメアスー植民地和田茂二農場に配耕、三カ年の雇用農を終えてブ

レウ三区に独立する。

大密林を焼払って獅子奮迅の勢いで酷熱をものともせず開墾、胡椒栽培に邁進し営農の基礎を固めた。その間に三男雄三郎氏を亡くしたが、一家を統率、渡伯十余年でカスタニャール市郊外に分農場を建設、二男拓男氏を支配人に置く。父親の心境を詠んだ句、〃小さき子のすがる梯子や胡椒つむ〃〃盆参り独り異国に眠る子よ〃

一方ベレン市に各種雑貨・手工芸品取扱い販売の山本商会を設立。社長となり現在三店舗を経営するに至っている。

一九五九年戦後移住者の生活向上を図るため、戦後移住者連絡協議会を結成し会長に推され、移住者の独立営農を容易にするため海協連ベレン支部、トメアスー産業組合に働きかけ、肥料、資金の導入、耕地の配分、ブレウ小学校建設、組合加入を実現させた。

単独青年の独立営農には援助指導を惜しまず、エリザベス・サンダース・ホームの聖ステパノ農場建設に際し、先発隊員を預り農場建設の世話をした。

一九六〇年トメアスー、ブレウ第三区長、一九六四年トメアスー文化協会理事、一九五八年トメアスー産業組合評議委員、一九五九年トメアスー産業組合監事を勤めた。

これらの業績につき日本政府より勲六等瑞宝章、伯国政府よりメリト・インテグラソン・ナショナル章が贈られた。

一九七四年北伯香川県人会を結成し会長を勤めた。在職中、他県人会に先がけて北伯香川県人相互扶助協会を創立し、県費助成金を有効に活用する様にし、県人の福祉向上に努めた。この業績に対し、アマ

ゾン開発五〇年祭に香川県知事賞を受く。

多くの役職に就任したが、理論は法にかなって整然、書類整理も正確で適任者である。元警察官で剣道は成績抜群で、丸亀一二連隊司令官より感謝状を受く。大日本武徳会剣道三段の免許を持ち、トメアスー、ベレン市で剣道クラブをつくり、剣の精神を伝承して来た。

現在ベレン囲碁クラブ会長で、囲碁の精神普及に尽している。

一家発展の陰に千枝子夫人がいた。主人に協力し家計を切り廻した。視野広く、社交性にたけ座談の巧みな夫人であった。

一九一一年三月二五日生。七四歳。

叙勲者（ブラジル人）

■パラー州知事　フェルナンド・ギリョン

■トメアスー中学校校長　ウィルソン・マルキス・ダ・シルバ判事

■トメアス郡長　ベニギノ・ダ・コスタ・ゴエニス・フィーリョ

出身地別トメアスー在住者数（一九八四年一月三〇日現在）

地方	都道府県名	世帯数	地方	都道府県名	世帯数
九州地方	熊本	32	中部地方	岐阜	5
	鹿児島	6		富山	6
	宮崎	25		石川	3
	長崎	6		福井	0
	大分	1		愛知	4
	佐賀	2		静岡	0
	福岡	8		山梨	5
中国地方	島根	1		新潟	5
	鳥取	2		長野	2
	山口	2	関東地方	東京	4
	岡山	0		千葉	7
	広島	8		栃木	14
四国地方	高知	0		群馬	9
	愛媛	0		埼玉	0
	香川	1		茨城	2
	徳島	2		神奈川	5
近畿地方	兵庫	4	東北地方	宮城	16
	和歌山	1		岩手	1
	京都	0		山形	19
	奈良	0		福島	11
	滋賀	0		秋田	13
	三重	3		青森	23
	北海道	17		ブラジル	57

（一二二ページ参照）

トメアスー植民地入植者名簿

戦前のトメアスー入植者

第一回
一九二九年九月九日
"もんてびでお丸"

北海道 野口金四郎 死亡
同 野口惣兵衛 聖州
岩手 佐藤 寿直 死亡
同 及川 信雄 聖州
山形 柳橋権四郎 死亡
同 野口 豊治 スパーン
宮城 茂原 一男 死亡
静岡 大橋伊太郎 ベレン
福井 田中光五郎 パラナ
熊本 佐藤 義雄 聖州
同 深水 静雄 帰国
北海道 一色喜一郎 ベレン
同 佐藤啓次郎 死亡
同 伊藤 勇 死亡
秋田 木村総一郎 死亡
山形 加藤 友治 死亡
同 野口留之助 死亡
福島 神永 勝美 聖州
同 渡辺 源吾 死亡
広島 土居小太郎 死亡
広島 清水 義士 スパーン
同 土居勘三郎 スパーン
同 日高友四郎 スパーン
香川 吉原佐次郎 聖州
同 尾松 徳一 スパーン
同 久保田又一 聖州
福岡 田中 光蔵 麻州
沖縄 蒲天聞朝二 聖州
熊本 村上 種作 死亡
千葉 市原津南三 死亡
同 石毛菊太郎 聖州
同 長谷川貞雄 死亡
同 平川 平次 パラナ
東京 平野 節蔵 マナウス
神奈川 大木 愛吉 聖州
岐阜 辻 頼二 聖州
広島 山田 義一 トメアスー
福岡 小西 茂 聖州
同 林 博 聖州
沖縄 与那城忠三 聖州
同 新垣 武喜 聖州
沖縄 国吉 良恒 パラナ
単独青年9人
北海道 帯川 明 アサイ

第二回
一九二九年一二月一一日
"さんとす丸"

北海道 西田栄太郎 ジパン
高知 南 香市 死亡
新潟 星 清治 聖州
長崎 佐藤今朝雄 スパーン
千葉 森 隆 死亡
同 田中 良介 ベレン
香川 串田小太郎 リオ
熊本 青木 弘記 帰国
一九二九年一一月一三日
"らぶらた丸"
北海道 窪田 萬 聖州
福岡 林 熊男 トメアスー
沖縄 平良 良松 聖州
宮城 我妻亀四郎 聖州
同 関 久三郎 トメアスー
同 庄司 芳吉 聖州
同 樹沢 栄吉 スパーン
同 菊田 常雄 聖州
同 渡辺 勘七 死亡
同 小原 孫吉 トメアスー
同 相沢 末吉 パラナ
山形 猪股 清七 トメアスー
同 猪股 武美 死亡
同 寺崎 徳蔵 スパーン
群馬 中村国太郎 死亡
高知 高橋 太郎 聖州
同 横川 勝旗 聖州
山脇 政清 スパーン
香川 片木彦三郎 聖州
大分 佐藤 肇 聖州
福島 雷野稔治郎 死亡
同 高田幸之助 ベレン
同 八巻 七郎 聖州
同 斉藤亀三郎 聖州
同 遠藤 滝三 トメアスー
同 斉藤 長七 スパーン
静岡 加藤 忠彦 ベレン
兵庫 田中健太郎 スパーン
同 内橋太郎吉 死亡
茨城 田村 茂 帰国
熊本 尾花喜代太 聖州
同 合志 充穂 リオ
同 坂本 恵 ベレン
宮崎 細江嘉一郎 リオ
同 梁山芳太郎 リオ
沖縄 宮里 三郎 聖州
福岡 秋田 留吉 聖州
同 野口好之助 リオ
同 伊藤 一三 聖州
単独青年10人
北海道 坂本 文蔵 パラナ
同 林 義光 聖州
同 坂下 市蔵 死亡
山形 大沼 春雄 トメアスー
山形 押切 他男 トメアスー
福島 佐藤 義彦 帰国
長野 宮崎 一郎 死亡
香川 矢野 楽治 ベレン
同 西浦 国明 帰国

第三回
一九三〇年六月二九日
"さんとす丸"

山形 山口 清松 帰国
同 山口 好衛 死亡
北海道 野口 清繁 ベレン
岩手 多田 辨三 モジ
同 多田札三郎 モジ
宮城 佐藤昌右門 帰国
同 高橋覚之進 リオ
千葉 丸 熊男 スパーン
同 久我 哲夫 聖州
同 菊地 文雄 トメアスー
福島 大河原寅一 聖州
岐阜 村瀬 周一 聖州
京都 梅田喜代治 聖州
同 安達 正男 聖州
大分 後藤 朝一 聖州

第二回追加
一九三〇年二月七日
"まにら丸"

宮城 古山善右門 スパーン
同 高野 政雄 ベレン
同 平間 肇夫 死亡
静岡 小川 鎌一 ベレン
北海道 永井 文雄 死亡
山形 山口 末蔵 パラナ
同 会田 与助 聖州
熊本 沢田弥太郎 トメアスー
北海道 江口 精三 ベレン 死亡
一九三一年一月七日
"りおでじゃねいろ丸"
北海道 福島清次郎 トメアスー
一九三一年五月八日
"ぶえのすあいれす丸"
福島 田中 忠吉 死亡

第六回
一九三一年八月五日
"もんてびでお丸"

北海道 柴田 忠 死亡
同 林 勝蔵 死亡
同 松尾 徳吉 死亡
同 森谷 常助 死亡
同 瀬口 広次 死亡
同 林 耕作 死亡
同 前田 徳蔵 聖州
兵庫 中山善五郎 死亡
山形 木田周次郎 ベレン
山口 河野 四郎 死亡
福岡 岩村滝三郎 死亡
同 内山 藤吉 死亡
愛媛 小笠原右馬 死亡
宮崎 吉留 清 死亡
沖縄 太田 政雄 死亡
単身青年三人
福岡 大獄 一 ベレン
静岡 長野 箕輪 操 ベレン
愛知 山本 栄二 ベレン
北海道 中川 初雄 リオ
山形 渡辺 兼吉 聖州
同 山口慶之助 リオ
同 高橋惣十郎 死亡
同 佐藤 学 聖州
長野 村上辰之助 トメアスー
広島 谷川 喜一 聖州
同 檜分登良一 トメアスー
同 檜分 田一 聖州
同 今村 靖一 トメアスー
山形 秋葉倉之助 アサイ
同 秋葉 朝次 聖州
北海道 能登 伊作 死亡
福島 小樟 良助 死亡
新潟 笠原 三雄 ベレン
宮崎 桐野 重雄 ベレン
同 吉川 短寛 死亡
福岡 木下 又一 死亡
同 野上勇次郎 死亡
同 野林仁三郎 死亡
広島 長野 実 ベレン
熊本 荒牧 近宗 死亡
愛知 竹村 一雄 ベレン
千葉 山本善三郎 聖州
大分 黒川 夏次 聖州
沖縄 島袋 仁和 聖州
同 多和田直蒲 聖州
沖縄 福地 清睦 聖州
同 比嘉 山吉 聖州
同 玉寿 有徳 聖州
単独青年四人
静岡 立岩 助信 ベレン
長野 松村浩一郎 死亡
滋賀 村井 宗祐 死亡
兵庫 藤原 精一 死亡
一九三二年一月一四日
"もんてびでお丸"
熊本 永野 豊喜 トメアスー
静岡 鈴木 清吾 死亡
一九三二年二月八日
"らぶらた丸"
福岡 池田 忠蔵 トメアスー
宮城 小島文四郎 帰国
新潟 細田 徳平 死亡
香川 関 国久 死亡

第八回
一九三二年七月二日
"もんてびでお丸"

北海道 阿部 清雄 死亡
同 山内 善一 死亡
同 野口 虎蔵 死亡
同 堀口 清次 帰国
同 木下庄五郎 死亡
同 江畑 家俊 トメアスー
同 平坂 豊七 聖州
山形 設楽 定吉 聖州
同 奥山 賢治 聖州

岡　奥山　正　聖州
同　加藤　新蔵　聖州
広島　赤木　勝三
宮城　斉藤　円治
千葉　大平
同　佐藤　聡治　帰国
同　千葉　茂　帰国
福岡　菅原小次郎
埼玉　相浦　正明
同　村田初五郎
同　星野久太郎
熊本　中川　佐平　聖州
同　古家　勇　聖州
同　渕上　仁三　聖州
同　城尾　末吉　死亡
同　城野　重記　死亡
岡山　玄場　郁

第九回

一九三二年八月二四日
"ぶえのすあいれす丸"

北海道　今　米太郎　リオ
同　藤橋　綱三
同　助川　藤松　聖州
同　小出　孝　帰国
同　成沢　誠志　聖州
同　対木　佐珂
同　土山　五郎
宮城　佐藤久三郎　モジ
福島　片平　七郎　死亡
同　佐藤　健吾

東京　崎山　茂
同　岩間　敬造
新潟　横山　健一
熊本　山口　則義
広島　小田　政義
熊本　古家　真澄　聖州

単身青年二人

岐阜　戸田　子郎
兵庫　豊永　艶雄　リオ

第一〇回

一九三三年一一月七日
"りおでじゃねいろ丸"

北海道　田中　正実
同　高松　丑松
同　江刺家　信　死亡
山形　渡辺　八郎
同　竹田三三男　聖州
福島　中塚初太郎　聖州
同　渡辺　俊夫　聖州
広島　長野　義明　死亡
同　尾形　与一　聖州
埼玉　米沢　重男　聖州
同　稲垣　五三
同　長沢　賢三
熊本　山口　木治　聖州
同　野中　与作　帰国
同　平木　俊行　聖州

第一一回

一九三三年四月一六日
"りおでじゃねいろ丸"

北海道　渡辺藤五郎　聖州
同　渡辺惣五郎　聖州
同　諸岡　一郎
同　伊藤　弥七
同　風間伊五郎
同　風間　貞　聖州
同　笠井徳一郎　聖州
同　笠井　直義　聖州
山形　阿部　金作　聖州
同　伊藤亀之助　死亡
同　酒井忠次郎　聖州
同　伊藤　繁雄　聖州
山形　吉沢　弥作　聖州
秋田　加藤　三郎
同　木村正三郎
同　松井　礼次
北海道　白鳥　信夫　聖州
熊本　若杉　利治
広島　錦織　常一　聖州
同　上野　盛夫　聖州

第一二回

一九三三年六月二四日
"はわい丸"

北海道　岩田助五郎
同　河内　卓三
同　河内　東一
同　黒沼　藤丸　聖州
同　橋本　政勝
同　河内作右門
山形　高山　鉄蔵

岡　西釜　信造
広島　迫田政次郎　聖州
同　小出　義雄　聖州
愛媛　渡辺　友逸
奈良　上芝新次郎
熊本　福山　正利
同　坂口　広
同　田尻　政作　聖州
同　矢野　定　聖州
福島　佐藤　正男　聖州
長野　柴田　照司
埼玉　池田　広近
同　白石万次郎
広島　細川悦次郎
広島　根　諸富　八治
広島　梅木　栄二
同　岩永恵之勝

第一三回

一九三三年八月二八日
"あらびあ丸"

北海道　山口寿五郎　リオ
同　中野　誠信　モジ
同　浅川勝二郎　モジ
同　大串　駒雄
山形　武田　清志
同　松田　良昌　聖州
同　渡辺　福蔵　聖州
同　松岡　清松　聖州
北海道　鈴木与惣吉
同　菊地　藤吉　死亡

岡　清田　卯一　死亡
同　岡部　正敏　死亡
北海道　湯浅　泉　聖州
同　岩田　栄吉　聖州
広島　松岡　倉多　リオ
同　中島繁太郎　聖州
静岡　池谷　福松　死亡
山形　阿部　清松　聖州
熊本　前田　寅雄　聖州
同　竹下　勝二　死亡
同　横田憲五郎　死亡
同　守田　末熊　聖州
同　御法　円竜
同　渡辺　兼吉　聖州
福岡　秋吉　実蔵　聖州
同　山下　雅太　聖州

単身青年二人

宮城　藤堂　勝次
同　千葉　力　帰国

第一四回

一九三四年三月二七日
"あふりか丸"

北海道　風間　信一　聖州
秋田　高橋弥一郎
同　高橋猪代治　聖州
宮城　村山勝右門　聖州
熊本　福岡　末七
山形　五十嵐　明
同　梅津　義雄　聖州
同　東海林　亨

結城　善吉　リオ

単身青年四人

秋田　佐藤　司
広島　荒原　幸三
福島　佐藤　新
兵庫　遠藤　晴美

第一五回

一九三四年五月二二日
"ありぞな丸"

北海道　三輪金太郎　聖州
同　高沢　増栄　聖州
同　根本美之吉　聖州
同　中之目源吾
同　葉内善四郎　聖州
同　横山　好見　死亡
同　沢口　清寛　聖州
同　瀬戸　栄雄　聖州
愛知　山口庄次郎
広島　川竹友太郎
岐阜　和田　茂二
同　渡辺　一　聖州
山形　内谷　忠雄
熊本　小山　亨
北海道　吉田甚次郎
同　西崎　賢治

単身青年三人

静岡　渡辺　貞治
同　山田　準次
同　小沢　時雄

第一六回

一九三四年八月二四日
"あふりか丸"

北海道　明石　清松　聖州
同　鎌田　嘉吉　聖州
同　薄野　梅松　聖州
同　明石健太郎　聖州
同　清水富三郎　聖州
同　久保田長次　聖州
山形　結城　津経　聖州
同　沼沢　谷蔵
福島　野崎　経蔵　聖州
奈良　中上　恒太　聖州
徳島　森西　藤一　聖州
北海道　西尾　勝利
北海道　津田　新八　聖州
同　岡部　重良
熊本　村田　末男　死亡
同　木崎　街
同　木下　茂

第一七回・一九三五年四月二九日

"さんとす丸"
姓名不明　以後直営農場閉鎖

第一八回

一九三五年六月二三日
"あふりか丸"

北海道　林　鹿太郎　聖州
同　永井　機　死亡
山形　阿部与之勝　死亡
同　阿部　繁雄　聖州

福島　斉藤　林蔵　死亡
広島　野原啓太郎
福岡　本木　はつ

第一九回

一九三五年四月二三日
"ありぞな丸"

山形　高橋金太郎　死亡
熊本　梅井　一男
福岡　今里　甚一　聖州

第二〇回

一九三六年四月二三日
"あふりか丸"

広島　日高　薫実
同　山崎　貞美　死亡
熊本　大村　義一　聖州
同　渡辺　含　聖州

第二一回

一九三六年七月二四日
"あらびあ丸"

広島　原　常雄　聖州
同　武田　竜　聖州
同　市原　善市　聖州
同　住吉　広蔵　聖州
同　谷末　繁美
長崎　中村　善作　聖州

単独三人

広島　住川　行人　聖州
同　正木　正人
宮城　千葉　ふみ

第二二回・一九三六年九月二〇日"ありぞな丸"

広島　上岡四方三　聖州
長崎　宮崎善三郎　聖州

戦後のトメアスー入植者

一九三七年九月四日
"ぶえのすあいれす丸"

福島　真根井孝門

第一回

一九五三年八月三日
"あめりか丸"

宮城　島川　清久
同　八巻　菊男
同　天野　時丸
同　高野稔治郎
同　荒川　和夫
福島　影山　保幸
同　白川　三郎
同　遠藤　政雄
同　菅野　弥七
新潟　小林礼三郎
三重　川辺　弥男
京都　下垣　瑞穂
鳥取　河合　治
広島　榎　武
同　小本伊三郎
福岡　平田　金吾
同　橋本　利光
熊本　高木　清人
同　園田　英一

同　田中　次夫
同　松永年四雄
同　吉岡　重記
同　浜岡　初一
東京　菊地　健作
熊本　瀬川　輝邦
東京　斉藤　一郎
同　鈴木　健夫

第二回

一九五四年六月五日
"あめりか丸"

福島　渡辺六右エ門
同　渡辺　要三
同　吉田　馨
同　佐藤　博
宮城　渡辺　一夫
同　折笠　魁男
同　小松　勇
同　本田　義房
同　佐藤　憲吉
山梨　大村　照臣
秋田　小笠原　進

東京　金光　達夫
長野　滝沢　秀雄
同　小山啓一郎
京都　原田　二男
三重　清水　隆（ペレン）
愛知　山田　浅吉（アイヒ死亡）
和歌山　葛尾　寅二
同　庵ノ上寿男
山口　伊藤　斌
同　江藤　増美
福岡　大野源太郎
同　橋本　元七
同　青木　竹次
熊本　福川　義弘
同　諸富　実雄
同　村上　清晴
熊本　宮川　正三
同　菊田喜八郎
兵庫　大本　勢色
福岡　池田　博美

香川　山本　嶋蔵（ペレン）
長崎　浜口　末松
同　安藤　博則
青森　野沢　茂雄

第三回
一九五四年七月八日
"あふりか丸"

福島　高野　清喜
長崎　一色　寿
福岡　岩谷　作雄
同　山杉　林造
山口　小林　正
熊本　久島　清
同　宮崎　盛幸
宮城　川村　邦男
同　桜田　緋平
同　三品　嘉市
宮崎　日野　文夫
同　日野　進
宮崎　黒木　重克
愛媛　日野　七蔵
秋田　木村金太郎（ホスタニ ナイル）
福島　草野　久治
群馬　大口　六郎（サンバウ ロウ）
福島　渡辺　正助
同　阿部　四郎
鹿児島　鶴田　茂男
福岡　善　清次
同　池田幸志朗
福島　松崎喜代司

福岡　樋口　強雄

第五回
一九五五年一月二二日
"ぶらじる丸"

熊本　石川　道善（トメアス ・ルビ）
同　林　利雄（トメアス ・ルビ）
宮崎　下前原光治（トメアス ・ルビ）
愛媛　中田吟十郎（サンケウ リンジロウ）
富山　北林　淳一（トメアス ・ルビ）
群馬　堤　春雄（ペレン）
宮城　門間　真（トメアス ・ルビ）
岩手　中川　春蔵（トメアス ・ルビ）
福岡　橋本　実
宮崎　黒木　斎
山口　伊藤　一夫
秋田　鈴木　豊城（ペレン 死亡）
愛媛　岸　俊蔵
宮城　千葉　久夫

第六回
一九五五年五月一〇日
"あふりか丸"

長崎　吉丸　一
同　和田　岩雄
佐賀　平川　常一
大阪　前田　宗一
長崎　稲沢　精作
佐賀　小川金四郎
熊本　糸川　次男
徳島　芝原　歳美

熊本　渡辺　進
岐阜　牧野　忠男（トメアス ・ルビ）
愛知　田辺　毅
同　久野　正雄
新潟　鈴木　録郎
茨城　横倉　信由

第七回
一九五五年一〇月
"ぶらじる丸"

宮城　木村嘉三郎
熊本　酒井　一勇
山形　遠藤　忠雄
同　加藤和四利
同　安達　利男
同　押切　正三
福島　菅野　悟郎
福岡　大野　健樹
同　兼清　幸男
福島　滝田　余慶
宮城　菊地　正治
山形　稲田　繁
山口　渡多野　昭
宮城　大橋　義久
熊本　飯川　嘉之
兵庫　向井　匡
熊本　坂上　秀雄
同　宮川今朝次
同　宮川　茂七
広島　谷東　博
熊本　深水　綾男

三重　大西稲四郎
同　阿部　勤
山形　津田　常吉
福島　武藤　寅三
愛知　原田　徳松

第八回
一九五五年一二月
"あふりか丸"

北海道　山家　岩雄
熊本　蒲島　久夫
同　徳丸　徳
同　永野　安幸
広島　石村　志登
大分　椿　日吉
宮城　佐藤　久男
宮城　横山　勝郎
同　阿部　公文
同　佐々木秀男
同　気仙　明
福岡　野田　菊造

第九回
一九五六年五月
"あふりか丸"

福島　斉藤　春夫
熊本　石川　正行
同　石川　静夫
同　石川　辰明
神奈川　相原　政彦
広島　竹下喜代三

他地方よりの転住者

宮城　三浦　宣孝
岩手　吉館　熊吉
新潟　山田　敏雄
香川　野上　又一
宮城　小林　仁治
熊本　長井　清
同　長井　一益
茨城　今野進一郎
大分　高橋　力
富山　南保　由松
大分　工藤・市蔵
宮城　佐藤　清
長崎　辻　保
山梨　花輪　克（トメアス）
大分　郡賀　利則
福島　五島　善助
千葉　生井　竹治
長崎　赤尾　好美
福島　佐藤　義伍
長野　天田　勝助
山口　橋本マツ子
長崎　辻　充
北海道　黒沢　勝馬
広島　松尾　均
熊本　右山　堅雄
同　鶴田　藤助
佐賀　光武　静雄
熊本　安部　久喜

北海道　茂吉沼専一
宮城　熊谷　透
秋田　伊藤誠四郎
北海道　茂吉沼邦一
熊本　石田　亀吉
同　松井　勝
山梨　土屋　政一
愛媛　西岡　宗一
同　西岡　正重
宮崎　坂上浪之進
長崎　竹下　一
新潟　小池　光夫
北海道　三浦　健一
大分　音成　次男
山口　河村　寿

出身県別在住者名簿
一九八四年一月三〇日現在

■熊本県
沢田　哲　徳丸　徳
沢田　照夫　頴川　儀弘
沢田　修　頴川　充子
石川　辰明　宮川　正三
石川　功　宮川今朝次
深水　締男　四ノ宮　貢
松永年四雄　四ノ宮鎮男
松永　逸郎　安部　久喜
高木　哲夫　頴川　幸雄
永野　豊喜　林　利雄
永野トシエ　長井　哲司
田中　勲　長井　清
長井　政雄　守塚　泰臣
河上　義美　大平　徳光
河上　和基　大堂　志郎
久島　清　浜田　正博

■鹿児島県
塩屋　昭雄　松元　盛貞
櫛木　昇　高原　信義
小長野道子　西田　光成

■宮崎県
原屋敷征男　日野　文夫
原屋敷隆明　駒山　政好
久保田幸信　松山　数実
神之薗主税　前田　昌宣
下前原光次　西田　与吉

長田　正平

■山口県
伊藤　斌　山根　緑

■兵庫県
安積　幸哉　磯谷　和博
小早川利次

■広島県
竹下喜代三　山田　元
山田　義一　榎　進
日高　寅男　古元　修司
久保　利通　浅野　純麗

■大阪府
平賀　練吉　梅沢　保司
渡辺　勝利

■和歌山県
坂口　陞

■三重県
大屋　聴夫　大屋　繁樹
大屋　久雄

■岐阜県
戸田　子郎　遠藤　薫
岸　みどり　細川　浩
牧野万寿子　遠藤　ハツ

■富山県
佐々木善作　北林　淳一
佐々木清勝　北林　邦夫
上森　六園　北林　勲

■石川県
竹下　六男　吉野　久尚
吉本　晴平

■愛知県
平水　重行　石井　和雄
原屋敷　司　高橋　正一
原屋敷　清　久保　信男
久保田　忍　黒木　孝秋
岸本　一　黒木　修
黒木　重美　山下　満秋
黒木　勝美

■長崎県
浜口　照雄　稲沢　平
浜口　正雄　松本　正人
浜口　敏雄　高松　寿彦

■佐賀県
平川　常一　松尾　均

■大分県
椿　日吉

■福岡県
池田幸志朗　林　熊男
橋本　利光　松本　清
橋本　常年　諸富　八治
加藤　広行

■香川県
大西　邦光

■徳島県
芝原　富男　高岡　勝

■島根県
高石　明生

■鳥取県

近藤 秀雄　青木 盛人
田辺 倖三
■長野県
柴田雄一郎　柴田 英夫
■山梨県
山田 和夫　花輪 克
服部 福男　花輪 一
向山 治
■新潟県
斉木千代吉　吉田 泰治
谷沢喜巳雄　大矢 正吾
鈴木 録郎　伊藤 民雄
■東京都
大竹 末男　池上 哲也
乙幡 正三　茂 実
■千葉県
菊池 文雄　南部 尚
白井 凡生　大越 統
半谷 正道　高野三千六百
半谷 敏雄
■栃木県
峰下興三郎　菊地 稔
大根田恒晴　室井 実
佐々木敬雄　室井 洋
高野 健寿　仁平 武
菅谷 常雄　菊地 善一
鶴崎 宗雄　水沼 滋夫
中見川博司　鶴崎 健三
■群馬県
片所 清市　信沢 晃
吉村 輝明　平形 広

吉村 辰雄　金谷 茂
信沢 輝三　大口 公一
佐藤 和夫
■茨城県
横倉 信由　真木 卓朗
■神奈川県
土屋 準司　浅野 総一
土屋 泰司　中川 純二
菊川 雅幸
■宮城県
八巻 一男　佐藤 小春
八巻 恒男　佐藤 和夫
菊地 勝男　梅村 辰雄
小野 浩道　渡辺 仲子
角田 修司　大橋 浩二
阿部 公文　高野 昌治
桜田 よし　笠松 梅吉
渡辺アキヨ　三浦 貞
小原 宗　門間 忠悌
■岩手県
中川 春蔵
■山形県
大沼 春雄　沼沢 谷蔵
押切 他男　加藤 邦蔵
押切 正三　最上 二郎
大貫 光三　海谷 英雄
武田 武志　笹原 富雄
武田 虎男　三宅 義男
武田彦三郎　稲田 洋一
阿部 雪雄　稲田 繁
猪股 毅　高橋 春

安達 晋
■福島県
松崎紀太郎　松崎 耕一
遠藤 憲一　野原 文子
草野 久治　鈴木 耕治
松崎 康昭　草野 恒雄
渡辺 正助　鈴木 重美
渡辺 正博　高野 正
■秋田県
佐々木勇幸　舟木 良治
佐々木徳松　斉藤 勇二
佐々木二郎　佐藤 武
佐々木寅五郎　金 義夫
加藤アヤ子　村上善二郎
加藤 三郎　大島 孫信
村上 一雄
■青森県
仁和権次郎　木村 弘三
二ツ森一次　太田 茂博
工藤 万造　太田 拓治
工藤 昭夫　永田 恭平
矢内 鉄衛　木村 正栄
奈良 幸久　木村 栄
川村 秀雄　奈良 春治
長浜 キク　田中 人生
杉田 武雄　杉田 秀則
田中 幸正　伊藤 広
尾野 誠賛　長浜 茂
■北海道
横山利傳左衛門　新井 範明
小田島広治　久保 信男

大串 駒雄　伊藤 よね
福島 岩雄　保科 義男
西崎 ヒサ　江畑 竜一
藤橋 鋼三　藤橋 功
徳橋 太郎　江口 厚
岡部 孝　田原 庄介
横山 猛
■伯国生
谷末 晋一　関 久人
木下 昭夫　関 秀男
星野 二郎　関 二郎
加藤マリオ　関 広治
木村陽一郎　岸 徹
藤橋 隆也　鎌田 勉
野林 収造　永井 昭
田中 昌三　諸富 守
沢田 孝夫　和田 寿
西崎 幸男　山田 旭
秋山 春行　長田 勲
和田 真言　佐藤 茂
近藤 譲二　徳橋 小太
鎌田 譲二　諸富 鶴男
岡部 幸郎　仲丸 忠男
鎌田 健三　諸富 健二
柳橋 武夫　伊藤 牧郎
竹田 房彦　沼沢 洋一
石川 秀明　村上 直彦
鈴分 浄二　西尾 逸郎
高橋 成夫　野口 利春
伊藤 健三　高橋 昭夫
永野 幸一　菊池 紘文

川上 寿子　福島 信男
高田 元志　斉藤 礼子
矢島マリ子　木村 寿
日高パウロ　柳橋 武
諸富 守　岡部 富美
西尾 一夫

植民者氏名表

一九三七年二月
（数字は耕地番号）

耕地　地区
トメアスー区
1 伊藤 勇
13 松田 清松
17 阿部 繁雄
10 竹田 三三男
15 西崎 賢治
5 紺野 宗吉
9 星野 よし
2 尾花 福太郎
第一区
（ボア・ビスタ）
加藤 友治
4 神永 勝美
9 村上 種作
11 深水 静雄
14 佐藤 義雄
16 柳橋 権次郎
18 山下 雅太
第二区
19 前田 寅雄
21 加藤 三郎
22 竹下 勝二
及川 信雄
23 渡辺 源吾
29 守田 末統
第三区
（アグア・ブランカ）

37 木村 総一郎
38 阿部 興之助
42 野原 啓太郎
42 田中 正実
43 山田 義一
44 日高 友四郎
46 斉藤 林蔵
47 成沢 誠志
48 横山 好見
49 鈴木 一郎
50 武田 龍
95 庄司 養助
96 池谷 藤一
第四区
（イピチンガ）
55 庄司 芳吉
57 相沢 末吉
59 斉藤 源七
61 関 勝四郎
60 野口 好之助
62 斉藤 長七
63 斉藤 亀三郎
64 野口 七五郎
65 沢田 彌太郎
66 佐藤 肇
第五区
（マリキッタ）
68 小原 孫吉

70 栗山 フイ
71 遠藤滝三
72 高田 幸之助
73 菅野 総次郎
75 関 勝治
77 佐藤 重雄
78 渡辺 場七
[illegible] 岡部 重良
第六区
（アライア）
98 中川 佐平
99 斉藤 圓治
100 永野 豊喜
101 合志 光穂
102 池田 忠蔵
104 平木 俊行
105 林 熊男
106 串田 小太郎
[illegible] 大沼 春雄
ブレウ一区
113 仲丸 佐市
118 横田 憲五郎
119 野原 源吉
120 山口 末蔵
122 丸 熊男
123 安達 正男
108 田中 忠吉
124 高橋 覚之進
125 丸 弘毅
ブレウ二区
132 永井 橋
135 月俣 豊
133 岸 善助

139 阿部 佐吉
147 徳橋 清助
ブレウ三区
150 土屋 一
153 田中 忠吉
155 菅江 俊雄
156 小野 利助
158 川野 千里
159 徳田 数恵
160 林 貞助
162 渡辺 慎吾
164 前田 義雄
ブレウ四区
163 柴田 照司
165 木田 周次郎
168 脇本 ヌイ
170 佐藤 巳之松
171 土山 五郎
172 佐藤 正男
175 今 米太郎
176 設楽 猶一
ブレウ五区
150 細川 悦次郎
151 柴田 寛
185 栗山 光次
[illegible] 上里 盛夫
日高 薫実
ブレウ六区
189 高橋 総十郎
186 村上 辰之助
195 佐藤 学
201 野林 仁三郎
205 鈴分 由一

190 木下 又一
195 今里 基一
204 谷川 憲一
194 木下 昌
207 今村 靖一
218 鈴分 登良一
210 和田 茂二
ブレウ八区
229 内谷 忠雄
231 五十嵐 明
233 吉留 清
241 小山 勇
242 木崎 衛
243 佐藤 健吾
244 小山 亨
247 茂野 定
251 佐々木 常雄
252 迫田 政太郎
ブレウ一〇区
265 千葉 太平
266 千葉 太刀夫
268 江畑 家俊

269 坂口 博
270 古家 勇
271 城野 静
273 中野 誠信
274 山口 寿五郎
275 鈴木 與惣治
272 大串 駒雄
ブレウ一一区
307 渡辺 武人
311 酒井 忠次郎
313 渡辺 一
315 渡辺 兼吉
317 若枝 利治
319 若枝 義之
312 沼沢 谷蔵
318 黒沼 藤丸
322 伊藤 亀之助
307 木村 義一
321 谷末 繁美
[illegible] 原 常雄
片平 七郎

1934年6月末日邦人総数　1,511人
（内訳）
社員及家族……………… 38名
その他（単独使用人） 47名
使用人家族……………… 402名
独立……………………… 1,024名
1940年10月1日現在数
家族総数60戸
邦人 224名　男 117名　女 107名
国籍保有なき者85名　男40　女45
計 309名　男 157名　女 152名
1941年10月1日現在
家族総数65戸
邦人 213名　男 112名　女 101名
日本国籍なき者93名　男42　女51
計　男 154名　女 152名
総数　306名

先没者名簿

始一九二九年一月
至一九八四年一二月

氏名	死亡年月日	年令	出身県
石井島市	29・2・19	21	福岡
新垣武	29・9・20	1	沖縄
石毛澄子	29・10・26	2	千葉
神永照男	29・11・9	2	福島
吉原トメ子	29・12・15	1	北海道
大橋ゆき	29・12・29	29	静岡
遠藤治八	30・1・29	2	香川
尾松伯隆	30・2・15	1	福島
土居小太郎	30・5・21	38	広島
山口典人	30・8・12	3	山形
渡辺キサノ	30・9・4	30	鳥取
日高逸雄	31・1・19	25	広島
前田トキ	31・1・24	22	北海道
久保田ウメ	31・1・26	50	香川
徳田実	31・3・9	2	島根
塩崎市太郎	31・4・15	38	愛媛
須藤静子	31・4・24	1	福島
梶原稔夫	31・4・28	2	山梨
平間筆	31・5・5	21	宮城
山口鶴重	31・5・23	2	山形
永井里雄	31・5・24	1	北海道
福島ミネ	31・7・8	27	北海道
仲山桂	31・9・13	10	北海道
林勝蔵	31・12・6	63	北海道
多田昭之	31・11・19	3	岩手
福地ユキコ	32・1・1	1	沖縄

氏名	死亡年月日	年令	出身県
寺崎照子	32・1・18	2	山形
笠原イシ	32・1・23	67	新潟
片木幸春	32・1・28	1	香川
田中福寿	32・2・3	1	福島
坂本恵志	32・2・9	1	熊本
茂泉栄子	32・2・15	2	宮城
深水澄子	32・2・16	3	熊本
小笠原勝啓	32・2・22	4	香川
桐野雪子	32・3・18	24	宮崎
前田直	32・3・31	1	北海道
佐藤キトシ	32・4・4	33	静岡
渡辺美代	32・4・15	4	山形
小川鶴吉	32・5・30	74	静岡
大河原信子	32・6・24	1	福島
成沢ヒデ子	32・6・6	1	北海道
城尾光治	32・9・6	60	熊本
片平光子	32・10・8	1	福島
小出竹蔵	32・10・15	81	北海道
八巻拓	32・10・20	1	宮城
代田かね	32・11・14		
代田好男	32・11・23	10	北海道
土山慎一郎	32・11・28	15	北海道
助川藤吉	32・12・25	23	北海道
長野一行	32・12・25	21	北海道
渡辺ソデ	33・1・3	35	沖縄
福地ヨシ子	33・1・1	1	沖縄
柳橋アグリ	33・3・9	4	山形
藤江金平	33・3・19	27	北海道
比嘉清政	33・3・22	1	沖縄
子葉ことと	33・4・22	26	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
前田謙	37・1・29	4	北海道
竹下キエ	37・2・15	12	熊本
山下ナル	37・3・7	41	福岡
沢田トネ	37・5・9	42	熊本
茂泉栄子	37・6・22		
深水澄子	37・6・25	52	
小笠原勝啓	37・7・25	30	熊本
桐野雪子	37・7・24	56	熊本
前田直	37・7・31	22	北海道
佐藤キトシ	37・7・31	57	熊本
渡辺美代	37・10・26	48	熊本
小川鶴吉	37・11・2	57	熊本
大河原信子	37・11・8	1	宮城
成沢ヒデ子	37・11・30	19	山形
城尾光治	37・11・30		
沼沢末蔵	37・11・30	33	
佐藤フジノ	37・11・8	1	宮城
徳横イワ	37・11・2	57	熊本
沢田弥太郎	37・10・26	48	熊本
土山秀夫	37・7・31	22	北海道
村上種作	37・7・24	56	熊本
徳横巌	37・7・25	30	
江口保治	37・6・25	52	
小山シズ	37・6・22	57	
沢田トネ	37・5・9	42	熊本
山下ナル	37・3・7	41	福岡
竹下キエ	37・2・15	12	
前田謙	37・1・29	4	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
林トシ	39・2・3	1	
千葉猛	39・2・19	1	
月脇豊	39・3・11	30	
土山政枝	39・5・23	14	北海道
庄司キクエ	39・7・13	34	
野林梅香	39・6・4	1	
渡辺国利	39・6・1	2	
中川多利三郎	39・6・1	69	
測上マシユ	39・5・22	2	熊本
川西リリ	39・5・5	1	
遠藤倉吉	34・4・11	70	福島
小野利雄	34・4・2	21	宮城
小田政義	34・3・23	22	東京
村瀬勇	34・3・14	1	
岩田民雄	34・1・31	4	
八巻日和	34・1・26	4	宮城
多田キクノ	34・1・17	24	岩手
秋吉実美	34・1・19	11	
笹井直義	34・1・14	35	北海道
渡辺歌子	33・10・4	2	
土居勝	33・10・9	6	広島
阿部キヌ子	33・9・30	22	山形
横本吉光	33・9・23	1	
阿部みゑ	33・9・18	76	山形
大河原友子	33・9・17	1	福島
竹田サキ	33・9・13	87	
横田昭彦	33・9・7	4	宮城
佐藤昌右衛門	33・9・6	48	
川野キヨ	33・9・4	16	
山内利蔵	33・8・30	44	北海道
梅木ミヨ子	33・8・14	1	広島
土山音二	33・8・10	8	広島
小野笑子	33・7・31	9	北海道
測上哲夫	33・7・16	5	熊本
庄司二三	33・7・7	36	
野林梅香	33・6・4	34	宮城

氏名	死亡年月日	年令	出身県
西尾早苗	43・4・7	1	
諸富ミユキ	43・7・7	1	
長田フランシスコ	43・7・27	2	
戸田雪江	43・9・15	3	
庄司芳江	43・10・31	23	宮城
測上鶴子	43・11・9	4	熊本
笠原ハルミ	44・2・23	1	新潟
河本ジョアン	44・3・9	24	
仲丸ヒロミ	44・3・27	1	
及川サチ子	44・5・4	3	
安達ヨシ子	44・5・22	2	
菅江登紀子	44・5・25	12	山形
小川高士弥	44・8・19	1	
山崎照江	44・7・4	5	
菅江俊雄	45・1・7	33	山形
伊藤睦男	45・1・4	1	
遠藤政記	44・8・31	29	
菅江俊雄	45・1・7	1	
岡部重良	45・3・7	36	北海道
鈴木キヨ子	45・4・14	1	山形
谷東百合子	45・6・20	2	
山田スエノ	45・9・10	47	広島
菅江正幸	45・9・20	3	山形
蒐原俊彦	45・10・7	1	
越智道子	45・11・5	2	
柴田ハツヨ	45・11・17	46	
菅江良幸	45・12・24	1	山形
野口照夫	46・3・16	3	福岡
柳橋徳次郎	46・8・7	46	山形
西尾緑三	46・10・5	3	北海道
岸善助	46・12・20	58	
小田俊成	47・1・21	1	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
上里節枝	34・5・10	1	
上芝千代子	34・5・14	1	
佐藤久二郎	34・6・25	1	宮城
中ノ目忠	34・7・6	19	
黒川ササ子	34・7・12	5	北海道
今村イツ子	34・7・19	3	広島
八巻丈夫	34・7・25	1	宮城
森重幸	34・7・25	11	沖縄
玉寄和子	34・8・7	2	福島
菅野正明	34・8・8	36	熊本
菅原小次郎	34・8・20	27	山形
高山ハルエ	34・8・21	35	熊本
城野重記	34・9・15	1	福島
関アミ子	34・10・5	4	広島
山田スミレ	34・10・16	52	長野
山田勲一	34・11・2	47	熊本
矢野定	34・11・6	1	鹿児島
栗山光雄	34・11・8	16	宮城
小野コフ	34・12・8	1	
日高文子	34・12・8	10	広島
綿貫良子	35・1・4	62	静岡
松井音松	35・1・5	44	北海道
滝谷藤松	35・2・20	63	宮城
西尾司留吉	35・2・22	4	山形
庄司芳雄	35・3・16	1	熊本
吉田ベードロ	35・3・22	18	広島
竹田毅子	35・3・8	21	香川
高山義兼	35・2・24	1	山形
奥山勝江	35・2・22	15	
梅尾松数義	35・3・8	21	
木タマエ	35・3・22	18	広島

氏名	死亡年月日	年令	出身県
押切小夜子	48・2・25	1	山形
諸富ミサエ	48・4・17	1	
千葉太刀夫	48・8・30	38	
渡辺助七	48・9・17	51	宮城
千葉統吉	49・7・24	4	
千葉幸一	49・7・26	7	
西尾ヒロシ	49・8・7	3	
山崎貞美	49・8・13	38	
野林スマ子	50・1・13	7	
阿部典之助	50・2・19	60	
仲丸辰夫	50・2・23	22	
関正男	50・6・5	6	
山田里子	50・12・14	3	広島
伸丸佐市	50・12・22	57	
斉藤春市	51・1・20	39	
野口ツギ	51・7・18	65	
日高信章	52・1・15	20	
乙井佐吉	52・1・27	44	
野林仁三郎	52・2・4	42	
永野良子	53・3・17	26	
影山宣夫	54・1・9	3	
林スミエ	54・3・36	1	
松永隆夫	54・4・7	5	
徳田サカエ	54・5・20	8	
谷末マルガリーダ	54・7・1	1	
杉山義浩	54・8・11	17	
近藤イザベル	54・8・23	1	
岩谷アイ子	54・12・31	5	
山田千鶴子	55・1・1	24	
佐藤秋子	55・2・1	26	
押切小夜子	48・2・25	1	山形
諸富ミサエ	48・4・17	1	
千葉太刀夫	48・8・30	38	
渡辺助七	48・9・17	51	宮城
千葉統吉	49・7・24	4	
千葉幸一	49・7・26	7	
西尾ヒロシ	49・8・7	3	
山崎貞美	49・8・13	38	
野林スマ子	50・1・13	7	
阿部典之助	50・2・19	60	
仲丸辰夫	50・2・23	22	
関正男	50・6・5	6	
山田里子	50・12・14	3	広島
伸丸佐市	50・12・22	57	
斉藤春市	51・1・20	39	
野口ツギ	51・7・18	65	
日高信章	52・1・15	20	
乙井佐吉	52・1・27	44	
野林仁三郎	52・2・4	42	
永野良子	53・3・17	26	
影山宣夫	54・1・9	3	
林スミエ	54・3・36	1	
松永隆夫	54・4・7	5	
徳田サカエ	54・5・20	8	
谷末マルガリーダ	54・7・1	1	
杉山義浩	54・8・11	17	
近藤イザベル	54・8・23	1	
岩谷アイ子	54・12・31	5	
山田千鶴子	55・1・1	24	
佐藤秋子	55・2・1	26	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
斉藤サチ子	55・2・11	1	
千葉ミヨ子	55・2・15	2	
草野トラ子	55・3・4	28	
門関マキ子	55・11・10	1	
諸富徳太郎	55・11・23	82	
久島ミチ子	55・11・26	2	
斉藤ヨシ子	55・12・9	1	
細江アイレーキャスト	56・1・16	4	
日高キミ子	56・4・1	1	
中川アサノ	56・6・2	40	岩手
松永洋子	56・7・8	1	
永井喬	56・7・17	57	
山田寿美子	56・8・25	27	
石川秀太郎	56・9・25	72	
稲沢与三郎	56・10・15	23	
松永作太	56・12・19	76	
音或光子	56・12・20	17	
加藤友治	56・12・31	58	山形
池田博美	57・5・6	21	福岡
梅村かちよ	57・6・13	47	
吉丸源	57・6・16	77	
大村寛一	57・7・20	59	
鈴木スミエ	57・7・31	1	
長井浜一	57・10・3	68	
梅村ケイ子	57・11・5	1	
吉田耕	57・12・9	69	
仁平ケイ子	57・12・24	1	
佐藤ヒサエ	57・12・29	1	
鎌田光子	58・1・3	46	
野田正一	58・3・10	35	
柳橋スエ	65・9・21	60	
茂木熊雄	65・9・29	54	熊本
草野正美	65・10・20	2	
関勝四郎	65・11・17	53	
関マキ子	65・11・18	67	
菅野弥七	65・12・6	35	
横倉たま	66・1・16	35	
池田博美	66・5・20	53	
田中忠吉	66・6・24	53	
木下恵	66・7・4	36	
杉野忠夫	66・7・29	64	
永野敬士	66・6・4	45	
鈴木スミエ	66・7・7	55	
大村寛一	66・7・20	53	
吉丸ハヤ	66・7・16	35	
梅村かちよ	66・7・13	67	
池田博美	66・12・6	53	
加藤友治	66・12・31	2	
音或光子	66・12・20	54	熊本
松永作太	66・12・19	60	
稲沢与三郎	66・10・15	1	
石川秀太郎	66・9・25	28	
山田寿美子	66・8・25	2	
永井喬	66・7・17	1	
松永洋子	66・7・8	1	
中川アサノ	66・6・2	1	
日高キミ子	66・4・1	1	
細江アイレーキャスト	66・1・16	4	
斉藤ヨシ子	65・12・9	1	
久島ミチ子	65・11・26	2	
諸富徳太郎	65・11・23	82	
門関マキ子	65・11・10	1	
草野トラ子	65・3・4	28	
千葉ミヨ子	65・2・15	2	
斉藤サチ子	65・2・11	1	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
桜田ヨリエ	58・5・17	1	
千葉明	58・8・24	20	
野原源吉	58・8・24	50	
村上哲治	58・10・31	1	
玉島清子	58・11・29	39	
田中勉	58・12・24	1	
山口雄二	59・2・1	1	
津田ハツエ	59・3・3	2	
宮川源四郎	59・4・5	65	
矢野光子	59・4・23	5	
佐藤ミチ子	59・12・24	8	
天野睦男	60・2・9	1	
河村秀行	60・2・27	1	
佐藤義行	60・3・1	1	
梅村亮一	60・3・25	1	
設楽ナオミ	60・8・16	1	山形
折笠金次	60・12・8	64	
遠藤庄六	61・1・30	56	
坂本伯江	61・2・9	1	
加藤まさえ	61・4・17	63	
深水幸子	61・4・23	27	
自川東次郎	61・4・1	73	
宮川政喜	61・3・31	67	
斉木エベラルド	61・2・12	3	
大串清美	61・2・17	28	
木下イト	61・2・29	63	
高野キン	61・3・20	62	
松崎喜代司	61・3・28	62	
日野進	61・4・25	64	
中田ミツ子	61・5・10	8	
竹下勝二	61・5・27	81	
田所義民	61・6・25	22	宮崎
青木よし子	61・6・29	31	北海道
細川卯之助	61・12・22	94	
安藤典子	61・12・31	20	
久保田実	62・3・28	58	宮崎
永井ふじの	62・4・1	66	
江畑軍俊	62・4・2	72	
関はるよ	62・4・15	56	
諸股春美	62・1・20	30	
野田信行	62・6・14	19	
斉藤幸一	62・6・5	1	
関弘	62・7・19	65	栃木
熊谷秀男	62・8・1	1	
茂古沼一三	62・9・8	34	
大島のぶ子	62・9・7	19	秋田
池田軍治	62・8・4	61	福岡
神立忍	62・7・18	1	
後藤ケサミ	67・8・15	47	
田中角五郎	67・9・24	60	熊本
浜口末松	67・9・25	62	
大機鉄男	67・11・2	1	
一色寿	67・12・3	57	
拝笠金次	68・12・8	63	
遠藤庄六	68・12・31	28	
坂本伯江	68・1・17	62	
斉木エベラルド	68・1・29	60	
宮川政喜	68・2・17	60	
自川東次郎	68・2・20	62	
深水幸子	68・3・23	62	
加藤ふちの	68・4・25	64	
大串清美	68・7・24	52	
木下イト	68・7・29	63	
高野キン	68・7・29	67	
松崎喜代司	68・7・30	68	
日野進	68・10・5	68	
田所義民	68・6・25	68	
竹下勝二	56・7・17	72	
中田ミツ子	68・7・24	68	
日野進	68・7・29	67	
松崎喜代司	68・6・28	68	
高野キン	68・2・20	68	
木下イト	68・2・17	68	
大串清美	68・1・29	68	
加藤まさえ	68・1・17	68	
深水幸子	68・2・20	68	
自川東次郎	68・2・17	68	
宮川政喜	68・2・31	61	
斉木エベラルド	61・2・12	61	
坂本伯江	61・2・9	61	
遠藤庄六	61・1・30	61	
拝笠金次	60・12・8	60	
設楽ナオミ	60・8・16	60	
梅村亮一	60・3・25	60	
佐藤義行	60・3・1	60	
河村秀行	60・2・27	60	
天野睦男	60・2・9	60	
佐藤ミチ子	59・12・24	59	
矢野光子	59・4・23	59	
宮川源四郎	59・4・5	59	
津田ハツエ	59・3・3	59	
山口雄二	59・2・1	59	
田中勉	58・12・24	58	
玉島清子	58・11・29	58	
村上哲治	58・10・31	58	
野原源吉	58・8・24	58	
千葉明	58・8・15	58	
桜田ヨリエ	58・5・17	58	

氏名	死亡年月日	年令	出身県
野呂きみ	61・8・5	1	
岩本藤松	61・8・7	57	
梅村ミチ子	61・8・13	2	
伊藤孝	61・9・5	65	
八幡菊男	61・9・7	52	
佐藤孝	61・9・20	2	
吉岡重記	61・10・19	47	
土屋秀子	61・11・13	2	
折笠太三	61・11・23	1	
黒沢ふみ	61・12・17	45	
山田美也子	61・12・24	1	
小林正	62・1・1	62	
工藤勝子	62・1・25	62	
小長野フミ子	62・1・24	62	
節子・坂上宮川	61・12・26	61	
平田清喜	62・2・14	62	
加藤豊子	62・3・13	62	
木村昌三	62・3・24	62	
山田輝満	62・3・31	62	
大野源太郎	62・4・6	62	
関道子	62・7・2	62	
海谷千栄子	62・7・5	62	
村上辰之助	62・7・30	62	
岸後彦	62・8・20	62	
田中忠吉	62・8・25	62	
木村イト	62・9・29	62	
生井操	62・11・16	62	
松本レイ子	62・12・4	2	
花輪かめよ	62・12・11	58	
福島みすえ	63・1・2	50	
野原秀俊	69・12・27	66	
大機勇三	70・2・22	9	
前田マツエ	70・4・22	81	宮崎
宮川茂七	70・6・27	49	
牧野渡	70・6・26	15	
川野美恵子	70・7・18	4	
鈴木美智	70・9・6	1	
岸山好晃	41・1・20	46	
横山久江	42・6・15	50	
信沢美穂一	70・11・2	66	
矢島小三郎	70・10・30	4	
矢内久江	71・1・4	7	青森
鈴木信次郎	71・2・13	81	
土屋利秋	71・4・30	0	
関勝治	71・5・16	60	
橋本イトノ	71・7・28	65	
片所キミ	71・9・6	71	
門関正志	71・11・5	1	
清井学	71・11	64	
斉木孝明	71・11・16	25	
北林司	72・3・13	1	
岸勝美	72・3・27	55	
池田みつえ	72・4・18	63	
稲沢博幸	72・6・1	1	
成瀬ミツ	72・6・3	53	
池田カネ	72・4・20	74	
信沢ミヤ	72・7・8	65	
鎗分登良一	72・7・18	89	広島
榎義雄	72・8・3	26	
山下千代子	72・11・21	2	
大機勇三	70・2・22	9	
前田マツエ	70・4・22	81	宮崎
宮川茂七	70・6・27	49	
牧野渡	70・6・26	15	
川野美恵子	70・7・18	4	
鈴木美智	70・9・6	1	
岸山好晃	41・1・20	46	
横山久江	42・6・15	50	
信沢美穂一	70・11・2	66	
矢島小三郎	70・10・30	4	
矢内久江	71・1・4	7	青森
鈴木信次郎	71・2・13	81	
土屋利秋	71・4・30	0	
関勝治	71・5・16	60	
橋本イトノ	71・7・28	65	
片所キミ	71・9・6	71	
門関正志	71・11・5	1	
清井学	71・11	64	
斉木孝明	71・11・16	25	
北林司	72・3・13	1	
岸勝美	72・3・27	55	
池田みつえ	72・4・18	63	
稲沢博幸	72・6・1	1	
成瀬ミツ	72・6・3	53	
池田カネ	72・4・20	74	
信沢ミヤ	72・7・8	65	
鎗分登良一	72・7・18	89	広島
榎義雄	72・8・3	26	
山下千代子	72・11・21	2	

アマゾン日本人移住
五〇年祭慶祝団名簿

氏名	死亡年月日	年令	出身県
佐藤初子	72・10・29	65	
後藤信広	73・2・27	24	熊本
石川正行	73・3・16	62	
山田久子	73・5・9	56	
斉木マキ	73・5・13	84	
鶴田藤勘	73・5・15	67	
遠藤クラ	73・5・15	82	
大橋義久	73・6・19	64	
小林宗雄	73・6・22	38	
西尾勝利	73・6・26	68	
神立クラウジオ	73・8・4	1	
伊藤トキ子	73・10・13	43	山口
安積サエ	73・6・1	89	兵庫
鳴瀬　久左エ門	73・7・28	64	青森
菅谷カナヤのぶえ	74・3・6	1	栃木
一色ゆりえ	73・11・3	5	
菊池俊文	74・7・28	24	
武藤徳	74・7	67	
鈴木長男	74・8・19	28	
永井則貴	74・8・22	7	
鳴瀬みち	74・8		青森
斉藤巌	74・6・18	37	
野原俊夫	74・8・13	13	
和田ルシア百合子	74・5・3	1	神奈川
藤島京子	74・9・14	25	
加藤一三	74・9・19	2	
佐藤正邦	74・11・27	27	
佐藤ていこ所江	74・11・27	19	
仁平次郎	75・4・12	60	
頼川竜夫	75・4・26	47	
頼川末寿	75・5・12	84	
慶祝団委員長	千葉三郎		
夫人	千葉礼子		
元山形県知事	安孫子藤吉		
中南米国会議員代表	田付景一		
日本ブラジル中央会理事長	花村仁八郎		
経団連副会長	中西健次		
アマゾニア協会会長	佐々木正賢		
国際マンジョカ開発㈱社長	上村昌司		
国際協力事業団理事	近藤英一郎		
国際協力事業団移住国内事業部長	赤羽宏之		
家族会連合会副会長	小山公一郎		
読売新聞記者	川上紀一		
鐘淵紡績取締役	川上節子		
千葉県知事	宗島文理		
夫人	鎌形敏夫		
千葉県庁秘書課長	鈴木　勝		
千葉県議会議員	今野房治		
〃	井上達雄		
千葉県議会議員	坂下国蔵		
千葉県議会事務局長	窪田久吉		
宮崎県議会議長	郷田　実		
宮崎県議会事務局長	手塚満雄		
宮崎県町村会長	橋本雄太郎		
栃木県庁出納長	平山正二		
栃木県議会議員	吉田晴保		
〃	今平利三		
〃	橋詰又一郎		
〃	熊谷辰生		
〃	米谷金之助		
〃	桜庭堅次郎		
〃	坪野正司		
〃	金木良三		
〃	小野　功		
〃	柴田梵天		
〃	大野操一郎		
〃	野木将典		
〃	倉野浩一		
〃	東　信儀		
〃	四ヶ所ヨシ		
〃	門前馨子		
〃	安達勇三		
〃	石井久夫		
〃	今村春生		
〃	池田きみ		
〃	植木　寿		
〃	浦本良助		
〃	大塚政子		
〃	神崎　文		
〃	斉藤千鶴子		
〃	佐々木ふく江		
〃	佐藤与四郎		
福岡県海外協会事務局長	鈴木　馨		
〃	高橋時春		
〃 課長補佐	田中紀久子		
秋田県庁農政部普及教育課参事	鶴　玲子		
秋田県庁農政部普及教育課課長補佐	寺部かつ		
石川県庁農政課課長	中村浩三		
東京農業大学	中村康子		
〃	今村忠雄		
国士舘大学総長	松崎徳次		
夫人	望月文夫		
〃 体育学部教授	上戸国秋		
〃 学生部次長	上戸コトエ		
〃 秘書課長	八代重信		
〃 ニューヨーク支部長	吉岡征治		
芙蓉会会長	近藤春彦		
〃 理事長			
書道家			
㈱みかど造園			
日生学園高等学校副校長			
東京都世田谷区			
元南米拓殖パラー総支配人			
運動具店主			
㈶獅子吼会会長夫人			
神奈川県小田原市			
㈱中村ビル管理事務所主婦			
㈱松陰会館社長			
㈱鈴木楽器店社長			
日本教育新聞社社長			
大妻女子大学生			
㈱協和土建工業代表取締役			
神奈川県茅ヶ崎市			
千葉三郎事務所秘書			
㈱中村ビル取締役社長			
アマゾニア協会会長			
五〇年祭日本側委員会事務局長			
夫人			
慶祝団委員会事務局次長			
アマゾニア協会事務局次長			
望月塗料店主			
上戸学園高等学校及女子短期大学学園長			
上戸学園女子短期大学学長			
千葉県議会議員			
千葉三郎事務所秘書			
ツニブラトラベル㈱取締役			
ツニブラトラベル㈱旅客営業部			
三井アルミ社長			
北海道札幌市			
夫人			
山形県寒河江市			
㈱大通公園ホテル代表取締役			
東京都町田市			
千葉県習志野市			
福島県郡山市			
栃木県黒磯市			

氏名	死亡年月日	年令	出身県
鶴崎静子ルイーサ	75・8・23	32	
大島孫太郎	75・9・8	59	秋田
遠藤滝三	75・9・23	88	
日野英生	75・11・1	33	
角田直美	76・1・27	20	宮崎
岸本治喜	76・3・3	70	北海道
伊藤勇	76・1・29	41	熊本
園田新子	76・2・14	40	
浜口和子	76・3・4	65	
川越邦夫	76・4・9	38	山口
山根信俊	76・4・29	42	
島川五月	76・6・13	32	
細川友子	76・8・14	41	
細川修	76・8・10	73	東京
岩間敬造	76・10・22	77	
佐藤義雄	76・12・16	51	
岡部荘	77・1・23	67	北海道
行田かほる	77・2・11	1	
江口聖子	77・3・10	39	栃木
矢島繁	77・4・13	6	
大串菊地エリカ	77・3・29	61	福島
仲村金作	77・3・10	71	
松崎淳三郎	77・8・26	3	宮崎
神之薗ルイス至	77・8・20	43	
斉藤上巳	77・9・15	56	
西崎重良	77・7・13	38	宮崎
高野豊	77・9・16	1	東京
茂めぐみ	78・1・11	88	
西崎賢治	78・3・30	1	青森
伊藤ウナエル牧男	78・6・21	55	青森
谷地村キヤ	78・1・3	31	
伸村正人	78・4・20	74	
山田浅吉	78・7・19	60	
牧野忠男	78・8・10	56	宮崎
山下美津雄	78・12・12	60	
横倉いつ	78・12・15	73	
小野太平	79・2・5	1	
一柳野沢友樹	79・4・25	45	
河上栄一	79・7・23	1	東京
茂さやか	79・7・28	60	青森
鎌田喜久三	79・8・6	75	富山
北林佐太郎	79・8・20	1	
矢内英美	79・9・29	73	
浜口とみ	79・9・24	71	
和田ふよ	79・8・23	50	青森
伊藤みや	79・11・21	75	
和田茂二	79・8・23	26	宮崎
西田義光	79・12・28	2	宮崎
久保田純子	78・12・31	38	
近藤修	79・11・28	1	
田代オスワルド	79・12・17	79	熊本
宮川茂寿	80・1・3		
山田レニンソン求	80・1・7		
黒木喬	80・2・22		
小長野義徳	80・1・19		
木村浪江	80・3・13		
永野吉春	80・4・24		
野沢茂雄	80・6・24		
石川道善	80・8・7		
石川しずか	84・8・4		
岡田直雄	80・8・27		
長井一男	80・9・17		
山野至弘	79・12・10		
日高二三	81・1・17		
西尾あい	81・2・3		
五島喜助	81・5		
原屋敷東	81・5・16		
江口ローシアのり子	81・10・6		
新井啓紀	81・12・16		
太田幸一	82・1・14	72	
伊藤秀一	82・1・17		
高木清人	82・2・20		
松崎千秋	82・2・24	1	福島
西崎博子	82・5・19		
渡辺九郎	82・6・21		
加藤智ネルソン	82・9・7	41	
堤静治	82・10・12		
黒木智子	82・11・28		
保科吉次郎	83・7・11		
渡辺健郎	83・9・9		
山口ツヤ	83・9・7		
岡部孝子	83・9・6		
田中サヨ	83・12・6		
長浜栄造	84・1・24		
岡田義男	84・1・24		
菊地康宏	84・1・31		
田中エナヨ	84・3・23		
藤橋ロベルト	84・5・28		
中川春蔵	84・7・29		
鎌田課	84・8・4		

福島県福島市　高橋一三
㈱市田グラフィック・デザイナー　西垣美樹子
福岡県東福岡財務事務所直税課　野田　毅
宗像病院　野田悦子
㈱高砂香料工業秘書室　八戸孝夫
東京都新宿区　平沢照子
群馬県吾妻郡　平形初五郎
佐賀県佐賀市　諸石恒六
㈱高砂香料工業海外事業部　山田伸一
当別町役場農業委員　山内敬司
夫人　山内美恵子
元マウエス居住者　崎山盛繁
九州地区青年会議所　藤野健治
〃　橋本量太郎
〃　池田　寿
〃　入部五郎
〃　板橋元昭
〃　岩崎史城
〃　金元正治
〃　木下彰子
〃　宮本　修
〃　諸岡涼策
〃　岡崎洋蔵
〃　関　文彦
〃　四宮嘉助
〃　白木タケトシ
〃　須藤眞司
〃　田籠勝彦
〃　田籠武彦
〃　濱口潤一郎
〃　田丸公紀
〃　田中孝直
〃　吉永正義
パストス　萩原はるゑ
〃　溝部　優
〃（高拓生）　佐藤弥門
〃　横井寅吉
サンパウロ　斉藤伊助
〃　平田けい子
〃　原沢和夫
〃　土田清子
〃　岩瀬カメコ
モンテ・アレグレ　上野

トメアスー移住地と関連ある医療機関及び福祉団体代表者名

日本看護協会会長　大塚文子
東京女子医科大学事務局　田代ろく
〃　放地　巧
三井記念病院　中谷光子
芙蓉マンション　登丸かつ
関西医科大学附属病院
国家公務員共済組合連合会　高田利子
病院本部　佐藤房子
久留米大学病院　嶋田ヤス
北九州市聖小崎育児園　木藤幸子
社会福祉法人芙蓉会会長　四ヶ所ヨシ
医療法人社団芙蓉会　門前馨子

〔参考文献〕

蒲生正男
　一九五七「アマゾーニアにおける日系コロニアの同化過程―トメアスウ植民地」泉靖一編『移民』四六一―五三三頁　東京・古今書院
池田重二
　一九五八『アマゾン邦人発展史』（印刷）サンパウロ新聞社
　一九六五『ブラジル日本移民人国記』上・下巻　日伯文化出版社
汎アマゾニア日伯協会カスタニャール支部編
　一九七五『カスタニャール邦人・開拓五十年の歩み』　日本美術印刷出版社

編集後記

トメアスー開拓五〇周年を記念して本書を発刊いたしました。

太平洋戦争を挟んで五〇年、トメアスーの歴史を多くの史料を通じて眺める時、諸先輩の偉大な業績を知るとともに、時代の政治、経済の有り様が移住地にも色濃く反映していることが、はっきりと理解出来ます。

本書は、そうした視点に立って回顧編に中心をおき、諸先輩の手記や、一枚一枚の写真に多くのものを語っていただくように努めました。

しかしながら、意あまって満足すべきものが出来ず、年数も経過してしまい、編集委員一同反省している次第です。

本書によって、激動の半世紀を回顧していただくとともに、本書が輝かしい未来につながるひとつの道標となれば幸甚に存じます。

終わりになりましたが、編集にあたり御協力をいただきました地元有志、入植者の方々、在ベレン総領事館、国際協力事業団現地機関、日系諸団体、トメアスー総合農業協同組合、トメアスー文化協会、農村振興協会、アマゾン・トラベル・サービス旅行社、ヤンコール山本商会、サンパウロ人文研の方々、並びに本書の制作に多くの御教示、御支援をいただきました日本美術印刷出版社、草野恒雄写真館の諸氏に対し、厚く御礼申し上げます。

トメアスー開拓五〇周年史

編集委員会

委員長　金義夫

委員　工藤昭夫　海谷英雄

松崎紀太郎　新井範明

峰下輿三郎　鈴木耕治

諸石輝雄　角田修司

鶴崎宗雄　大西邦光

浅野純麗　本弘道崇

永井アキラ　沢田アルマンド

永野テオドロ　菊池エバンドロ

近藤ネルソン　武田ジュベルト

日高ジエルマーノ

特別委員（監修）

平賀練吉

大沼春雄

武田武志

みどりの大地トメアスー開拓５０周年史

〔非売品〕
発行　１９８５年１１月１５日
発行者　トメアスー開拓５０周年祭典委員会
発行所　トメアスー文化協会
Associaçao Cultural de Tome-Acu
CEP 68685 Municipio de Tome-Acu-Para-Brasil

印刷所　日本美術印刷出版社
Grafica e Editora Nippon, art Ltda. Rua Conselheiro Furtado, 864 SP-Fone:278-7897